

京都府遺跡調査概報

第 5 冊

1. 狐谷横穴群
2. 広隆寺跡
3. 長岡宮跡第119次

1982

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足しました。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることを考える考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和56年度は34件の調査を実施しました。これらの調査結果の概要は、「京都府遺跡調査概報」第1冊から第4冊までにまとめて既に刊行いたしました。この第5冊に収めた概要は、昭和57年度まで継続して調査したもの及び昭和56年度末まで現地調査を実施した3件です。このうち「広隆寺跡」で検出しました梵鐘鑄造遺構については、これから復原模型を作成する予定です。また、美濃山狐谷横穴群は、内部に保存処置をしたうえで、学校建設予定地内に保存することが決定しています。

当調査研究センターでは、遺跡の保存のためあらゆる努力をするとともに、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用に努めていく所存であります。この「京都府遺跡調査概報」は、正式の調査報告としてまとめる前に調査結果の概要を報告するために刊行するものであります。既に刊行している「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町教育委員会をはじめ、関係機関の御協力を受け、さらに、炎天の下、厳寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって、これらの多くの関係者に厚くお礼を申し上げます。

昭和57年7月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 狐谷横穴群 2. 広隆寺跡 3. 長岡宮跡第119次
を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 狐 谷 横 穴 群	八幡市美濃山字狐谷	昭57. 1.25 昭57. 4.28 昭57. 5.14 昭57. 7.17	京都府教育委員会	久保田建士
2. 広 隆 寺 跡	京都市右京区太秦蜂ヶ岡	昭56. 7.13 昭56. 8.20 昭57. 1.12 昭57. 3.12	京都府警察本部	石尾 政信
3. 長 岡 宮 跡 第119次	向日市寺戸字南垣内	昭57. 3.17 昭57. 5.13	京都府教育委員会	竹井 治雄

3. 本冊の編集には、調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1. 狐谷横穴群発掘調査概要	1
2. 広隆寺跡発掘調査概要	19
3. 長岡宮跡第119次発掘調査概要	56

挿 図 目 次

狐 谷 横 穴 群

第 1 図	調査地位置図	1
第 2 図	調査地地形図	2
第 3 図	2号横穴実測図	4
第 4 図	3号横穴実測図	5
第 5 図	4号横穴実測図	6
第 6 図	5号横穴実測図	7
第 7 図	6号横穴実測図	8
第 8 図	7号横穴実測図	9
第 9 図	8号横穴実測図	10
第 10 図	9号横穴実測図	11
第 11 図	小横穴実測図	12
第 12 図	炭充填土壌実測図	12
第 13 図	方形周溝遺構実測図	13
第 14 図	横穴群出土土器実測図(1)	14
第 15 図	横穴群出土土器実測図(2)	16
第 16 図	炭土壌・方形周溝遺構出土土器実測図	17

広 隆 寺 跡

第 17 図	調査地周辺の遺跡	20
第 18 図	調査地位置図	21
第 19 図	B地区平面図	23
第 20 図	梵鐘鑄造遺構切り取り作業(1)	24
第 21 図	梵鐘鑄造遺構切り取り作業(2)	25
第 22 図	梵鐘鑄造遺構切り取り作業(3)	26
第 23 図	土器溜り SK 13 周辺平面図	27
第 24 図	梵鐘鑄造遺構 SK 22 周辺平面図	29
第 25 図	梵鐘鑄造遺構 SK 22 実測図	30

第 26 図	土器溜り SK 13 出土遺物実測図	31
第 27 図	土器溜り SK 13 出土遺物実測図・拓影	33
第 28 図	SD 16 出土遺物実測図	34
第 29 図	SK 22 出土遺物実測図・拓影	35
第 30 図	梵鐘鑄型実測図(1)	36
第 31 図	梵鐘鑄型実測図(2)	37
第 32 図	瓦実測図・拓影(1)	39
第 33 図	瓦実測図・拓影(2)	41
第 34 図	瓦実測図・拓影(3)	42
第 35 図	瓦実測図・拓影(4)	43
第 36 図	包含層出土遺物実測図・拓影	45
第 37 図	改葬骨容器実測図	46
第 38 図	改葬骨容器内の小型壺実測図	46

長岡宮跡第119次

第 39 図	調査地位置図	56
第 40 図	トレンチ位置図	57
第 41 図	トレンチ名称図	58
第 42 図	A トレンチ北壁断面実測図	58
第 43 図	溝 SD 12 断面実測図	59
第 44 図	A・H トレンチ遺構実測図	60
第 45 図	土壇状遺構 SX 08 断面実測図	61
第 46 図	SX 08 溝 A 出土墨書土器実測図	61
第 47 図	溝 SD 12 出土遺物実測図	62
第 48 図	出土遺物実測図	65

付 表 目 次

広 隆 寺 跡

付表 1	遺物観察表	49
------	-------	----

図 版 目 次

狐 谷 横 穴 群

- 図版第1 (1)狐谷横穴群全景(航空写真) (2)調査前風景(西から)
- 図版第2 (1)調査前風景(南から) (2)調査前風景(北から)
- 図版第3 (1)横穴群検出状況(南から) (2)横穴群検出状況(西南から)
- 図版第4 (1)2号横穴全景(南から) (2)2号横穴遺物出土状況(真上から)
- 図版第5 (1)3号横穴全景(南から) (2)3号横穴遺物出土状況(南から)
- 図版第6 (1)4号横穴全景(南から) (2)4号横穴遺物出土状況(南から)
- 図版第7 (1)5号横穴全景(南から) (2)5号横穴遺物出土状況(西から)
- 図版第8 (1)6号横穴全景(南から) (2)6号横穴遺物出土状況(南から)
- 図版第9 (1)7号横穴全景(南から) (2)7号横穴遺物出土状況(南から)
- 図版第10 (1)8号横穴全景(南から) (2)8号横穴遺物出土状況(南から)
- 図版第11 (1)9号横穴全景(南から) (2)9号横穴遺物出土状況(南から)
- 図版第12 (1)9号横穴玄室から外景(北から) (2)小横穴全景(南から)
- 図版第13 (1)狐谷横穴群全景(東から) (2)狐谷横穴群(南から)
- 図版第14 (1)炭充填土壙検出状況(西から) (2)炭充填土壙完掘状況(南から)
- 図版第15 (1)方形周溝遺構全景(北東から) (2)方形周溝遺構全景(西から)

広 隆 寺 跡

- 図版第16 (1)A地区全景(西から) (2)A地区全景(東から)
- 図版第17 (1)B地区全景 調査前(西北から) (2)B地区全景 調査前(西から)
- 図版第18 (1)B地区全景(西から) (2)B地区全景(東から)
- 図版第19 (1)土器だまり SK 13 周辺(西から)
(2)瓦だまり SK 13 下層完掘後(西から)
- 図版第20 (1)梵鐘鑄造遺構 SK 22 (西から) (2)鑄型土台(定盤)残欠(南から)
- 図版第21 (1)改葬骨容器 墓 No. 1 (2)改葬骨容器 墓 No. 2
- 図版第22 (1)改葬骨容器と小型壺 墓 No. 3 (2)瓦だまり SK 24(北から)
- 図版第23 (1)SK 13 遺物出土状況 (2)SK 13 下層遺物出土状況
- 図版第24 土器だまり SK 13 出土遺物

- 図版第25 出土遺物
- 図版第26 出土遺物
- 図版第27 (1) SK 13 出土遺物 (土師器) (2) SK 13 出土遺物 (須恵器, 灰釉他)
- 図版第28 (1)包含層・その他の出土遺物 (土師器, 瓦質陶器)
(2)包含層・その他の出土遺物 (須恵器, 灰釉他)
- 図版第29 SK 13 下層出土遺物 軒丸瓦(1)
- 図版第30 SK 13 下層出土遺物 軒丸瓦(2)
- 図版第31 SK 13 下層出土遺物
- 図版第32 SK 22 出土遺物
- 図版第33 (1) SK 22 出土鑄型片 (2) SK 22 出土銅を含む破片
- 図版第34 (1) SK 22 出土溶融塊 (表面) (2) SK 22 出土溶融塊 (裏面)

長岡宮跡第119次

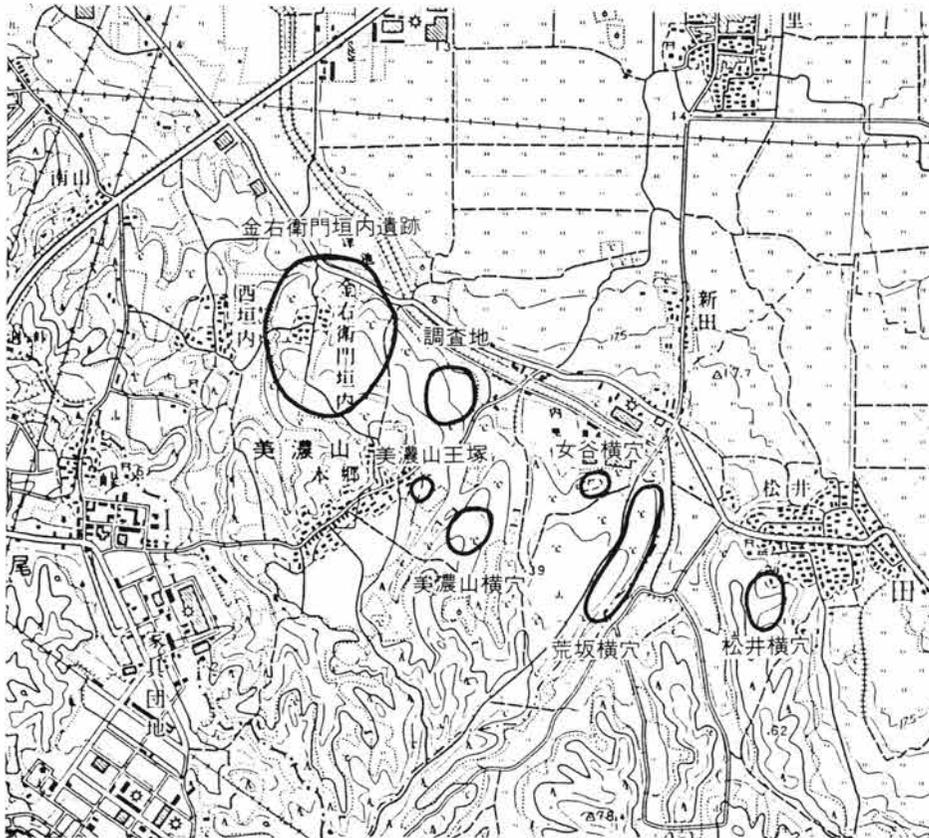
- 図版第35 (1)調査前全景 (南東から) (2)調査区全景 (東から)
- 図版第36 (1) SD 12 (南から) (2)B調査区 SX 08・溝A (北から)
- 図版第37 (1) SD 12 (南から) (2) SD 12 断面 (南から)
- 図版第38 (1) SD 12 土器出土状況 (西から) (2)B調査区土壇 SK 14 (西から)
- 図版第39 SD 12 出土遺物
- 図版第40 出土遺物

1. 狐谷横穴群発掘調査概要

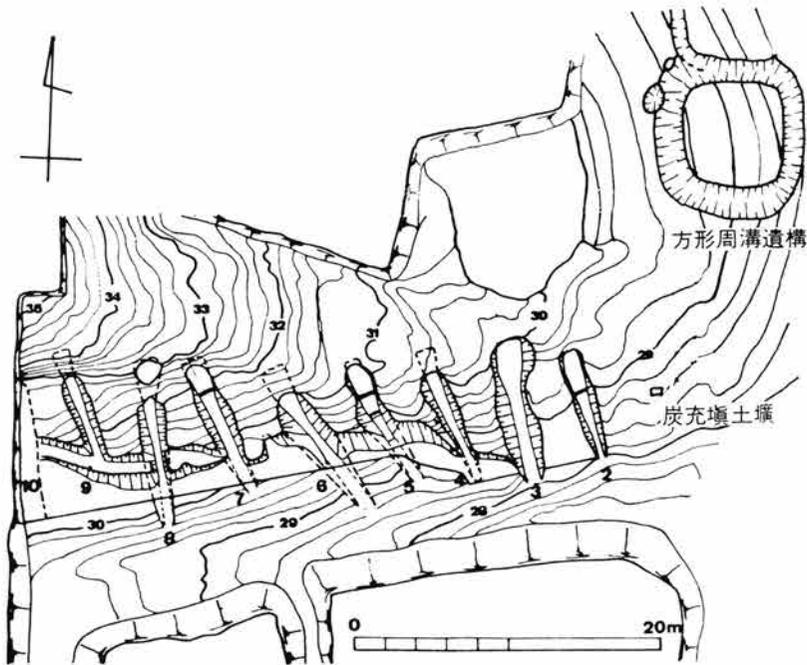
1. はじめに

京都府は、八幡市美濃山字狐谷一帯の丘陵地に高等学校の新設を計画したが、同校予定地付近には、横穴や、弥生土器・石器の散布地が存在するため、造成工事に先立ち発掘調査を実施した。^(注1) 調査の結果、8基の横穴群等の遺構と須恵器をはじめとする多数の遺物を検出した。^(注2)

調査は、京都府教育委員会からの依頼により(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが行なったが、横穴群を中心とする地区を昭和57年1月25日から4月28日まで、その周辺地区を同年5月14日から7月17日まで、それぞれ実施した。現地調査については、主任調査員長谷川 達・辻本和美、調査員村尾政人・久保田健士が担当したが、調査期間全体を通じて主に久保



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 調査地地形図

田が行なった。本概要は、横穴群の地区の調査について報告するものであり、執筆・編集は久保田が担当した。

調査に際しては、多くの方々の専門的な御指導・御教示^(註3)を得た。心から謝意を表したい。

2. 調査の経過

今回の調査地は、海拔 30m 前後の丘陵地（竹林）であり、遺構および遺物包含層の埋蔵状況を確認するため、調査対象地に幅約 3 m のトレンチを数か所設定した。掘削は当初、機械力を導入し、竹林の置土（深さ 0.5～2.0 m）を除去した後、人力により精査等を順次行なった。その結果、旧地形をある程度推定することができ、また検出された丘陵の南斜面で古墳時代後期の須恵器を含む暗茶褐色砂質土の広がりを数か所確認した。横穴群の可能性があるため、さらに南向斜面を検出するためにトレンチを拡張した結果、並列する帯状の暗茶褐色砂質土の広がりを 9 か所確認し、かつ一部に空洞を認めた。そのことにより、横穴群の存在が確定した。

横穴の調査にあたっては、玄室に至る通路部分（墓道）から埋没状況を確認しながら、埋土の除去を行なった。墓道からは、須恵器の甕、土師器の皿等の破片が若干出土した。玄室

の埋土除去については、遺存状況により困難なものが多く、慎重に行なった。その結果、1基を除く8基の横穴が確認され、多数の土師器・須恵器・鉄刀のほか、多数の人骨が出土した。^(注4)

その他に、以上の横穴群の東に接した地点で、須恵器の坏身セットが出土した炭を充填した長方形の土壇を、その北側で方形周溝遺構をそれぞれ検出した。

3. 調査概要

横穴群の位置する丘陵は、西から東にかけて延びるゆるやかな傾斜地で、海拔 28m から 34m の間にあたる。横穴群が構築された斜面は、幅約 23m の谷の南向斜面で、傾斜角度は 20～30度である（第2図）。

横穴群が構築された地山層は、いわゆる大阪層群と呼ばれる褐色の砂礫層および砂質土であり、比較的にもろい地盤である。炭充填土壇は、褐色砂質土を切り込んでおり、方形周溝遺構は茶褐色粘質土をベースとしている。

横穴群の谷部の底には、暗褐色砂礫の堆積が認められ、自然の流路を推定できた。横穴群は、その自然流路に接するように主軸を南南東～南東にふり、比較的整然と並んでいる。横穴群は、2号横穴を東端として西方に延びており、10号横穴から西方約 60m 付近に既に開口した横穴が2基存在している。^(注5)それらは、2号～10号横穴と同一の群を構成しているものと判断される（図版第1-1）。なお、谷部の北向斜面（横穴群の斜面の南側の斜面）には、横穴は存在しなかった。

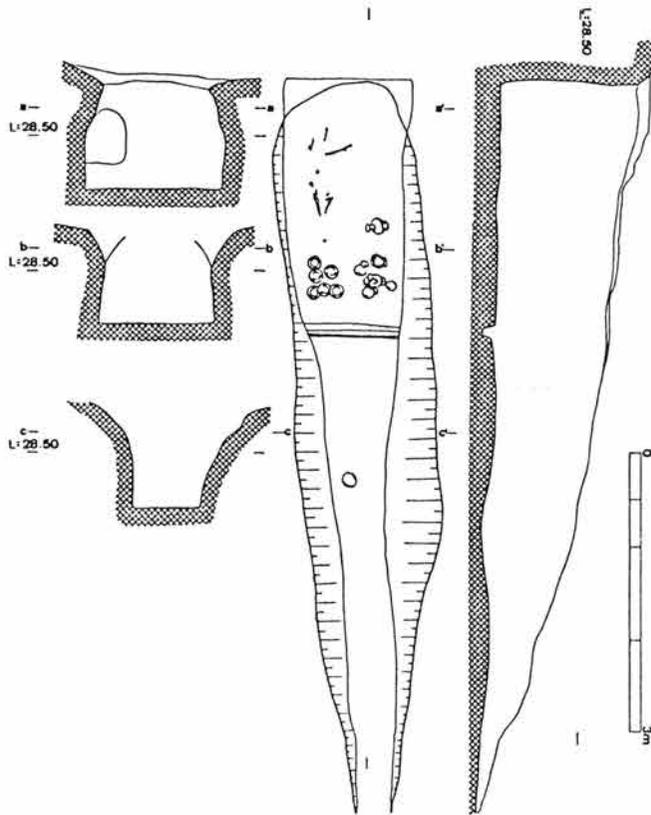
以下、横穴群・炭充填土壇・方形周溝遺構の概略を各遺構ごとに報告する。

(1) 横穴群

2号横穴（第3図 図版第4）

砂質土を掘削して築造されている。玄室・玄門の天井は陥没している。全長7.90m、玄室長3.27m、玄室幅（奥壁部でのもの、以下同じ）1.10mを測る。墓道裾から玄室奥壁中央を見た主軸方向（以下各横穴とも同じ）は、N-20°-Wをとる。玄室は他に比して小型であり、平面形は奥壁に向かってやや広がる長台形をしている。玄室埋葬面と墓道面との間に、段と小溝を設けている。墓道は幅1m弱の狭長な通路であり、地山を横断面逆台形に掘り込んで造られている。奥壁には、小穴が開いているがその性格については不明である。

遺物は、玄室を中心として出土しており、埋葬面から1体分と思われる人骨片が50cm×150cmの範囲で検出され、その左側に鉄刀・鉄小刀が各1点、頭蓋骨付近で金環1点が検出された。玄門付近では、土師器の埴6点、須恵器の台付長頸壺1点・有蓋高坏5点・無蓋高



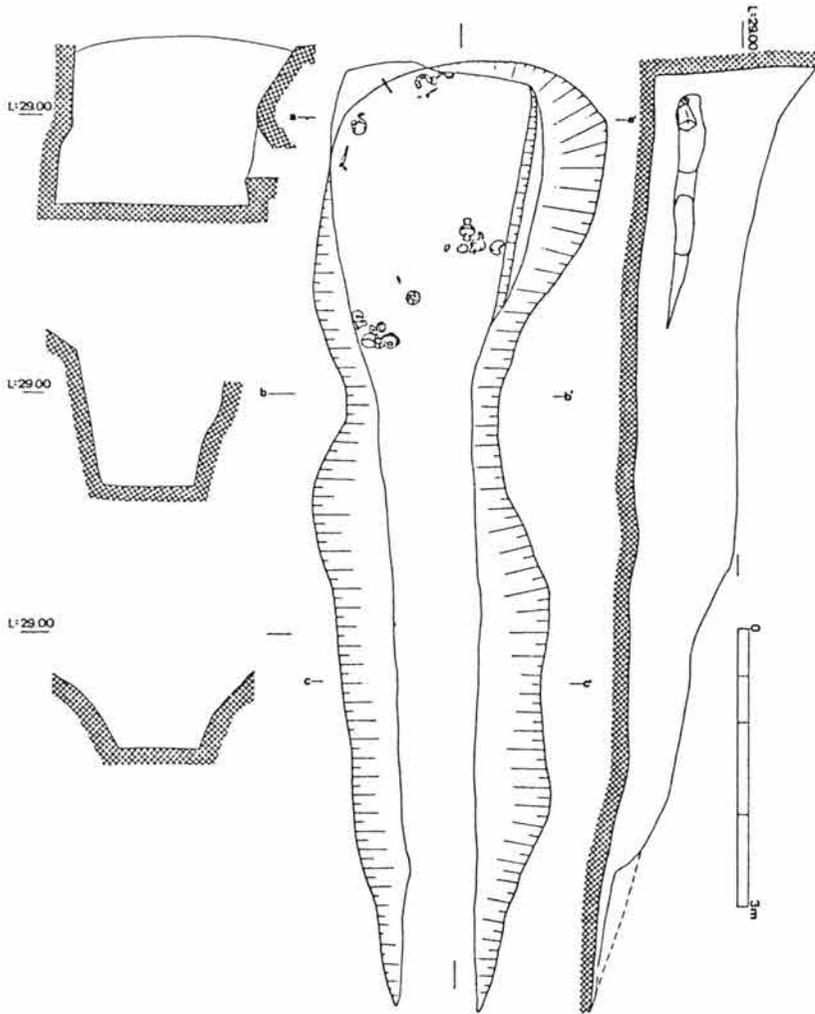
第3図 2号横穴実測図

坏1点・蓋3点が、土師器が左、須恵器が右という状態で検出された。また、墓道のほぼ中央で土師器の埴^(注6)1点が検出された。

3号横穴 (第4図 図版第5)

2号横穴と同様、砂質土を掘削して造られている。玄室、玄門とも天井が崩落している。全長 10.10m を測り、玄室長 3.54m、玄室幅 1.93m である。主軸を N-12°-W にとる。玄室平面は2号横穴同様の長台形をしており、奥壁の痕跡から、天井の形状はアーチ形と推定される。玄室と墓道の間には段をもたない。墓道幅は約 1m であり、断面は逆台形である。なお、玄室の右側壁には小穴が認められ、人頭大の石が2点そこから検出された。

遺物は、玄室内で玄門付近、玄室中央、奥壁部の3群に分かれて検出された。人骨は頭蓋骨の数から推定して2体分と思われる。土器は、土師器の壺(甕)・皿、須恵器の台付長頸壺3点・有蓋高坏2点・無蓋高坏1点・坏身1点である。また、黑色土器(A類)が2点出土した。

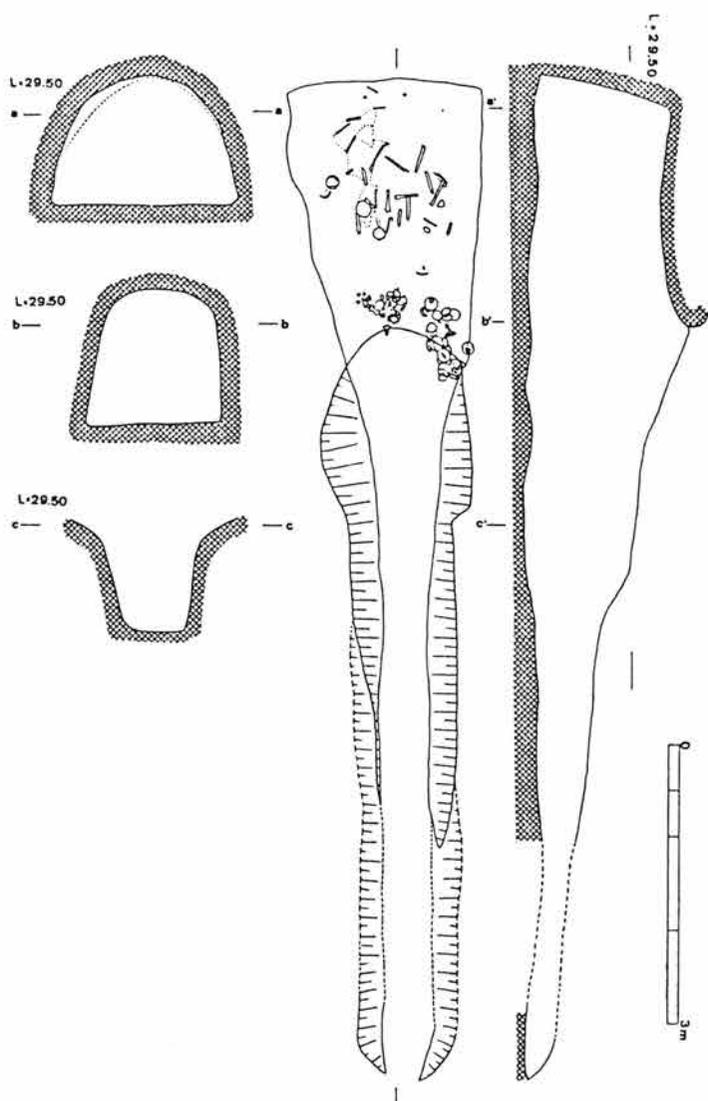


第4図 3号横穴実測図

4号横穴 (第5図 図版第6)

砂礫層を掘削して築造されている。玄室部分は遺存状態がよい。全長 9.45m、玄室長 3.86m、玄室幅 2.06m を測る。主軸は N-25°-W である。玄室は他と同様平面長台形をし、天井はアーチ形をなし玄門に向かって低くなっている。玄室と墓道との間に段をもたず、幅約 1m の墓道が続く。墓道断面は逆台形をしている。

遺物は、玄門付近で2群に分かれて検出され、玄室の3分の2の範囲には人骨が散乱していた。土師器の埴6点、須恵器の有蓋高坏5点・無蓋高坏2点・台付長頸壺1点・坏身2点・坏蓋3点・平瓶1点が出土した。また、金環2点が入骨片の間から出土した。

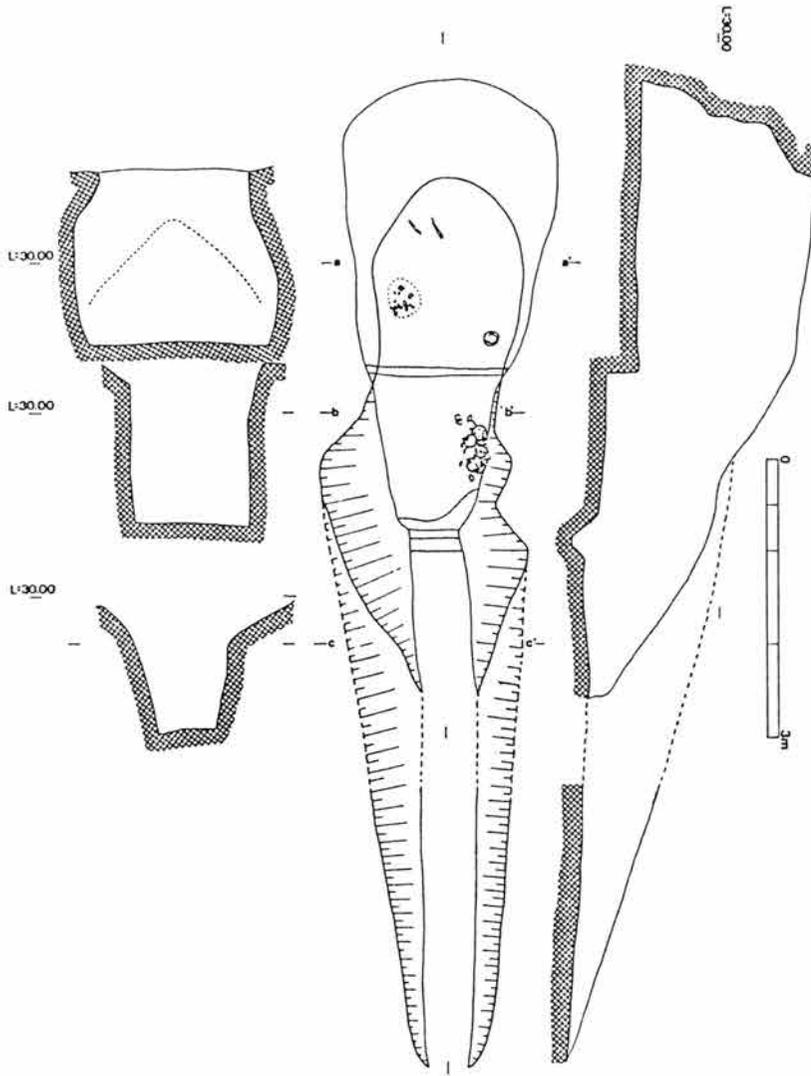


第5図 4号横穴実測図

また、墓道埋土中位から、須恵器の甕8個体分が破砕した状態で検出された。
 なお、発掘中に玄門付近の埋土中から人頭大の石2点を検出している。

5号横穴 (第6図 図版第7)

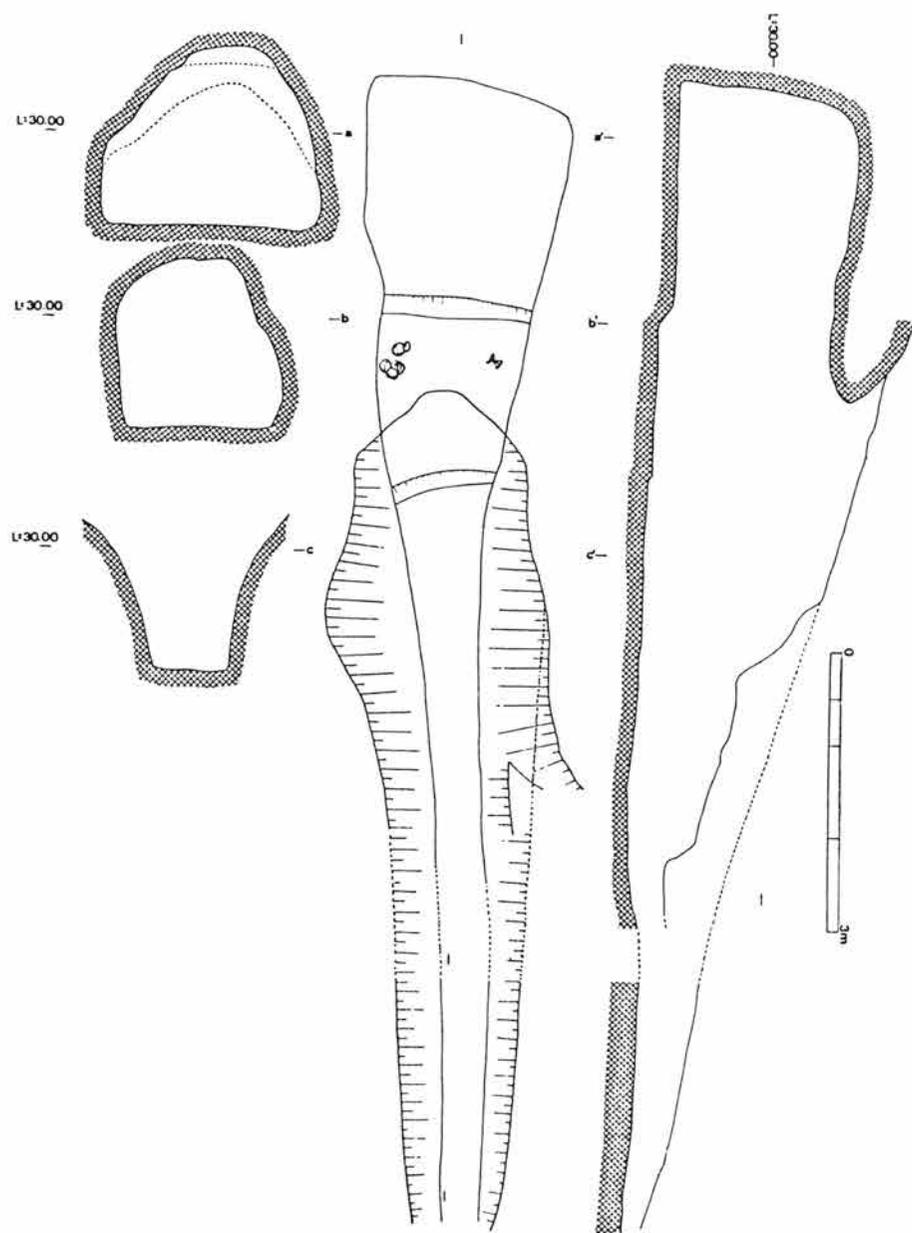
砂礫層を掘削して造られている。玄室天井・側壁の崩落が著しい。全長 9.90m, 玄室長 5.14m, 玄室幅 2.14m を測る。主軸は、N-29°-W である。玄室平面形は長台形をしており、天井の横断面もアーチ形と推定される。玄門部付近に段を2つもつのが注目され、2つの段



第6図 5号横穴実測図

の間のテラスで遺物が検出された。墓道寄りの段では、幅 40cm 程度の小溝を付属することが、2号横穴と共通している。玄室奥壁が、ゆるやかな弧をなしているのが他と異なる。墓道は幅 60cm 弱で他と比して短い。

遺物は、玄門部の右側で重なり合った状態で検出され、また、玄室埋葬面には人骨片が左側、土師器の皿が右側で検出された。土師器の高坏1点・埴1点・皿2点、須恵器の有蓋高坏2点・無蓋高坏4点・坏身2点が出土している。玄門の土器類は、須恵器の上に土師器類が載せられている状態であった。なお、墓道掘埋土中位及び、長方形の木炭の上から土師器



第7図 6号横穴実測図

の甕が出土した。

6号横穴 (第7図 図版第8)

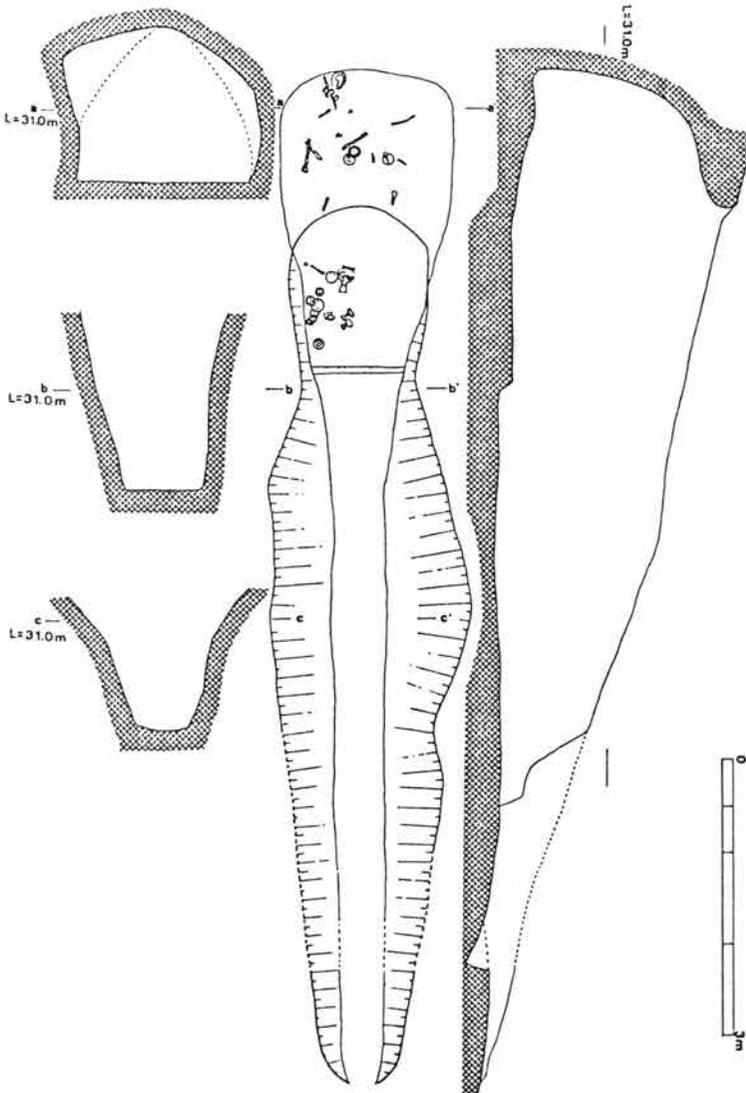
砂礫層を掘削して造られている。玄室の遺存状態は良好である。全長 12.00m, 玄室長 5.15m 玄室幅 2.16m を測る。主軸は N-39°-W にとる。玄室平面は長台形で、天井はアーチ

形をなし玄門に向かって低くなる。埋葬面は、1段高くなっている。

遺物は須恵器のみで、玄門付近の段の下で検出された。無蓋高坏2点・坏身4点・坏蓋1点・長頸壺1点である。人骨片は検出されなかった。

7号横穴 (第8図 図版第9)

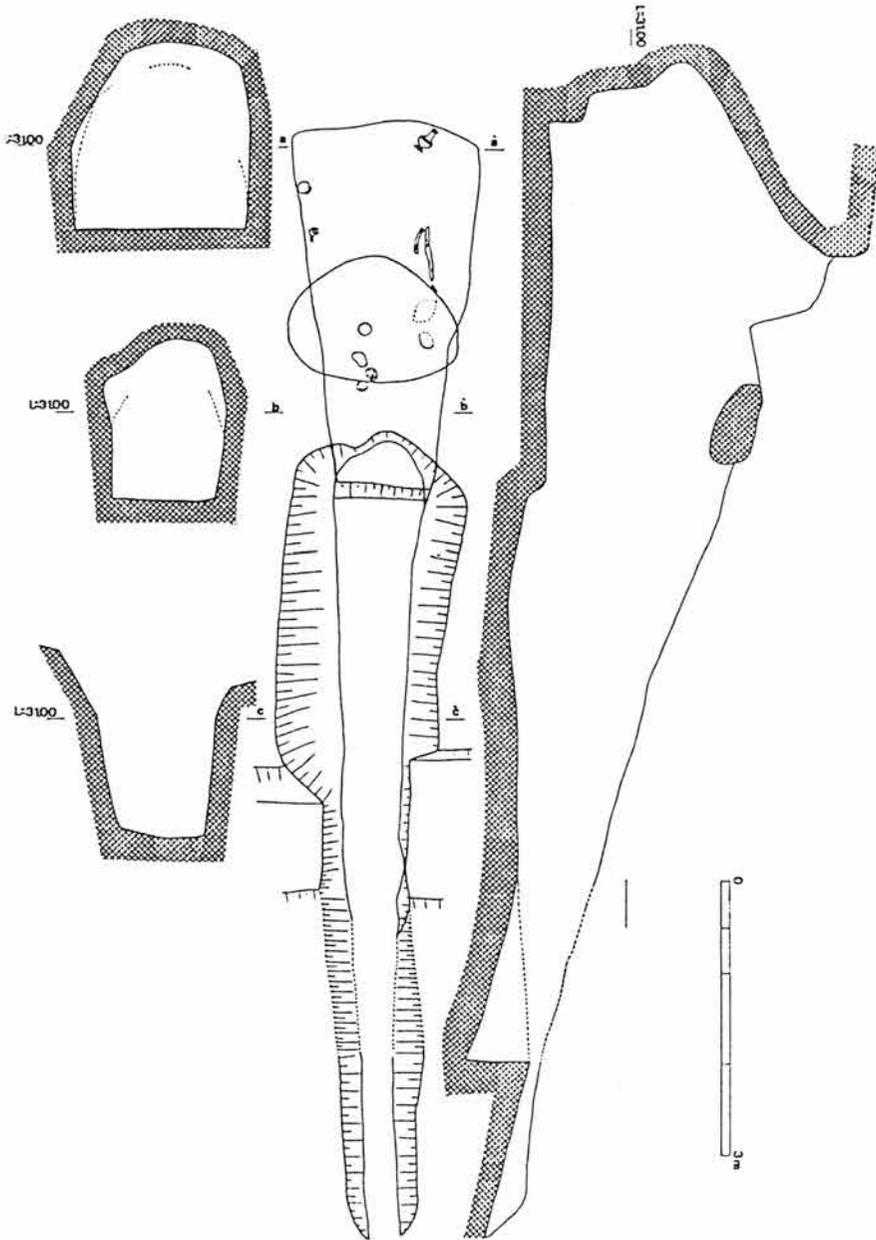
砂礫層を掘削して造られている。玄室天井側壁の崩落が著しい。全長 10.05m, 玄室長 3.65m, 玄室幅 1.69m である。主軸は N-27°-W にとる。玄室と墓道の上に段をもつ。玄室



第8図 7号横穴実測図

平面は長台形で、天井断面はアーチ形をなすと推定される。

遺物は、玄室埋葬面に散乱した状態で検出された。土器は、須恵器の無蓋高坏2点・坏身3点・坏蓋1点・宝珠つまみ蓋5点・台付長頸壺3点である。人骨片は3体分確認した。土器は主として玄門付近の左側で検出された。また、墓道裾で須恵器の壺片が出土し、その内



第9図 8号横穴実測図

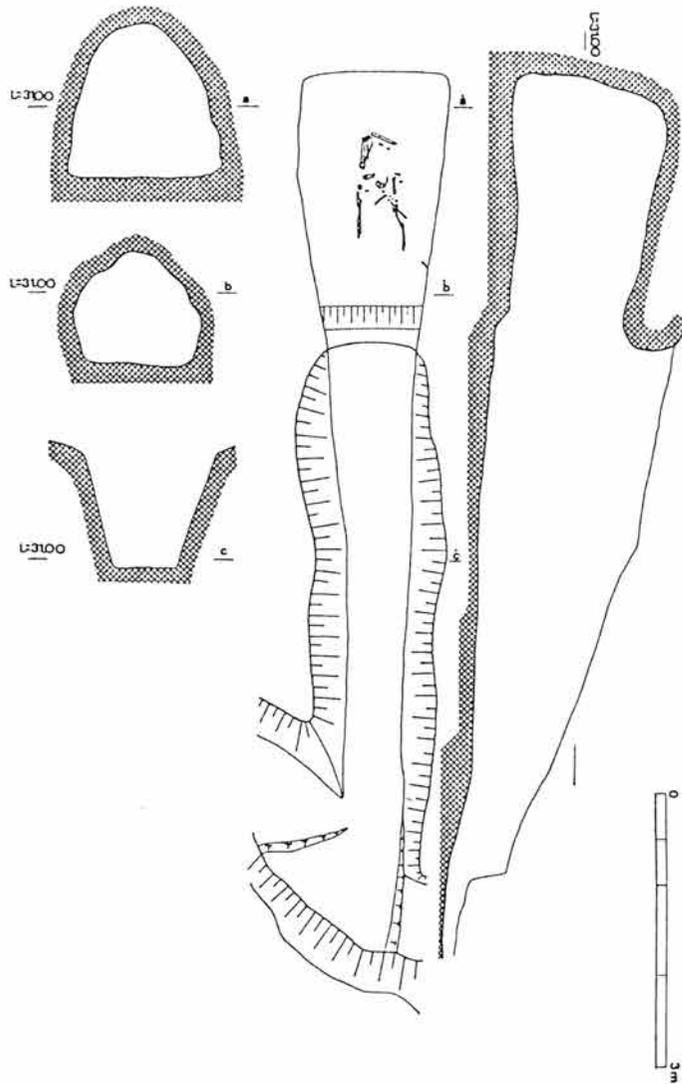
面に「車輪文タキ目」が施されていたのが注目された。

8号横穴 (第9図 図版第10)

砂礫層を掘削して造られている。玄室天井・側壁の崩落が著しい。全長 11.80m, 玄室長 3.42m, 玄室幅 1.98m である。主軸は N-12°-W にとる。玄室平面は長台形をしており、天井はアーチ形と推定される。玄門部は、天井が遺存しているが崩落が認められ、墓道との間に段をもつ。墓道は幅 1 m 程で、横断面で逆台形をなす。

遺物は、玄室の埋土中から3面にわたって検出されたが、最上位のものは、人骨片のみで土器などは伴わなかつ

た。中位の埋葬面では、須恵器の高台付の坏と宝珠つまみ付の蓋のセットが検出され、人骨片はなかった。最下位の埋葬面では、玄門付近に須恵器の無蓋高坏 1点・長い高台付の坏・坏身セット、奥壁部で須恵器の台付長頸壺 1点、土師器の壺 1点が出土した。人骨は、1体分が玄室の右側で頭部を南に向け、伸展された状態で検出された。



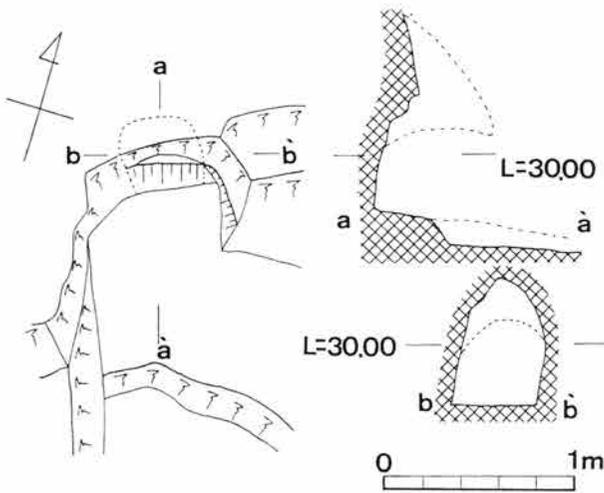
第10図 9号横穴実測図

9号横穴 (第10図 図版第11)

砂礫層を掘削して造られている。遺存状態は横穴群中で最も良好である。全長 8.35m, 玄室長 3.12m, 玄室幅

1.52m を測る。主軸は N-23°-W にとる。玄室平面は他と同様に長台形をしており、天井は横断面アーチ形をし、玄門に向かって低くなっている。玄門もアーチ形をしている。玄室埋葬面と墓道との間に段をもつ。墓道は幅1m弱で、やや裾の方が細くなっている。その横断面は逆台形をしている。墓道裾は幅が80cm程のテラスと連なっているが、横穴との関連は不明確である。

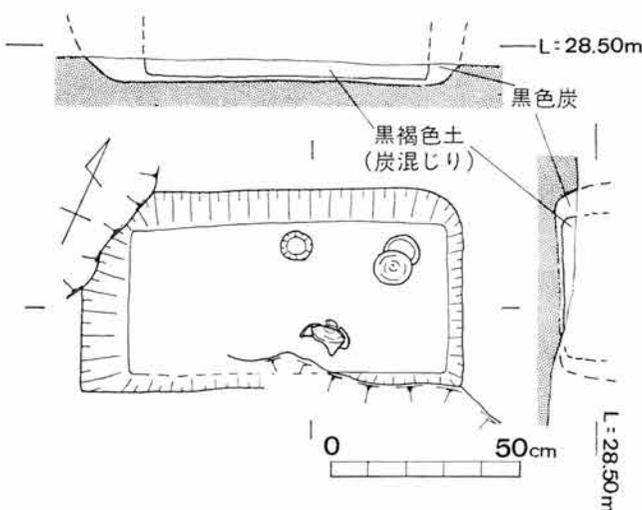
遺物は、玄室の右側寄りの所で、ほぼ1体分と思われる人骨片と、その左で鉄刀1点が検出された。その他では、人骨片にまじって金環が1点出土したのみで、土器はなかった。



第11図 小横穴実測図

小横穴 (第11図 図版第12)

6号横穴と7号横穴の間で、地山砂礫層を掘り込んだ小穴が認められた。半球状のものであり幅40cm、高さ60cm、奥行30cmが残存している。その中には、横穴群と同様に暗茶褐色土が埋土として入っていたが、遺物は検出されなかった。

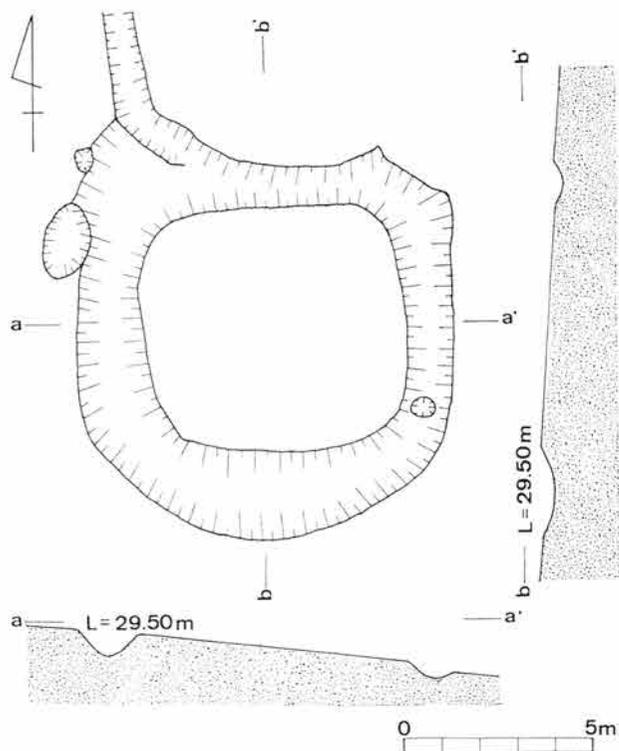


第12図 炭充填土坑実測図

(2) 炭充填土坑 (第12図 図版第14)

2号横穴の東約4mの地点で、50cm×100cmの長方形の炭を充填した土坑が検出された。土坑は、褐色砂質土に掘り込まれている。深さ5cm程遺存しており、黒色炭と炭混じりの褐色土の2層が埋土となっている。

遺物は、坏身のセットが東端から、また坏身片が埋



第13図 方形周溝遺構実測図

土中から出土した。

(3) 方形周溝遺構 (第13
図 図版第15)

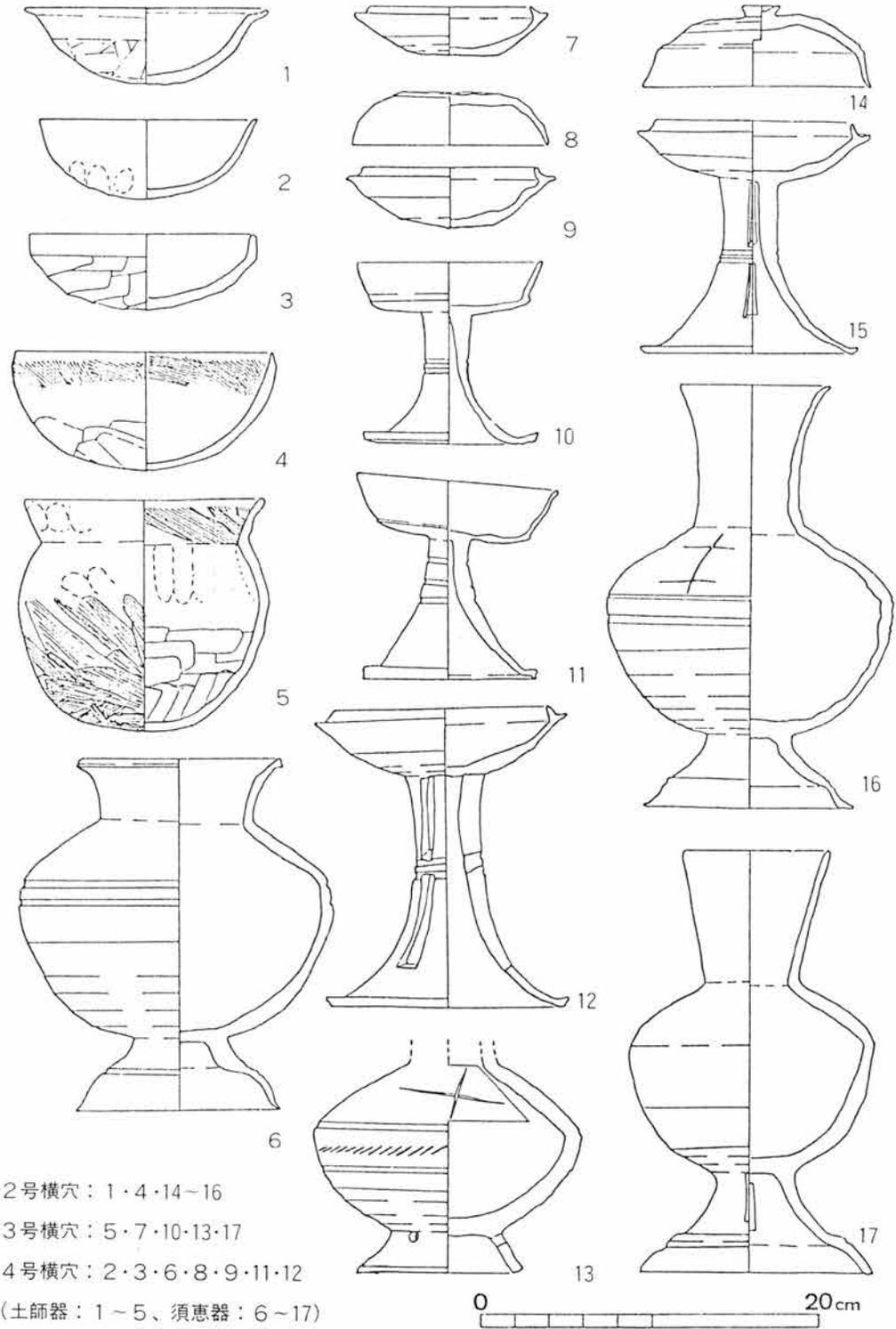
横穴群の北東方向の丘陵裾平坦面で検出された四方を幅約1mの溝によって区画された遺構である。溝は茶褐色粘質土を掘り込んでおり、埋土として暗茶褐色土・暗褐色土が堆積している。遺物は、坏身の破片が少数この埋土中の下層から出土している。また、西側の周溝にそって2つの楕円形の土壇が接している。北側の周溝は、幅60cm前後の溝(SD01)に切られており、須恵器が出土した。

(4) 出土遺物 (第14・15・16図)

今回の横穴群地区の調査では、土器類を中心に多くの遺物が出土した。

8基の横穴出土の土器は、完形や器形を判別しうる破片も含めると、総数120点余りになる。土師器が39点、須恵器が86点である。それぞれの器種構成は、土師器は碗・皿・壺・高坏・甕であり、須恵器は有蓋高坏・無蓋高坏・蓋(つまみ付)・坏身・坏蓋・台付長頸壺・長頸壺・台付短頸壺・平瓶・高台付坏・鉢・大甕である。以下、その概略を述べることにする。

土師器の碗は、体部が半偏球状を呈するもの(1~3)と半球状のもの(4・18)があり、体部下半をヘラケズリするもの(1・3・4・18)とそうでないもの(2)がある。2号横穴出土の碗(1)は、口縁部が外反しているのが特徴的である。皿は、内面に暗文をもつものがある。壺(5)は、球状の体部に外反する縁部をもち、体部内面下半をヘラケズリし、他はナデ・ハケ目で調整する。同様の壺は8号横穴からも出土している。高坏(19)は、坏部



第14図 横穴群出土土器実測図(1)

が大きく外上方に延び、透かしのない脚部がつく。

次に須恵器であるが、坏身（7・9・21・23・24・25）は、ほとんどのものが、たちあがり
が短く内傾するものであり、8号横穴出土のもの（25）は、直立気味の口縁部をもち、平底
に開く脚台をつける。有蓋高坏は、短く内傾するたちあがりをもつ坏部に2段透かしの長脚
をつけたもの（12・15）が大半であるが、5号横穴出土のもの（26）は、透かしなしで2条
の凹線を施すやや短い脚部をもつ。無蓋高坏には、長脚2段透かしのもの（28・31）と、透
かしのない短い脚のもの（10・11・27・30）がある。長頸壺には、方形の2段透かしをもつ
もの（34）、方形の1段透かしをもつもの（17）、透かしのない脚台をもつもの（16・33）、
円形の透かしをもつもの（13）、脚台のないもの（32）がある。短頸壺（6）は、やや胴の
張る体部に短く外反する口縁と、やや稜をもつ脚台がつく。蓋には、半球球状のもの（8・
20・22）、中央部が凹んだつまみをもつもの（14）、かえりと宝珠つまみをもつもの（29）が
ある。

なお、横穴群からは、鉄刀が2点（2号・9号横穴）、金環（2号・4号・9号横穴）が
出土している。また、3号横穴からは、黒色土器2点が出土している。

炭充墳土壙からは、きわめて短いたちあがりをもつ坏身（36）と、蓋（35）および直立す
る口縁部をもつ坏身（37）が出土している。

方形周溝遺構では周溝埋土から、短く内傾するたちあがりをもつ坏身片（39）、やや内傾
して延びるたちあがりをもつ坏身片（40）と、坏蓋の破片（38）が出土している。

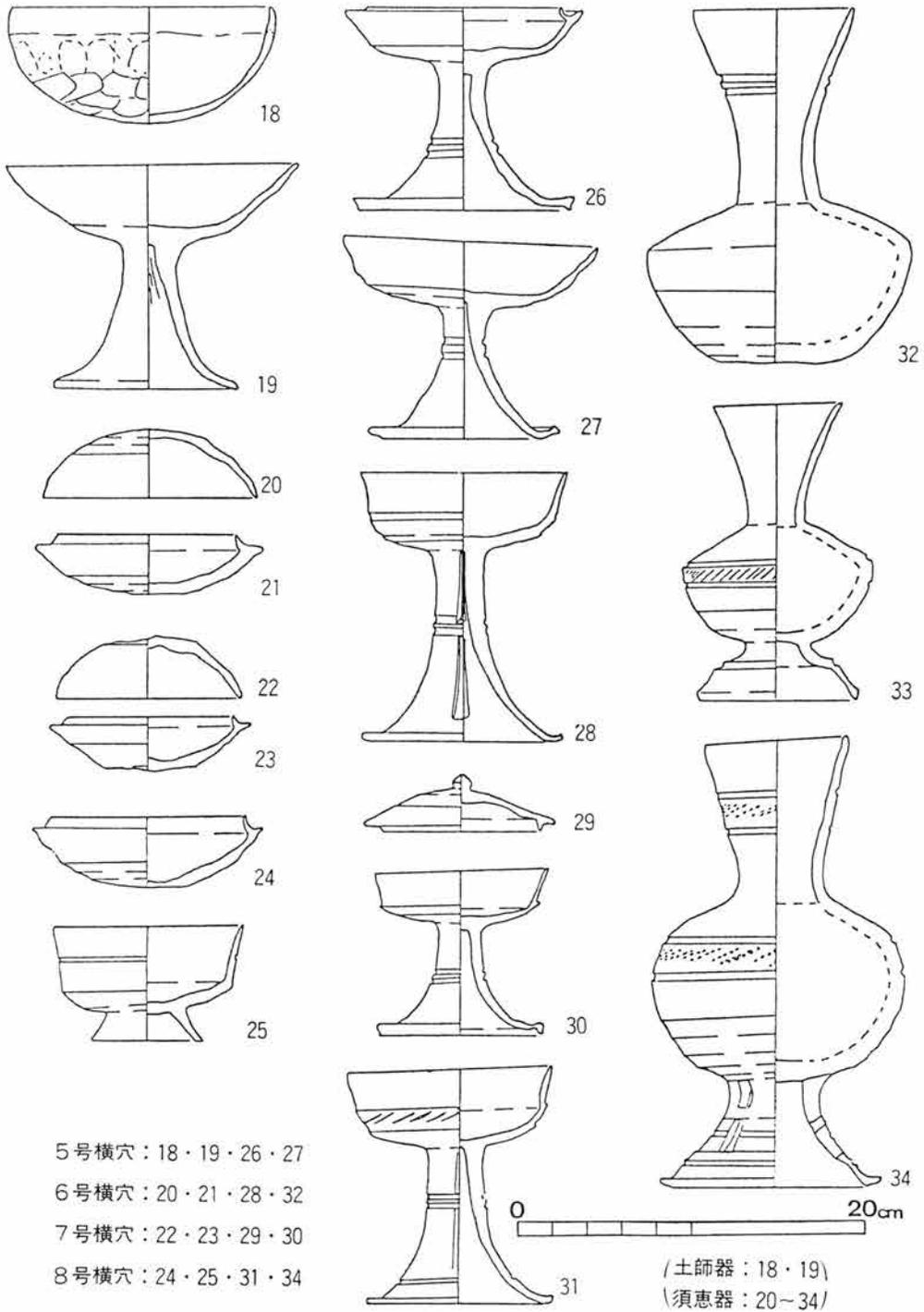
以上が出土遺物の概略であるが、後日検討を加えた上で、その詳細にふれたい。

4. ま と め

本調査では、8基の横穴を発掘調査する事によって、多くの新しい知見を得たと考える。
そのひとつひとつについては言及する事はできないが、その概略をまとめる。

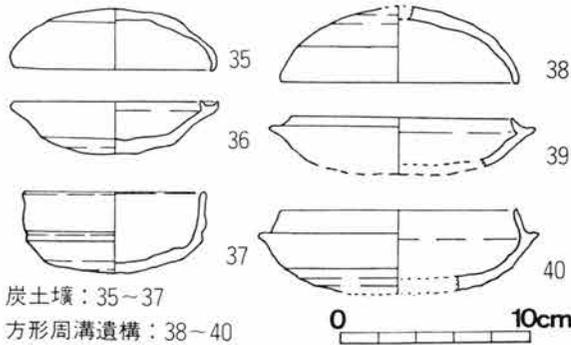
まず、横穴群の築造年代であるが、出土須恵器から考えて、6世紀後葉から造られ始め、
6世紀末葉から7世紀初頭にかけてピークに達したと思われる。その後も一部の横穴では追
葬が行なわれたことが出土遺物から窺える。具体的には、3号・8号横穴が、8基中最も早
く築造され、他のものが、次の段階で加わり、第2図に見るような群集形態に至ったと考え
られる。

次に、横穴の形態については、狭長な墓道を伴うアーチ形天井の横穴であることが判明し
た。いずれもほぼ共通の型式をもつが、段・小溝を付設するなど若干の差異が認められる。
ともかく、既存の2基をも含めた狐谷横穴群の形態の共通性は、この谷部を墓域に占有した



5号横穴：18・19・26・27
6号横穴：20・21・28・32
7号横穴：22・23・29・30
8号横穴：24・25・31・34

第15図 横穴群出土土器実測図(2)



炭土壙：35～37

方形周溝遺構：38～40

第16図 炭土壙・方形周溝遺構出土土器実測図

集団を知る手がかりになると思われる。また、周辺に存在する横穴群の形態との類似が指摘できる。また、墓道裾を検出しえたことにより、それら横穴を連絡する墓道を想定することが可能かと考える。

なお、炭充墳土壙は、どのような性格の遺構かは不明である

が、出土須恵器から6世紀末から7世紀初頭のものであると考えられる。また、方形周溝遺構については、主体部は検出できなかったが、その形態から「方形周溝墓」の可能性が高い。その時期は、周溝内から出土した須恵器坏身から考えて、6世紀中葉までさかのぼりうるが、「方形周溝墓」という埋葬形態が6世紀まで残るものか、時期についてなど、疑問点も多く速断できない。

今回調査した8基の横穴のほかに、未調査の10号横穴および既存のもの2基を加えて、11基確認されているが、未発掘の部分を含めて考えるならば、20基以上の横穴群をこの谷部に推定しうるかもしれない。今回の8基の調査は、その一部分にすぎないが多くの課題を提供するものであった。2号横穴の玄室供献土器における土師器・須恵器の配置、遺骸の安置をめぐる問題もある。また、各横穴の築造を担った集団（家族集団と考えられる）同士のつながりの問題、横穴式石室の群集形態との差異の検討などの課題がある。それらも含め、また周辺地区の調査成果とともに、紙面をあらためて検討を加え報告したい。

（久保田 健士）

（注1）美濃山一帯には、美濃山横穴（1基開口）・荒坂横穴（3基開口）・女谷横穴（残欠2か所）があり、総称して美濃山横穴群と呼ばれる。また、その南東の丘陵地には、松井横穴群（9基開口）がある。八幡市から田辺町にかけて存在する横穴については、奥村清一郎「南山城の横穴」（『京都考古』第27号）1982 に詳しい。

（注2）調査地の北西に、金右衛門垣内遺跡があり、弥生中期・後期の土器と石器が散布していることが知られている。

（注3）当調査研究センター副理事長樋口隆康氏、同理事原口正三氏及び奈良大学助教授水野正好氏など多くの方々の御指導を受けた。

（注4）調査地の西端にあたる10号横穴については、遺構の一部が民有地（竹林）にはいるため、未調査のまま、本横穴群が保存措置として埋めもどされた際、同様の措置がなされた。

- (注5) 美濃山狐谷横穴として既に紹介されていたもので、東側のものは開口しており玄室の状態を知ることができる。今回の調査例と合わせて、東側のものを1号横穴、西側のものを11号横穴と呼称したい。
- (注6) 玄門部の小溝から前方約1.4mの地点で、墓道面にすわった状態で検出された。
- (注7) 須恵器の編年については、近年研究・調査が進展しその実年代をめぐる各説が出されているが、本概要では、田辺昭三氏の編年(『陶邑古窯址群』I 1966)に依った。

2. 広隆寺跡発掘調査概要

1. はじめに

本概要は、京都市右京区太秦桂木町・蜂ヶ岡町31に所在する太秦警察署の老朽庁舎の撤去・改築に伴う発掘調査に関するものである。

現地調査は、当調査研究センターが主体となり、主任調査員長谷川 達・久保哲正、調査員小山雅人・石尾政信が担当したが、全期間を通し、主に石尾政信が行なった。

現地調査は、昭和56年7月13日から8月20日の期間に第1次調査としてA地区を、旧庁舎撤去後の昭和57年1月12日から3月12日の期間に第2次調査としてB地区の調査をそれぞれ実施した。

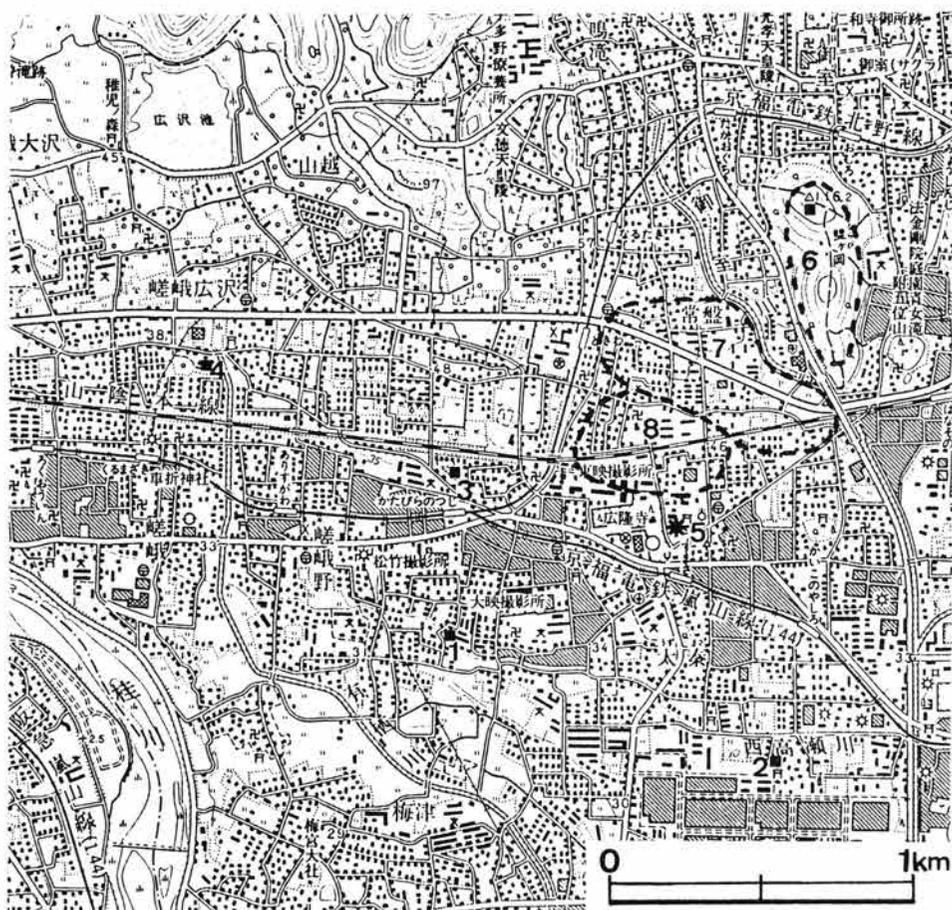
国土座標の設置、写真撮影、道具類の保管等で、太秦警察署・広隆寺・京都中央信用金庫・右京区役所の御協力・御援助を得た。また、調査期間中及び資料整理に関して御指導・御協力を賜った関係諸機関および関係者の方々を記して感謝したい。^(注1)

調査協力

京都市文化観光局文化財保護課、京都市埋蔵文化財調査センター、(財)京都市埋蔵文化財研究所、京都大学埋蔵文化財研究センター、太秦警察署、高橋鋳工場、岩澤の梵鐘株式会社、木村捷三郎・吉村正親・百瀬正恒((財)京都市埋蔵文化財研究所)、泉 拓良・清水芳裕・五十川伸矢(京都大学埋蔵文化財研究センター)、林 博通(滋賀県教育委員会)、神崎 勝(兵庫県多可郡教育委員会)、友野良一(日本考古学協会)、大前 潔・川越俊一(奈良国立文化財研究所)、杉本 宏(宇治市教育委員会)

当該地は、京都盆地の北西に位置し、双ヶ岡丘陵の西南約800mの地点で、京都盆地をとりまいて発達している低平な新期洪積層の低位段丘面の先端部分にあたる。^(注2) 当地の南側では約3mの段差がある。

今回の調査地は、太秦広隆寺の旧境内にあたる。広隆寺は、山城国随一の名刹で、秦公寺・蜂岡寺・葛野寺ともいわれる。広隆寺の創建・移転等については、諸説がある。^(注3) 『日本書紀』には、推古11年(603)11月に聖徳太子から仏像を受けた秦河勝が蜂岡寺を造ったと記されている。『聖徳太子伝暦』では、推古12年建立とある。『朝野群載』収録の承和3年(836)の「広隆寺縁起」によれば推古11年に聖徳太子から仏像を受けた秦河勝が、推古30年(622)に聖徳太子のために広隆寺を建立したとあり、旧寺地の九條河原里・九條荒見社里から、現在



第17図 調査地周辺の遺跡

1. 天塚古墳 2. 蛇塚古墳 3. 仲野親王高皇陵 4. 兜塚古墳 5. 弁天島経塚
6. 双ヶ岡古墳群 7. 常盤東ノ町古墳群 8. 常盤仲ノ町遺跡

地の五條荒蒔里に移ってきたものという。

また、寛平2年(890)の『広隆寺資財交替実録帳』の初頭には、推古30年に建立されたと記されている。

以上のように広隆寺の建立年代は、推古11年・12年・30年と若干の差がみられるが、整合的に解釈するならば、推古11年に建立に着手され、30年に完成したとも考えられる。

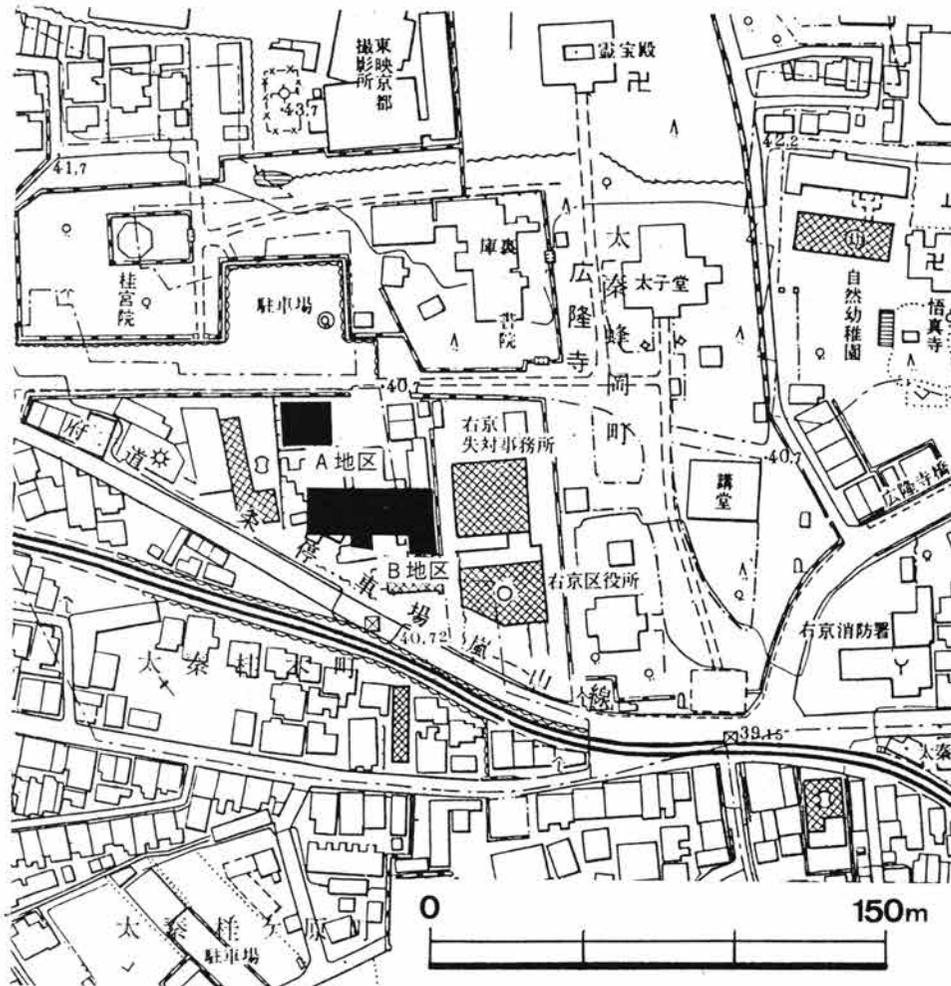
広隆寺の所在する太秦を中心とした嵯峨野周辺は、秦氏の本拠地と言われ古墳などが多い。古墳は後期のものが中心で、秦氏が当地域に移ってきて以後に増加したと言われている。よく知られているものに、京都府下最大の石室を持つ蛇塚古墳をはじめ、天塚古墳・中野親王陵古墳・甲塚古墳・双ヶ岡古墳群、そして、広沢池周辺にも多くの古墳・古墳群がある。ま

た、最近の調査で、広隆寺の北東約 500 m の地点で常盤東ノ町古墳群^(注4)が、北方約 200 m の地点で常盤仲ノ町集落跡^(注5)が発見されている。

2. 調査概要

(1) 調査経過

今回の調査対象地は、広隆寺楼門と講堂の中軸線から約 100 m 西の地点で、北は広隆寺駐車場、東は右京区役所、南は三条通に接する東西約 55 m、南北長辺約 80 m、短辺約 45 m の台形の敷地である。広隆寺境内と本調査地は、海拔約 41.5 m でほぼ同じ高さである



第18図 調査地位置図

(楼門付近はやや低い)。

広隆寺境内・旧境内の発掘調査は、これまで数多く実施されており、多数の遺構・遺物が発見されているが、伽藍配置の明らかになるような資料は見つかっていない。

広隆寺霊宝殿の東隣りでは、堅穴住居跡が、東方では築地跡・経塚群が検出されている。本調査地東側に隣接する右京区役所の改築工事に伴う発掘調査では、築地跡と多数の瓦溜りが検出されており、今回の調査においても、それらの関連遺構の検出に期待が持たれた。

A地区は、敷地西北隅の署長公舎建設予定地である。この調査で弧状に曲がる溝 SD 10、この溝を切り込んだ石敷土塋 SK 03、長円形の土塋 SK 02 と大小の円形土塋等、合計10か所の遺構が検出されたが、広隆寺との関連が明確になるものではなかった。

B地区の発掘調査は、敷地中央部の新庁舎建設予定地に 40 m×15 m のトレンチを設定し、重機によって表土・攪乱層・旧建物基礎の掘削を行なった。トレンチ内は、警察署の旧庁舎・道場・車庫をはじめ、昭和3年2月7日に焼けた記録のある旧太秦小学校の校舎等の建物基礎や、それらに付属する溝、配管による破壊が著しく、遺構の残り方は非常に悪い。破壊をまぬがれたものが部分的に残る程度である。攪乱層の下はA地区と同様、淡黄褐色土・黄褐色土、及び砂礫層となっている。

トレンチ西部において、南北方向の深い大溝 S D19 が検出され、この溝の東側に、平行する墓が合計5か所発見された。墓は改葬骨を納めた甕2基と、中に小壺を納めた甕で、その間隔は 1.0 m 前後で南北に並んでいた。また、南では土葬墓2基が南北に並んで検出された。

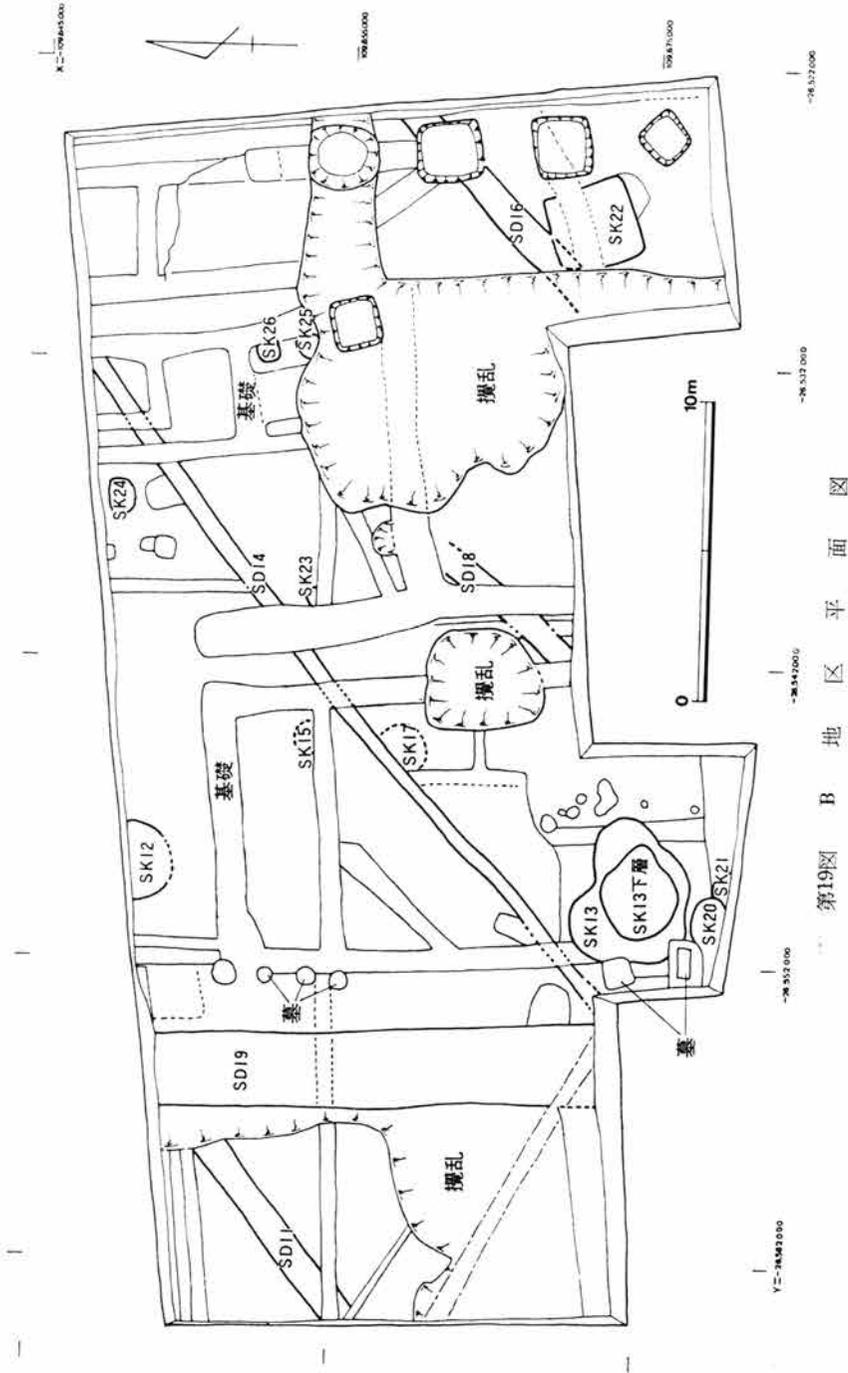
トレンチ中央部南端で、土器溜り (SK 13) が、東端で北東～南西に延びる溝 (SD 16) と土塋の隅と思われるものが検出されたので、各々その延長部分を追求して南側へ拡張を行なった。土器溜り SK 13 の下層で、7世紀前半の軒瓦等を含む瓦溜りが検出された。

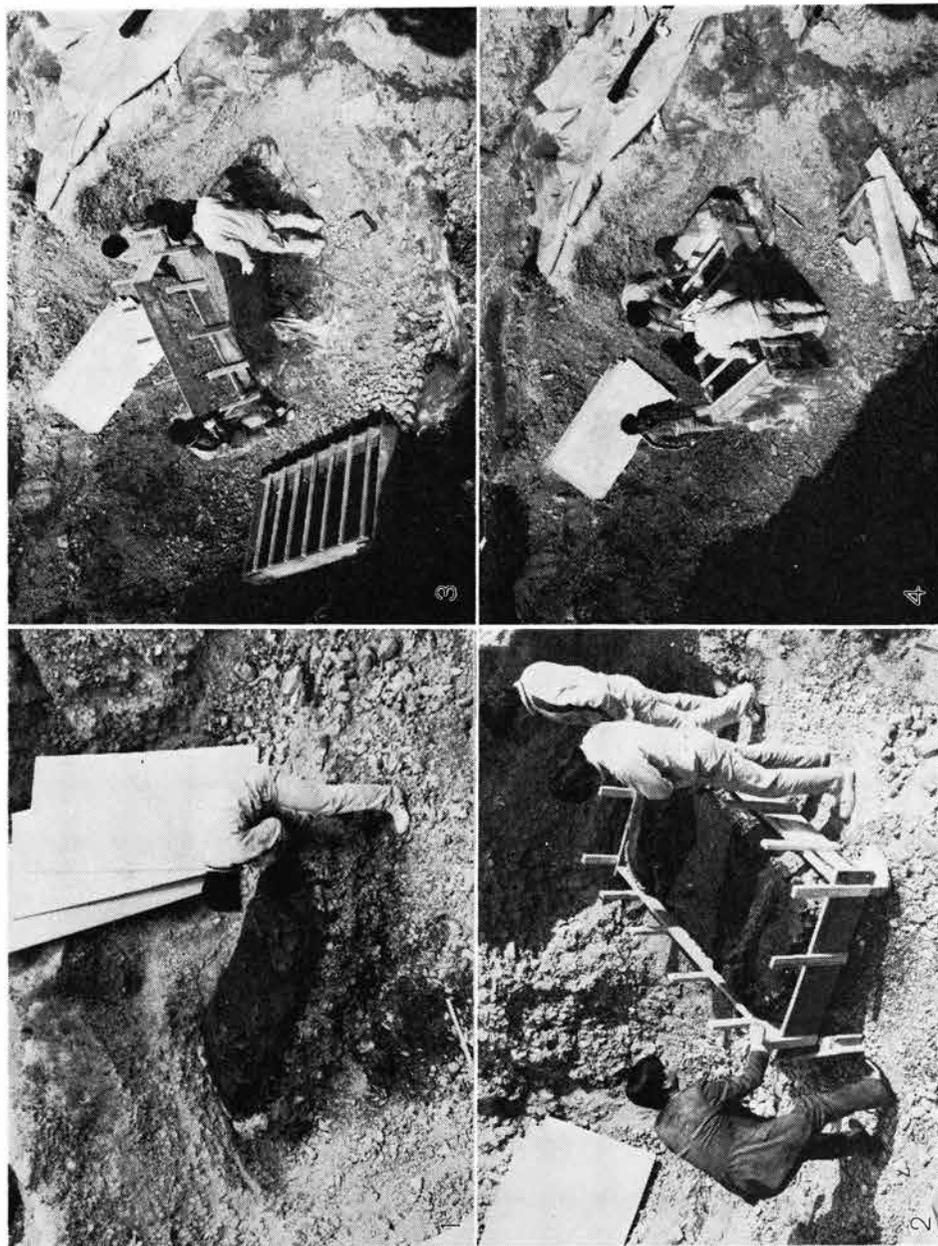
斜め方向の溝 SD 16 の南隣りでは、一辺 2.7 m の方形の掘形 (SK 22) が検出されたので、初めは堅穴住居跡であると判断し掘り下げたところ、炭・焼壁・溶融した塊・粘土・銅滓などが投棄されたような状態で詰まっていた。土塋の底には、梵鐘の鑄造に使用したと思われる鑄型土台の一部が残存していた。

その後、同様な遺構が京都大学構内で2基発見された。兵庫県多可郡でも発見された。

このような梵鐘を鑄造した遺構は、大津市滋賀里の長尾遺跡、長野県上伊那郡飯島町寺平遺跡、奈良県桜井市の山田寺跡等で発見されている。

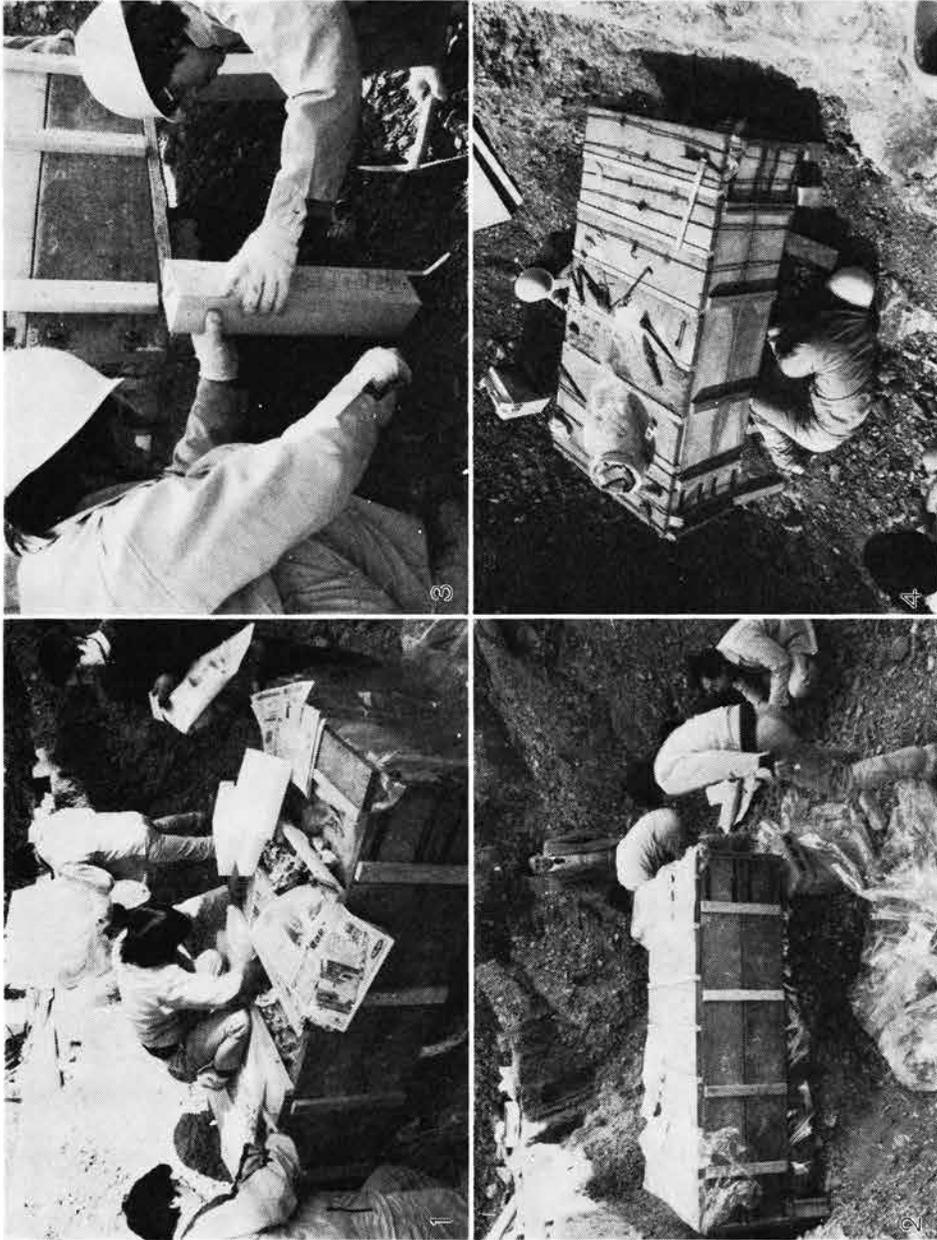
現地において、遺構全般について杉山信三氏 (京都府文化財保護審議委員)、梵鐘鑄造遺構について坪井良平氏、高橋鑄工場の上田一男氏、津田寛治氏をはじめ多くの人から様々な





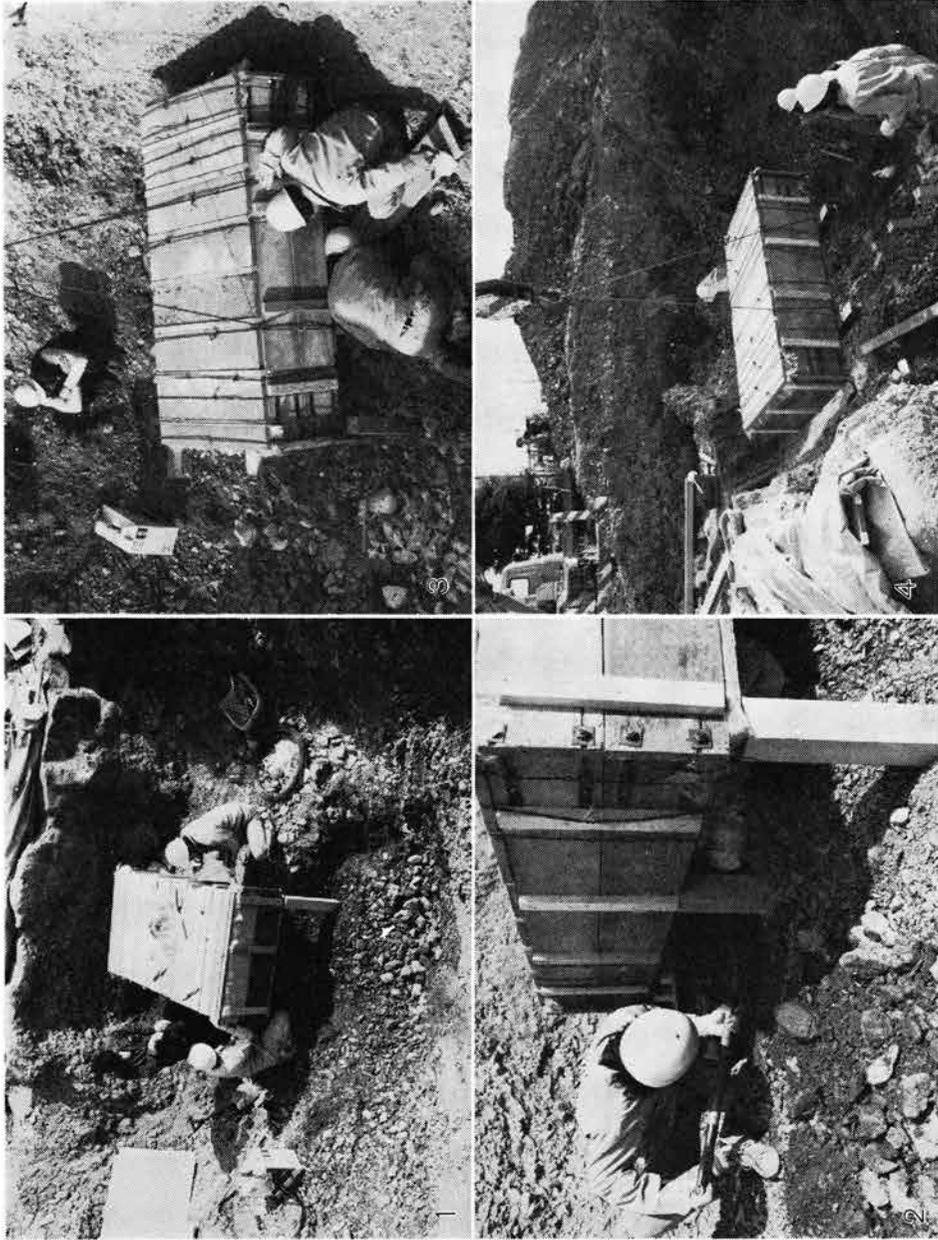
第20図 梵鐘鑄造遺構切り取り作業(1)

1. 樹脂の注入
2. 型枠の作製
3. ビニールシートで被い型枠をはめる
4. ウレタン樹脂で表面を被う



第21図 梵鐘鑄造遺構切り取り作業(2)

1・2. ウレタン樹脂・新聞紙で被い密封する 3・4. 砂礫層からの切り取り作業



第22図 梵鐘鑄造遺構切り取り作業(3)

1・2. 砂礫層からの切り取り作業 3・4. レッカー車からワイヤーロープを掛けつり上げる

御指導と助言を賜わった。

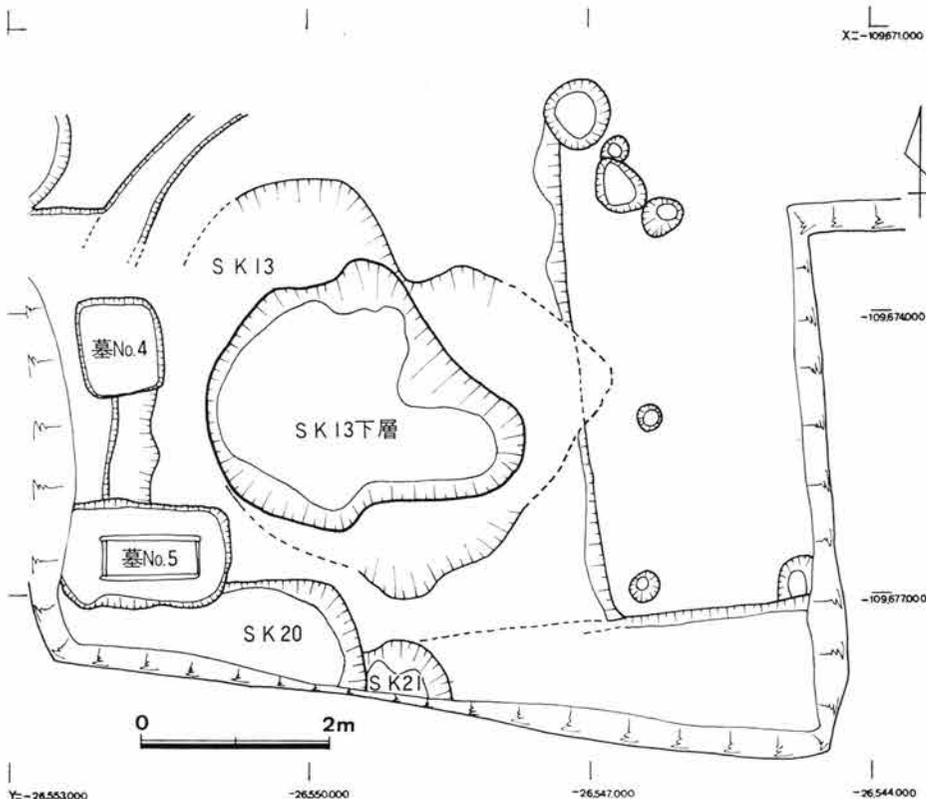
7月10日には当センターの研修会において、各地の「梵鐘鑄造遺構について」報告が行なわれ、友野良一氏、林博通氏、神崎勝氏、五十川伸矢氏から、多くの御意見・御教示を賜わり、また、多くの資料をいただいた。

鑄型土台は、久保哲正氏（当時当センター調査員、現在府文化財保護課技師）の協力で、土台にイソシアネート系樹脂（サンコールSK50）を注入し凝固させた後、型ワクをはめウレタン樹脂等で固定し、鑄型土台を切り取った。現在、保存処理中である。また、遺構の模型を作製する予定である。

(2) 検出遺構

B地区で検出された遺構は、盛土・攪乱層・旧表土である淡褐色土層を取り除いた段階で確認された。いずれも、浅いところから掘り込まれている。

①溝SD11 トレンチ西北で検出された溝で、東北～西南の方向にはしり、幅1.0m前後、



第23図 土器溜りSK13周辺平面図

深さ 20 cm 程度である。溝中から、瓦・須恵器・土師器の細片が出土した。

②**土壙 SK 12** トレンチ北端で検出された土壙で、最大幅 2.6 m を測り、深さ 10 cm 程度の浅いものである。南側は不明瞭であるが、ほぼ円形と推測される。少量の土器片が出土した。

③**土器溜り SK 13** トレンチ南端で検出した。この土器溜りは、不定形で範囲が明瞭でない部分があるが、およそ南北 4.0 m、東西 4.5 m の広がりである。埋土は褐色土で小石を若干含んでいる。溝中から、瓦・須恵器・土師器・黒色土器・製塩土器・緑釉・灰釉などが出土した。この土器溜りは、下層にある瓦溜りを掘り壊しているため、下層の遺物も含んでいるものと思われる。

下層の瓦溜りは、南北約 2.7 m、東西約 3.3 m の楕円形で、深さ約 60～70 cm である。この瓦溜りには、瓦がぎっしり詰まっており、コンテナ50箱以上の瓦が出土した。出土瓦のほとんどは、平瓦・丸瓦であった。平瓦は凹面に「桶巻作り」製法の痕を残す。

④**溝 SD 14** トレンチ中央を、東北～西南方向にはしるもので、長さ 27 m にわたって検出した。この溝は、幅約 50 cm、深さ 40 cm 前後、壁はほぼ垂直に掘られている。埋土は、褐色土に若干の黄褐色土と小石が混入する。少量の土器片が出土した。

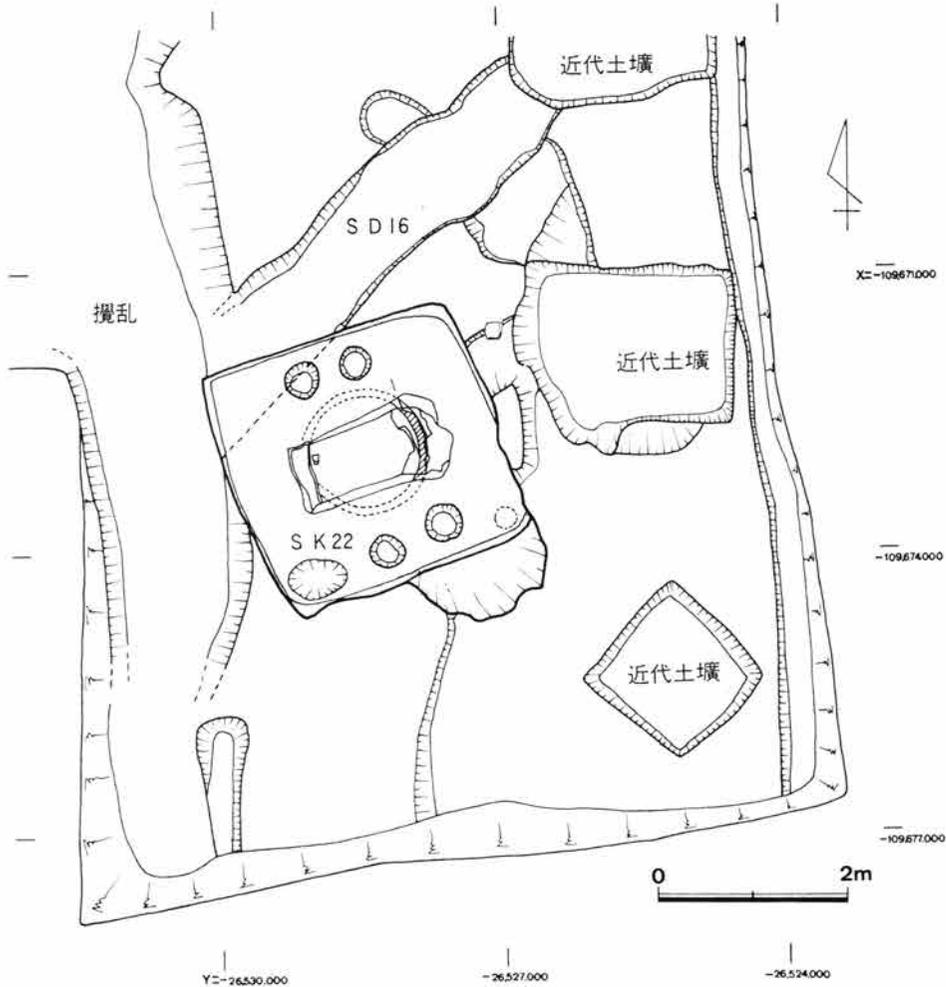
⑤**土器溜り SK 15・SK 17** ともにトレンチ中央で検出したが、範囲は明瞭でない。SK 15 は深いところで 10 cm、SK 17 は深さ 20 cm 前後である。瓦・須恵器・土師器などが出土した。

⑥**溝 SD 16** トレンチ東南で検出された東北～西南方向の溝で、長さ 8.0 m にわたって検出した。この溝は、幅 1.0 m 前後、西が最も深く約 60 cm あり、西南に向かって流れていたものと思われる。また、南では SK 22 を切っていることが判明した。埋土は、褐色土で小石を多く含んでいる。瓦・須恵器・土師器が出土した。

⑦**溝 SD 18** トレンチ中央の南端で検出された、東北～西南方向の溝である。この溝は、幅約 1.0 m、西が最も深く 15 cm あり、東は浅くなり消失する。埋土は褐色土で、少量の土器片が出土した。

⑧**溝 SD 19** 南北にはしる大溝で、幅約 2.7 m、深さ約 1.0 m ある。埋土は、褐色土を含む砂礫層である。溝からは多数の遺物が出土しているが、近世～近代の瓦が多い。また、この溝の周辺は攪乱が著しく、攪乱層から多数の遺物が出土している。

⑨**土壙 SK 20・SK 21** 土器溜り SK 13 の南で検出されたもので、墓による攪乱で明瞭でないが SK 20 は楕円形、SK 21 は円形の土壙である。ともに深さ 60 cm 前後である。埋土は褐色土で、少量の須恵器・土師器が出土した。

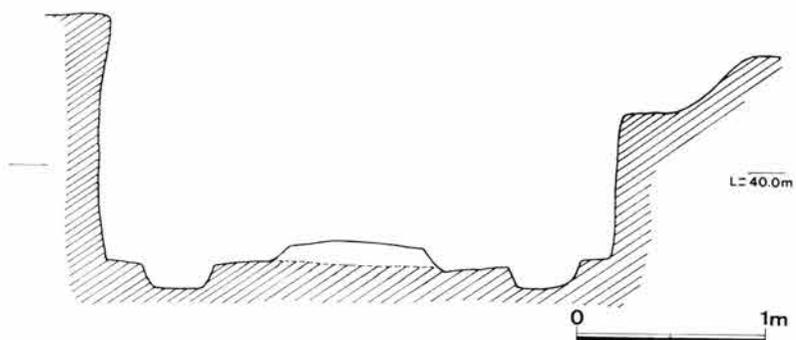
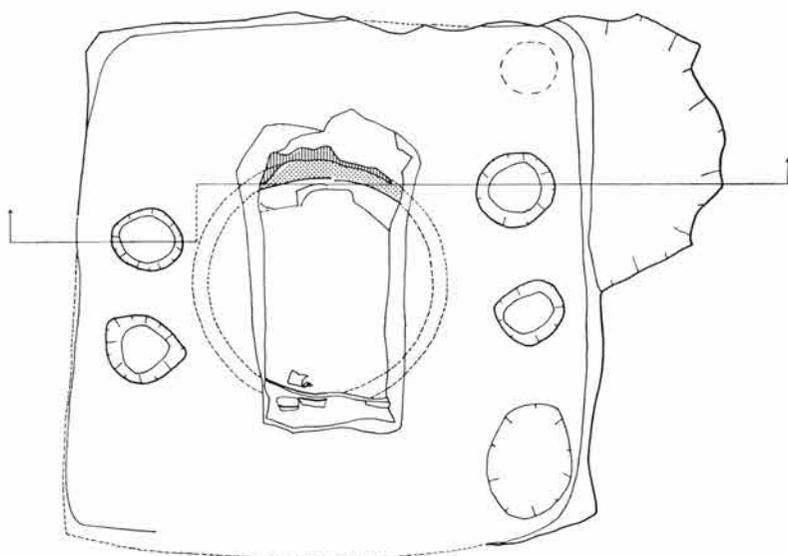
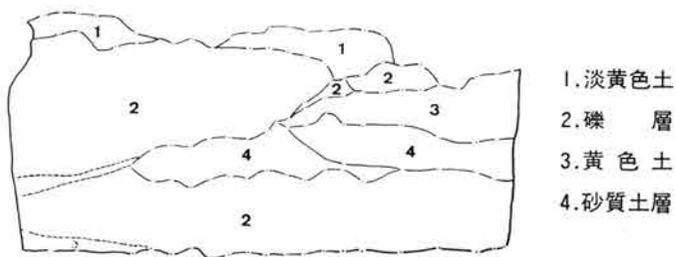


第24図 梵鐘鑄造遺構 SK 22 周辺平面図

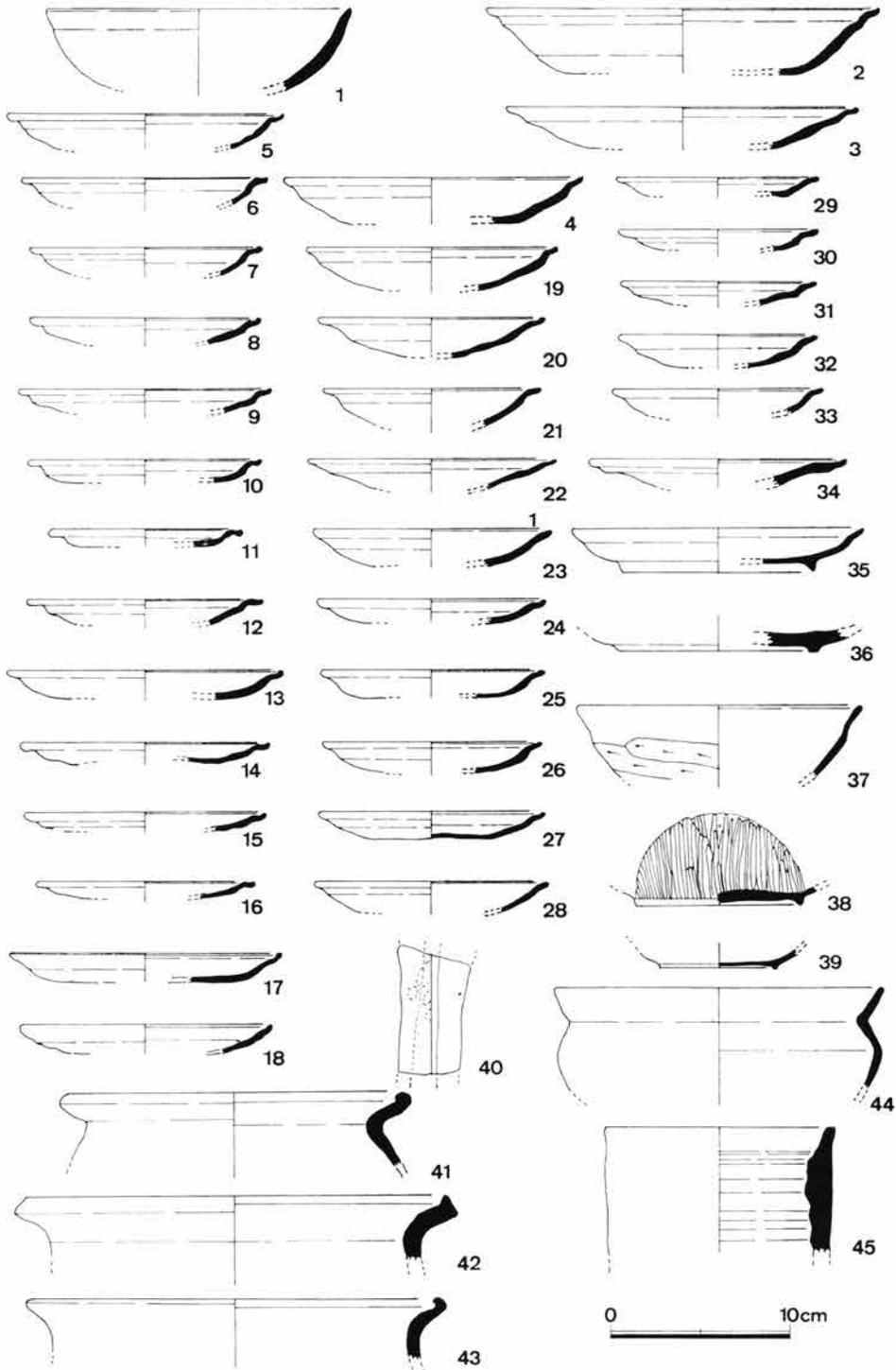
⑩土壇 SK 24 トレンチ北端で検出された、東西約 1.2 m、南北約 0.9 m、深さ 30 cm 前後の長方形の土壇である。埋土は褐色土で、平瓦・丸瓦が出土した。

⑪土壇 SK 23・SK 25・SK 26 トレンチ中央のやや東寄りで検出した小土壇で、いわゆるピットにあたる。SK 23 は径約 0.6 m の円形で、深さ 15 cm 前後である。SK 25・26 は一辺 0.7 m 前後の隅丸方形で、深さ 10 cm 程度である。いずれも褐色の埋土で、須恵器・土師器・瓦器が出土した。

⑫梵鐘鑄造遺構 SK 22 トレンチ東南の溝 SD 16 の南で検出され、西北上部を SD 16 によって切られている。この土壇は、地山である淡黄褐色土・砂礫層を掘り込んでいる。掘形は一辺約 2.7 m の方形で、深さは検出面から 1.2～1.3 m を測る。壁面は 4 面ともほぼ



第25図 梵鐘鑄造遺構 SK 22 実測図



第26図 土器溜りSK13出土遺物実測図
 1~4.土師器 杯 5~35.土師器 皿 36.土師器 37~39.黒色土器 碗
 40.高坏 脚 41~44.土師器 甕 44.黒色土器 甕 45.製塩土器

垂直に掘り下げられ、床面はほぼ水平である。中央部に土台がわずかに残る程度である。礫層上面に炭などの混じる土で土台を造り、この上に梵鐘鑄型本体を置く。内型と思われるものは表面が焼けて赤褐色を呈しているが、内側の粘土はほとんど焼けていない。赤褐色のものが内型の表面とすれば、内径 118 cm 前後となる。内型の外側に淡青灰色砂質土が敷かれたような状態で広がる。土台両側に、各 2 か所のピットがあり、径 30~40 cm、深さ約 15 cm を測る。床面の東南隅に径 30 cm 弱の炭の混入するピット状の部分が認められたが、わずかな凹みで精査のとき消失した。

(3) 出土遺物

今回の発掘調査の出土遺物には、表土層・南北大溝・旧太秦小学校関連溝から近世~近代の遺物、淡褐色土層・褐色土層等の包含層から出土する平安~中世の遺物、溝・土壙等から出土する遺物がある。

①土器溜り SK 13 出土遺物 (第26・27図)

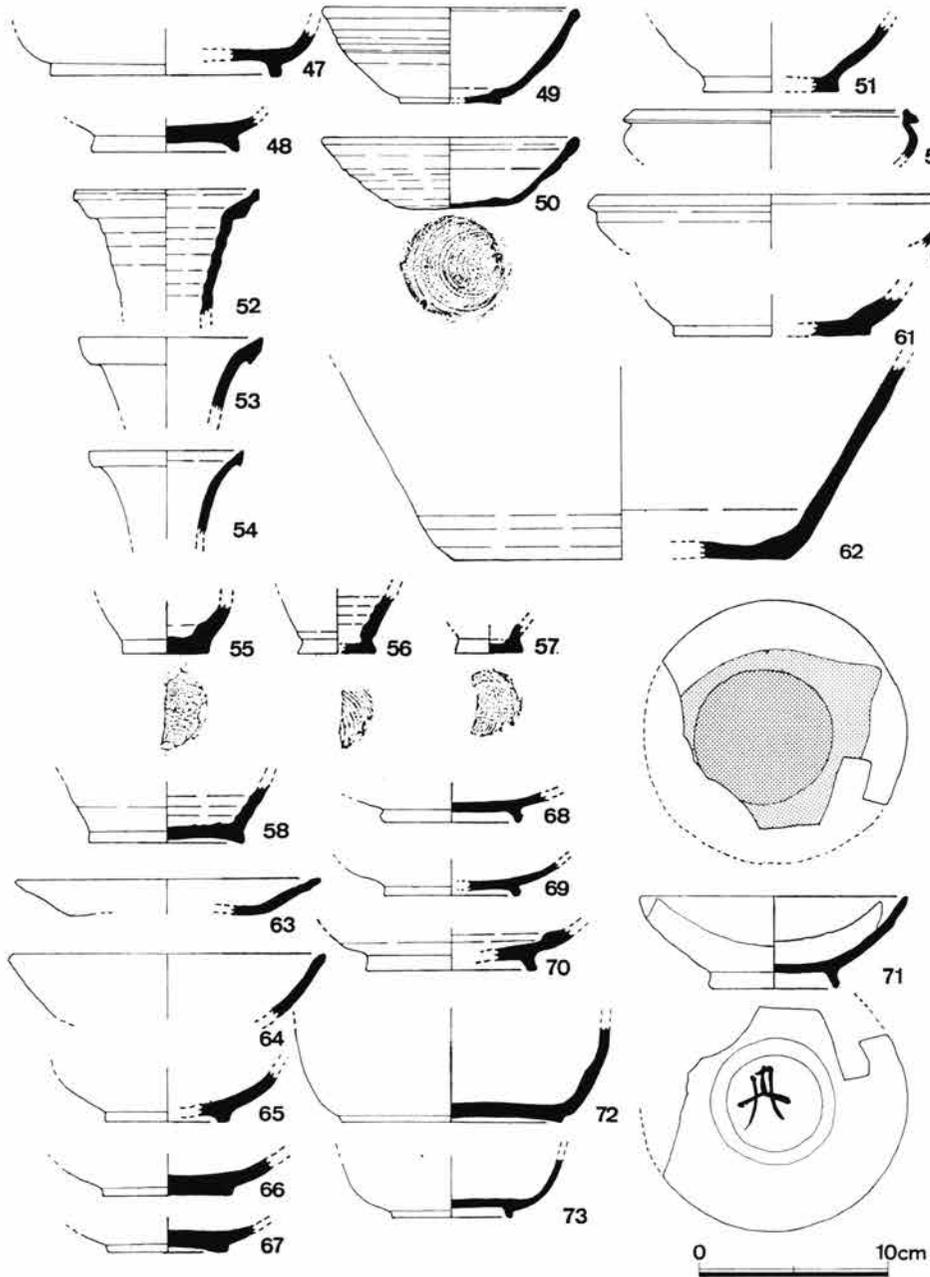
この土器溜りから出土する遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器・緑釉陶器・灰釉陶器・磁器・平瓦・丸瓦等がある。

土師器には、坏 (1~4)、皿 A (5~34)、皿 B (35)、盤 (36)、高坏 (40)、甕 (41~43) 等がある。坏 (1) は、外面の口縁部下半にヘラ削り、上部にヨコナデ、端部近くにやや強くヨコナデを行ない、内面にはナデの後タテ方向のヘラミガキを施すもので、8世紀前半のものであろう。坏 (2~4) は、外面の口縁部上部にヨコナデが施され、端部は屈曲する。口径が大きくやや深いもの (2) と、高さ 3 cm 弱のやや浅いもの (2・3) とがある。高台の付かない皿 A は、口縁部内外面にヨコナデが施され器壁は全体的に薄い。口縁部の屈曲の強いもの (5~12) とそうでないものがある。復元口径は最大 15.6 cm、最小 11.0 cm と若干のバラつきがある。皿 B は、皿 A に高台を付けたもので、成形技法は皿 A と同じである。皿類は、平安京跡左京内膳町 SK 19^(注15) 出土のものに類似する。

黒色土器には、坏 (37)、碗 (38・39)、甕 (44) がある。A 類には坏・碗があるが、坏は器壁がやや厚くしっかりしているが、碗は薄いものである。坏は9世紀初期のものと思われる。B 類は小型の甕だけである。この甕は平安京跡左京内膳町 SK 284^(注15) 出土のものに類似する。

製塩土器で器形のわかるものは、体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる (45) 1 点のみであった。

須恵器には、坏 B (47・48)、碗 (49~51)、壺 (52~54・58)、瓶 (55~57)、鉢 (59~62) がある。碗は、口縁部にロクロ挽きの痕が著しく、底部には糸切り痕が残り、篠窯跡群の小

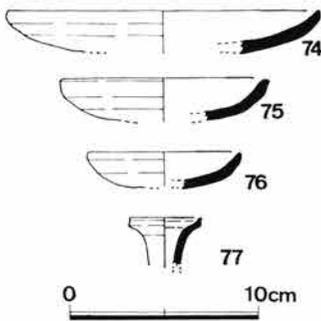


第27図 土器溜り SK 13 出土遺物実測図・拓影

47・48. 須恵器 坏 49~51. 須恵器 碗 52~58. 須恵器 壺 59~62. 須恵器 鉢
63~67. 緑釉 68~72. 灰釉 73. 白磁

柳4号窯・西長尾6号窯出土のものに酷似する。壺は、長頸壺の頸部で口縁端部を2段に挽き上げ、ロクロ挽き痕の著しいもの(52)、口縁端部を上下に挽き出すもの(53・54)がある。瓶は、上記の壺と同形で小さくなるものと思われる。鉢には、口縁端部が断面三角形を呈するもの(59)、外形に肥厚させるもの(60)、底部から体部が斜め上方に直線的にのびるもの(62)がある。(62)は3~4mmの石英・チャートなどを含む粗い胎土である。

緑釉陶器には、碗(64~66)、皿(63・67)がある。高台の付かない皿(63)は、口縁部内外面にていねいなヘラミガキを行ない、釉の発色も良い。口縁部のみの碗(64)は、やや軟



第28図 SD 16 出土遺物実測図

質で断面が淡黄褐色であるが、他はすべて焼成良好で須恵質である。皿を除く底部内面には重ね焼きの痕が残る。

灰釉陶器には、碗(68・69・71)、皿(70)、壺(72)がある。碗は、ロクロ成形後、内面のみていねいなヘラミガキを行ない、(71)は直接釉に浸して塗る方法で、3回浸している。(68)は、内面にスミが付着している。(71)は、内面の釉葉の塗られていない部分に赤色顔料が付着し、底部外面に「丹」の墨書がある。また(68)には、重ね焼きの痕が残る。皿は、内面に段の付くものである。

磁器には、白磁の碗(73)がある。外底面以外に施釉し、畳付部は釉をカキ取っている。胎土はきめ細かく純白で、釉も全体に薄く、釉色は淡乳白色でやや空色をおびている。口縁部に、内面から「花文」を押し付けて文様を造形しており、外面には凹凸が残る。釉色・胎土などからみて、横田賢次郎・森田勉両氏の分類によるⅠ類に属するものと考えられる。

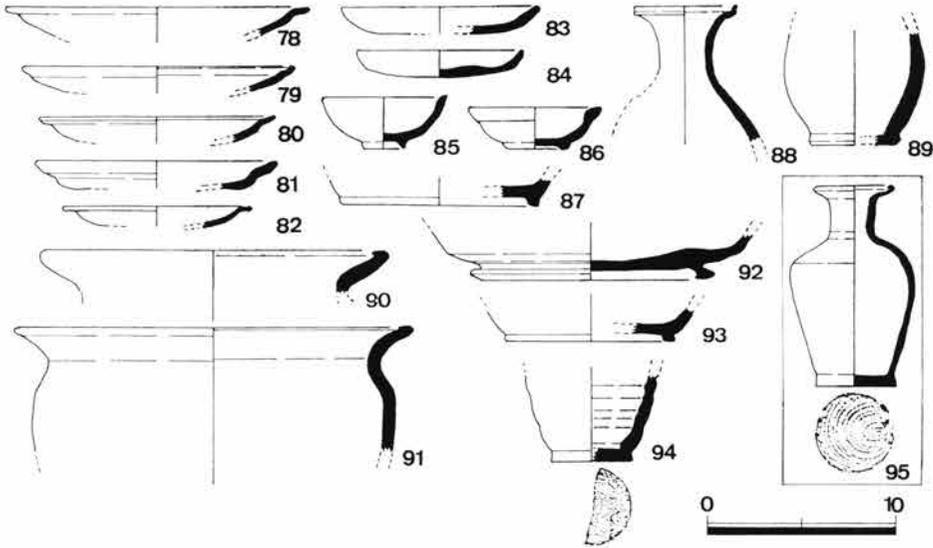
②溝 SD 16 出土遺物 (第28図)

この溝から出土した遺物には、土師器皿(74~76)、須恵器瓶(77)などがある。土師器皿には、口縁部外面を1段にヨコナデするもの(74・76)と、2段にヨコナデするもの(75)とがあり、内面はナデ、底部は未調整である。須恵器瓶は、小型の頸部で、口縁端部を挽き上げやや鋭くおさめる。

③梵鐘鑄造遺構 SK 22 出土遺物 (第29図)

この遺構は、SD 16 によって切られており、また、東西方向の溝状の攪乱があり、上層においては、それらの遺物の混入があるものと思われる。上層出土の遺物には、土師器皿(78~84)・土師器甕(90)、瓦器(85・86)、須恵器坏(87)・須恵器瓶(88・89)と、周辺拡張のとき遺構上面から出土した須恵器瓶(95)がある。

下層出土の遺物には、土師器甕(91)、須恵器坏(92・93)・須恵器瓶(94)がある。



第29図 SK 22 出土遺物実測図・拓影

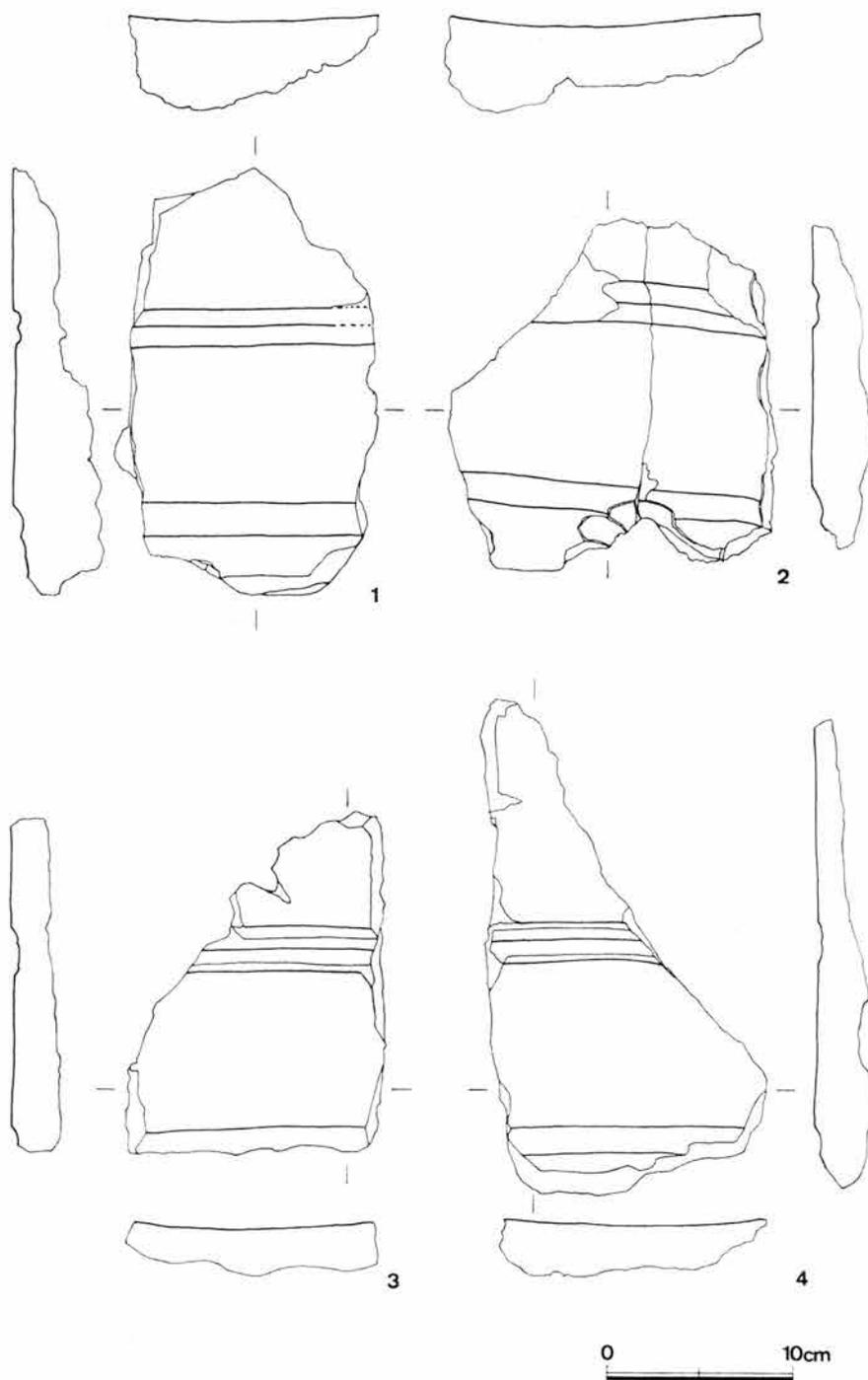
78～84. 土師器 皿 85・86. 瓦器 小碗 88・89. 須恵器 瓶 90・91. 土師器 甕
92・93. 須恵器 坏 94. 須恵器 瓶 95. 須恵器 瓶

また、上・下層から、溶融した塊・粘土塊・鋳型片（第30図・第31図5～13）・銅滓・瓦などが出土した。

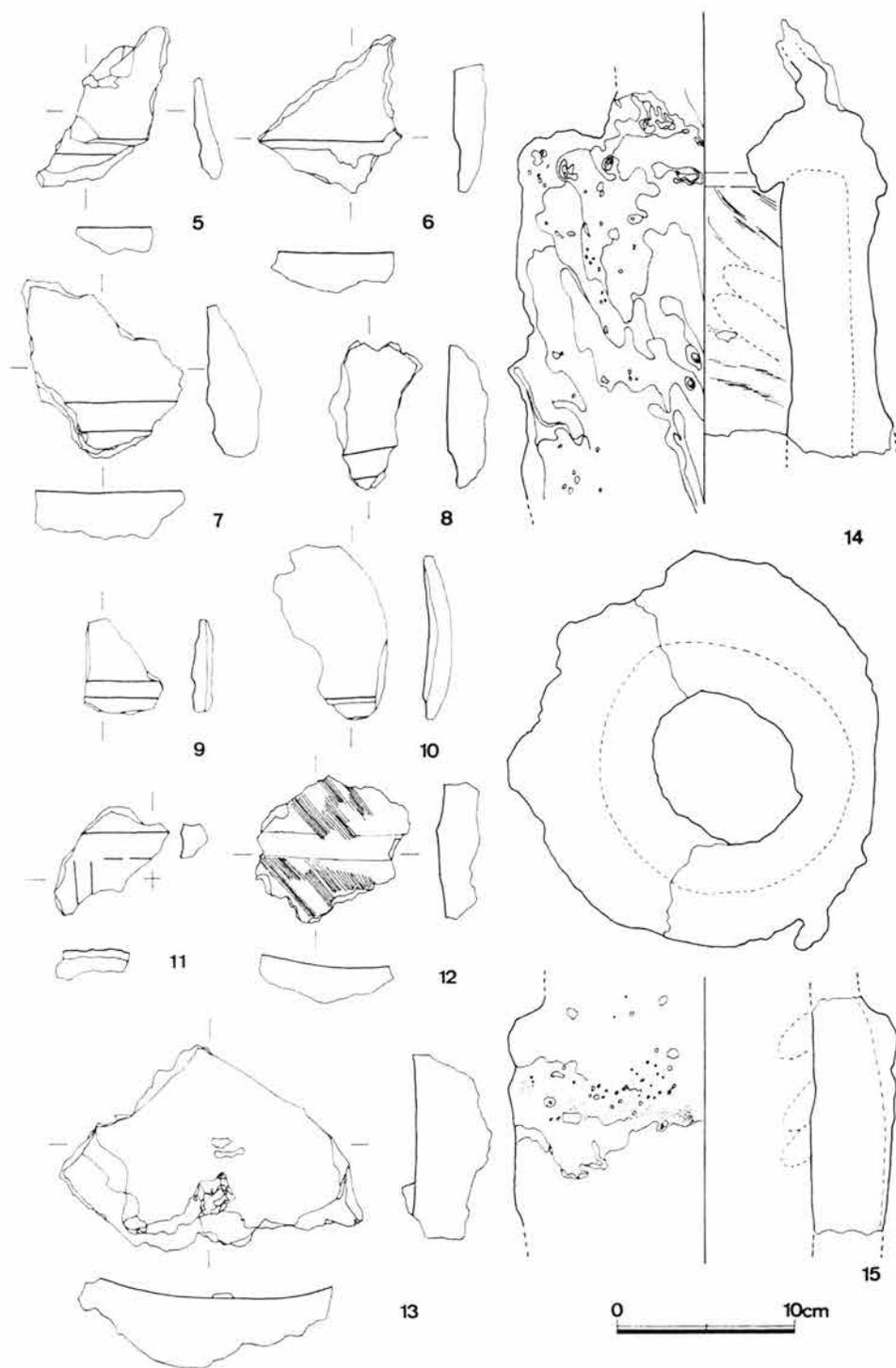
上層出土の土師器皿には、口縁部外面をヨコナデし、口縁部を屈曲させた器壁の薄いもの（83・84）、やや器壁の厚いもの（81）、口縁部を屈曲させないもの（83・84）がある。（83・84）は、SD 16 出土のものに類似する。土師器甕は、口縁端部を内側に折り曲げる。瓦器は小型の碗で、口縁部を肥厚させ、断面三角形（85）、やや丸い台形（86）の高台が付く。胎土は精良であるが焼成はやや甘く、器壁の炭素の吸着が悪く灰白色の部分が目立つ。内外面ともナデ、暗文は施さない。須恵器瓶には、口縁端部を挽き上げ鋭くおさめ頸部から体部にかけて緩く傾斜するもの（88）、卵形の体部で底部に糸切り痕が残るもの（89）がある。

土師器皿（78～82）、須恵器類は、平安中期のもので、土師器皿（84・85）、瓦器碗は、平安末～鎌倉前期のものと思われる。

下層出土の土師器甕は、口縁部が緩く「く」の字に外反し、端部を内側に肥厚させ丸くおさめる。体部内面には、砂・焼けた砂が付着している。須恵器坏（92）は、高台を底部のやや内側に、外向きに付ける。胎土は粗く、焼成はやや軟質である。この器形ものは9世紀以後ではほとんどみられない。須恵器瓶は、体部内面にロクロ挽き痕が著しく残り、底部には糸切り痕が残る。下層出土の遺物は少量であるため判断は困難であるが、9世紀前半～中頃までさかのぼる可能性はある。



第30図 梵鐘鑄型実測図(1)



第31図 梵鐘鑄型実測図(2)

5~13. 鑄型(外型) 14・15. フイゴ状土製品

梵鐘の鋳型は、判明しているものはすべて外型で、内型と思われるものはない。鋳型片には表面に真土が塗られ平滑で、平面及び曲面を持ち、表面がほとんど焼けていないものでハケでナデたような痕のあるもの(12)や、指で押さえたような痕を残すものがある。また、表面が焼け銅の付着したもの(1~11・13)がある。これらのうち、2条の凹線と太さの異なる2本以上の凹線を平行に彫り込んだもの(1)、これと酷似したもの(2~4)、それらの一部と思われるもの(5~10)、直行するもの(11)、平面だけのもの(13)などがある。

(3~4)は、凹線の間隔は8cm前後、復元径120cm前後となる。(1~10)は、中帯もしくは下帯と思われる。(11)は、縦帯と間を分割する凸帯の交叉する部分と思われる。

溶融した塊には、溶融炉・フィゴ羽口と思われるもの(14・15)などがある。(14・15)は、内径10~12cmで内側が淡赤色に焼けている。溶融片と瓦が溶着したもの、スサ状の混和剤が加えられた粘土塊もある。また、焼けてない粘土塊もある。銅滓には、緑色のものと青緑色のものがある。

④SK 13 下層出土遺物

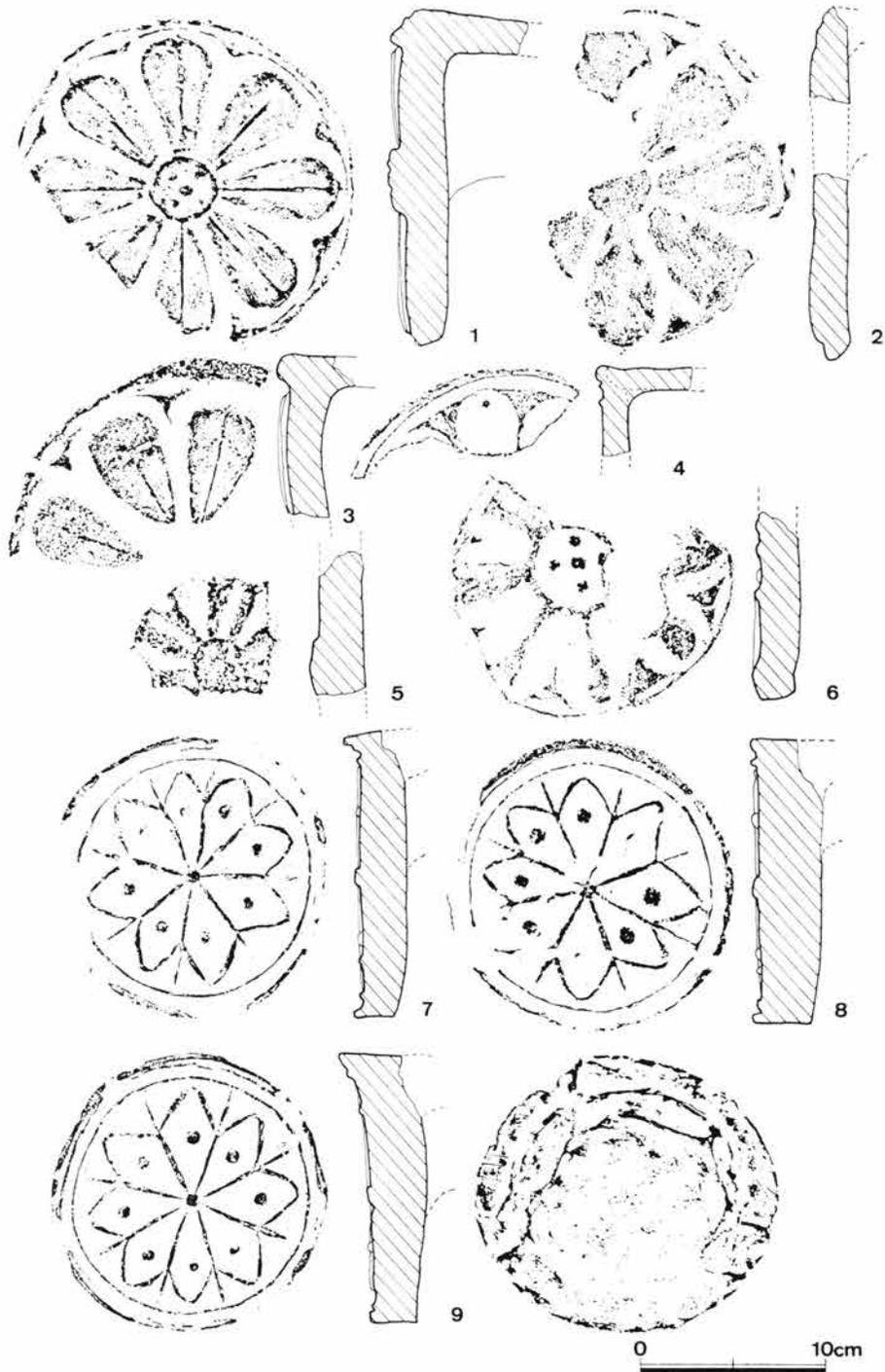
この瓦溜りからは、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などが整理箱に50箱以上出土したが、瓦以外の遺物はみられなかった。

軒瓦は、軒丸瓦・軒平瓦とも出土し、軒丸瓦は5種類、軒平瓦は2種類に各々区分し得る。鬼板の一部と思われるものもある。さらに、平瓦の特徴として凹面には布目痕が、凸面にはタタキ痕がある。タタキ痕は数種類に分類できる。

以下、軒丸瓦から順に特徴を簡単に述べていきたい。

軒丸瓦 I (第32図1~3) 素弁蓮華文軒丸瓦で合計3点ある。肉厚の8葉素弁蓮華文で、弁の中央に稜線があり、花卉の先端は丸いが稜線との接触点は少し尖る。また、弁間に楔形の間弁を配する。中房は突出し、1+4の蓮子を配する。もともと周縁はなかったものと思われる。(1)は、直径19.0cm、中房径4.0cm、花卉幅3.7~4.0cmを測る。焼成はやや甘く、色調は黄褐色、胎土は全体に精良であるが少量の石英・チャートを含む。(2)・(3)は、磨滅が著しいが、(3)には花卉の中央の稜線がわずかに残る。焼成が甘く、色調は(2)が淡灰色、(3)は淡青色である。胎土はやや粗く砂質で、石英・チャートを含む。いずれも、瓦当裏面の端近くに丸瓦を取り付ける。(3)では、取り付けるときの粘土の盛り上がりが見られる。瓦当の厚さは、中房が3.2cm、他が2.0~2.6cmである。

軒丸瓦 II (第32図4) 素弁蓮華文軒丸瓦で、約8分の1が残る。瓦当の一部のみで明確ではないが、花卉は8~10葉と思われる。弁端は丸く、弁の反転を珠点で示している。外縁は幅0.6cm、高さ0.3cmと細く、低い素文である。花卉の深さは、0.2~0.3cmである。焼



第32図 瓦 実測図・拓影 (1)
1~9. SK13 下層出土軒丸瓦

成は良く、色調は外面が暗青灰色、断面が淡茶褐色。胎土はやや粗く、石英・チャートを含む。

瓦当裏面の先端に丸瓦を取りつけている。瓦当面の厚さは約 1.5 cm、丸瓦の厚さは 1.3 cm である。

軒丸瓦 III (第32図5) 素弁蓮華文軒丸瓦で、中房付近しか残存していない。花卉の中央が凹む素弁6葉蓮華文と思われる。中房が突出するが磨滅が著しく、蓮子は不明である。焼成は甘く、色調は表面が淡褐色、断面が淡青灰色である。胎土に石英を含む。

軒丸瓦 IV (第32図6) 素弁蓮華文軒丸瓦で、全体の約3分の2が残存する。花卉の中央が盛り上がる。8葉蓮華文で、弁間に楔形の間弁を配す。中房の境界は凸線で示され、これに花卉が取り付く。中房には1+4の蓮子を配す。外縁はなく、復元径は18.5 cm 前後となる。焼成はやや甘く、色調は赤っぽい淡褐色。胎土は精良で石英などをほとんど含まない。

軒丸瓦 V (第32図7～9) 素弁蓮華文軒丸瓦で、最も数多く出土した。蓮弁を凸線で表現した素弁8葉蓮華文で、弁端は丸みのある剣先形をしており、また、花卉の中央に珠点を配す。中房は、珠点で表現されている。外区に1条の圈線を凸線で表わす。周線は細く低い素文であるが、外側に粘土のはみ出しがある。

8葉蓮華文の場合、蓮弁の割り付けは、4分割した後、それぞれを2分割して8分割するものが一般的であるが、ここではまず、2本の直線で一對の花弁をつくり、その後、それとほぼ等しい間隔で分割する方法を採用したと思われる。また、分割線を間弁の代用としている。軒丸瓦Ⅱを模して筈に刻んだものであろうか。

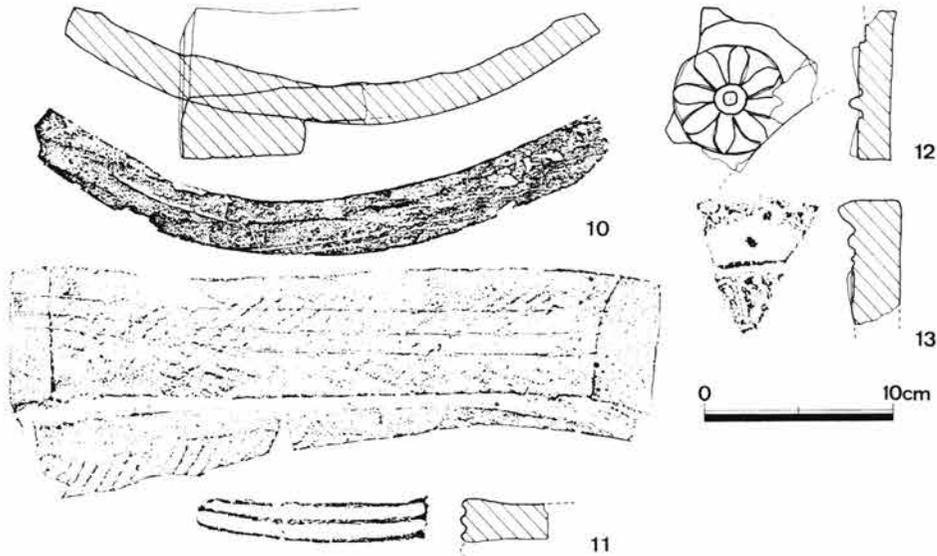
(9)は、瓦当裏面の丸瓦との接合痕が明瞭に残り、裏面端をやや凹めて丸瓦をあて、内側から粘土で補強していることがわかる。また、瓦当面が湾曲している。他に破片が5点ある。

これらの軒丸瓦Vは、いずれも焼成は良く、色調は灰色・暗灰色をしたものが多い。胎土はやや粗く、石英などを含む。

直径は、(7)が15.4 cm、(8)が15.6 cm、(9)が15.0 cm を測る。また、凸線は高さ0.2～0.4 cm、幅0.3 cm 前後である。

次に軒平瓦の特徴を記す。

軒平瓦 I (第33図10) 素文軒平瓦で、平瓦と平瓦を貼りたして瓦当とする段頸形式のものである。頸面には斜め方向のタタキ痕が残り、刃物で切ったような沈線が3条施されている。瓦当の両端は、凸面を斜めに切っている。頸の後ろの接合部は、ヨコにナデたためわずかに凹む。凹面には、布目痕が残るが、瓦当付近は斜めに削られている。



第33図 瓦 実測図・拓影 (2)

10・11. SK 13 下層出土軒平瓦 12. SK 13 下層出土鬼板 13. 攪乱層出土軒丸瓦

軒平瓦 II (第33図11) 重弧文軒平瓦で凸面が欠損しているため弧の数が3重以上であることしかわからない。弧は割竹のようなもので刻んだものと思われる。表面の磨滅が著しいが凹面には布目痕が残る。焼成は甘く、色調は表面が淡褐色、断面が淡橙色である。胎土に、石英・チャート・赤褐色粒を含む。

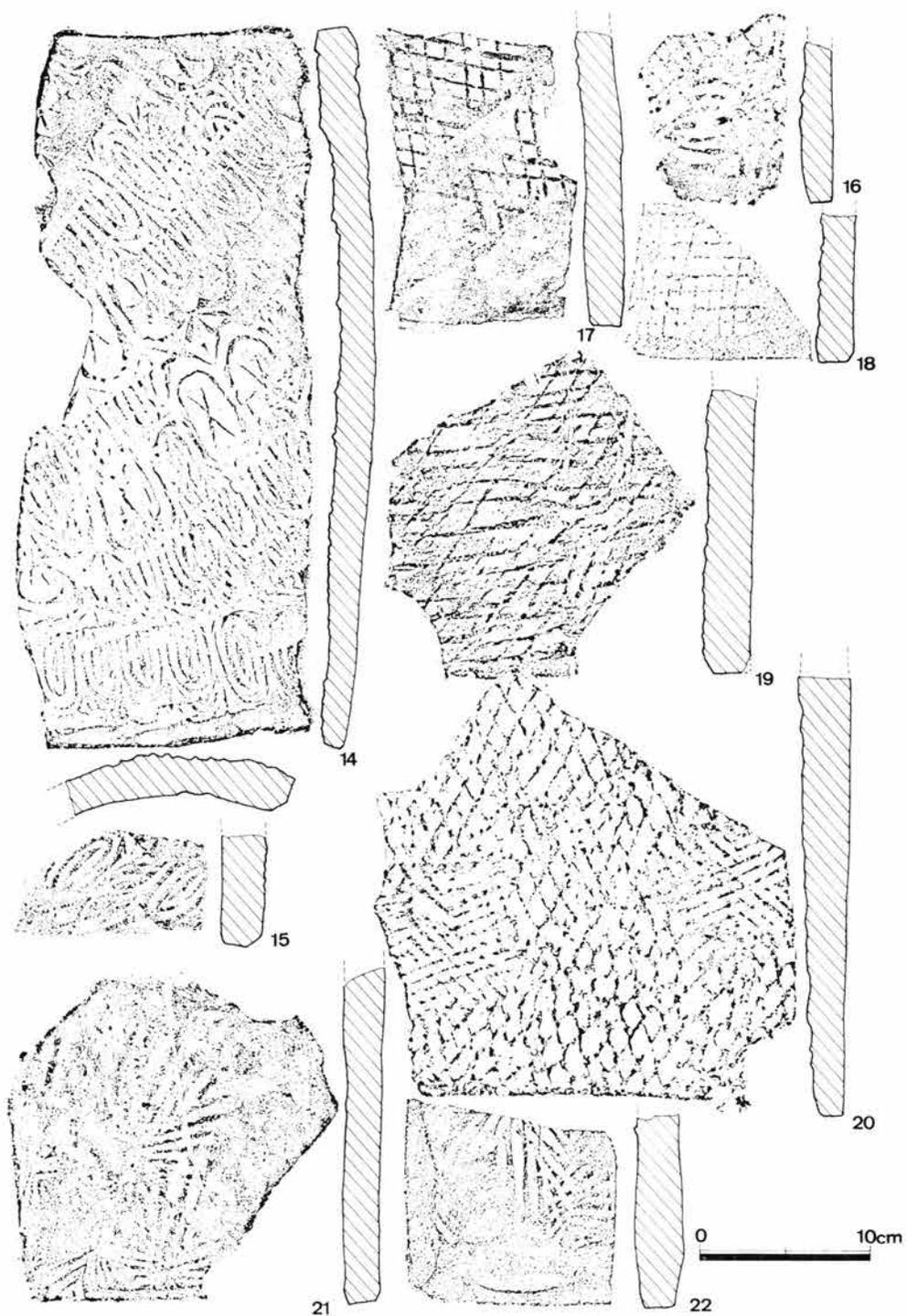
次に鬼板の特徴について記す。

鬼板 (第33図12) 鬼板の一部と思われる破片で、粘土板の上に直径 6.0 cm の素弁 8 葉蓮華文を貼りつけている。蓮華文は、弁端が尖り、中房は中央に突出した蓮子で表現されている。これは、粘土板に粘土を貼りつけた後、スタンプしたことがわかる。丸瓦と接する部分は、ヘラ状のもので切られている。焼成は良好で、色調は表面に自然釉がかかり淡青灰色、裏面は暗灰色、さらに断面は青灰色である。胎土は良く、石英粒をわずかに含む。

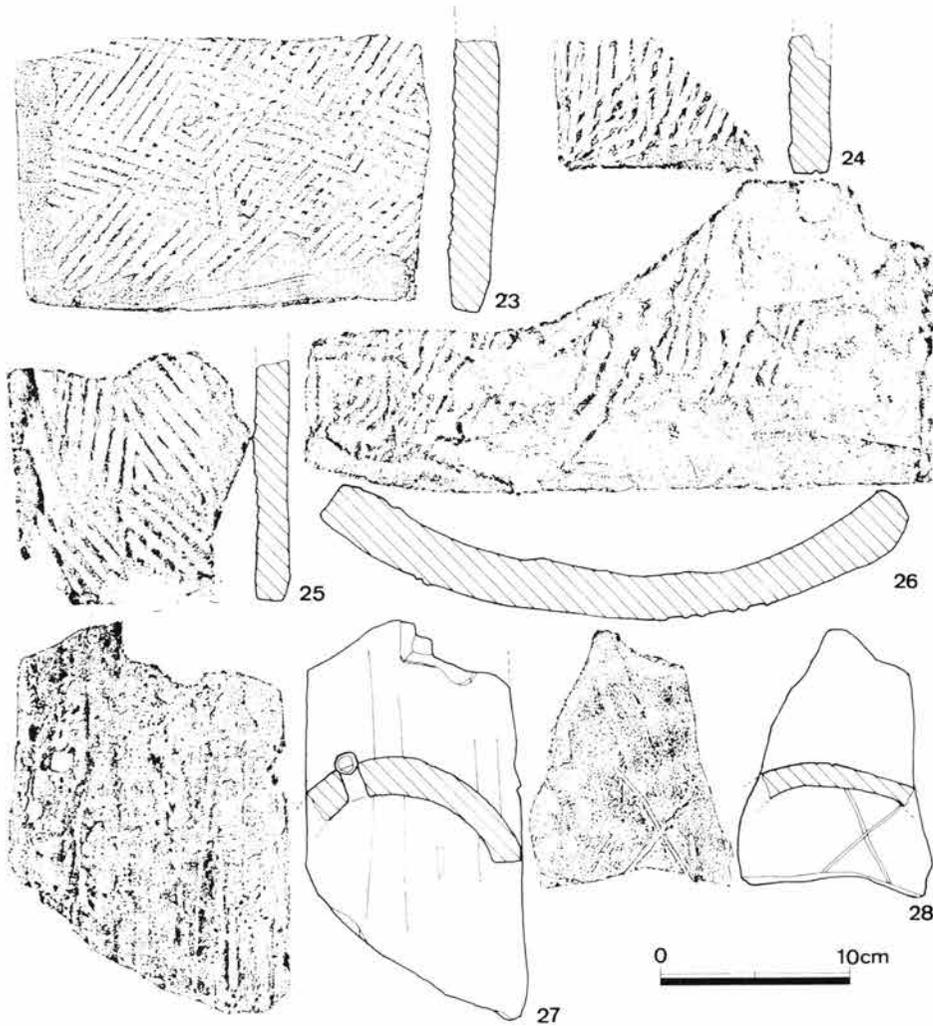
次に平瓦の凸面のタタキ痕について記す。平瓦のタタキ痕から、その原体の文様は、楕円・格子・平行線・方形・菱形・放射状のものが考えられる (第34図)。

楕円のもの、2つの楕円で×印を囲んだもの (14)、楕円を重ねたもの (14・15・16) とやや小さいもの、楕円で+印を囲んだものの4例がある。

格子のものは、直交して粗いもの (17)、それより細かいもの (18)、斜格子で粗いもの (19)、それより細かいもの (20) がある。また、直交するものに長方形の格子のものがある。



第34图 瓦実測図・拓影(3)
14~22, SK 13 下層出土



第35図 瓦実測図・拓影(4)
23~25. 平瓦 26~28. 丸瓦

平行線のもの、(22)~(25)に見える。

方形のもの(23)は、一筆書きのように1本の線で描かれたものである。

菱形のもの(25)は、直線の交わりから判断したもので、完全な菱形ではなく、菱形の各々の角を中心部とした放射状のものかもしれない。また、ジグザグ線のものもある。

放射状のもの(21)は、中心部分から四方に延びた線の間隔が広がる。線の間隔にはバラつきがある。

また、タタキ目をすり消したようなものもある(26)。

これらの平瓦の凹面には布目痕と、いわゆる桶巻き作りの板痕が残る。

丸瓦では、釘穴を持つもの⁽²⁷⁾、凸面に×印を線刻したものがある。

軒丸瓦Ⅰは、いわゆる高句麗系で、文様が幡枝瓦窯^(註18)出土のものに似ている。幡枝瓦窯のものは、花卉が中肉で、弁中央の稜線が細く、弁先端が尖りぎみであり、楔形の間弁は大きくしっかりしている。これに比較すると軒丸瓦Ⅰは、花卉は肉厚で短く、丸みがあり、楔形の間弁も短くなっている。全体的にシャープさが乏しく、中房の蓮子数も少なくなっているが、文様的には軒丸瓦Ⅰと幡枝瓦窯出土のものは同型であるから、軒丸瓦Ⅰは、幡枝瓦窯の流れをひくことは明瞭で、これに続くものと考えられる。

軒丸瓦Ⅱは、花卉が8葉であれば、かつて広隆寺から出土したものに酷似する。^(註19)

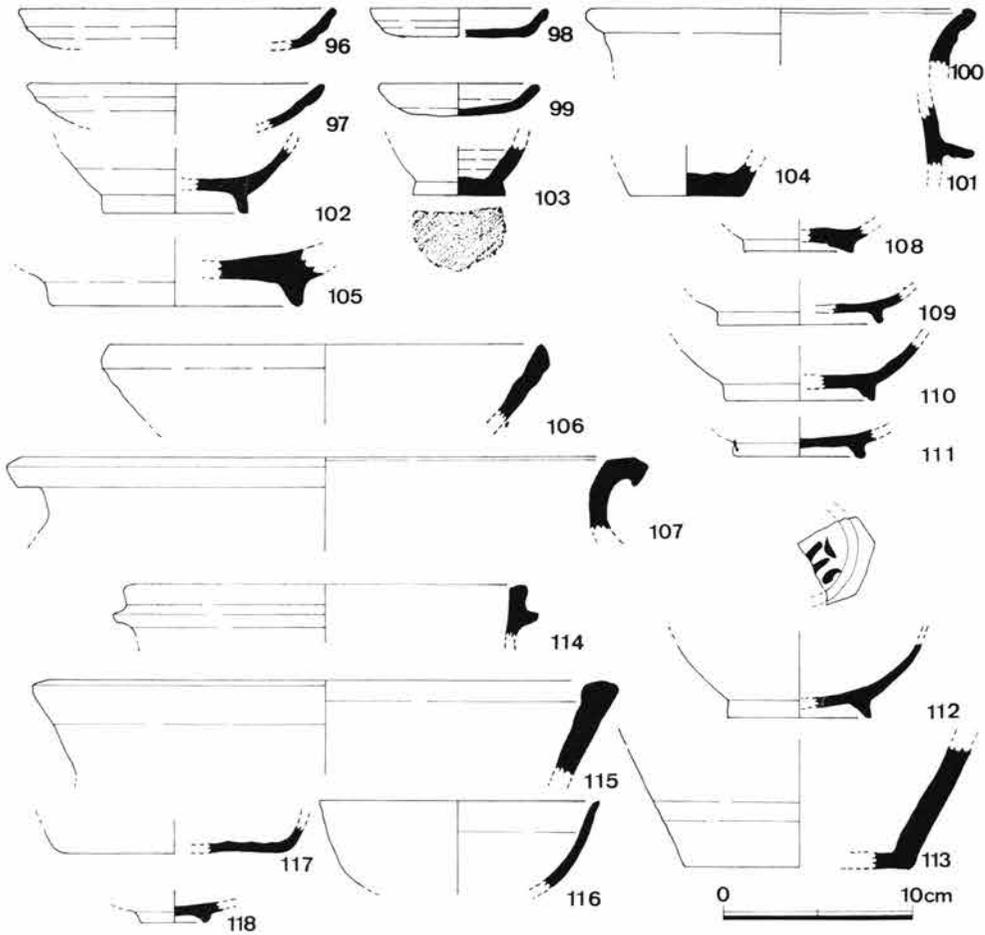
軒丸瓦Ⅳは、同じ瓦が^(註20)広隆寺から出土している。花卉の配置、中房の蓮子の配置が、軒丸瓦Ⅰと同様であるところから、これに続くものと考えられる。

軒丸瓦Ⅴは、石田茂作氏の『飛鳥時代寺院址の研究』に、藤原時代のものとしてスケッチが掲載されているのみで、まぼろしの瓦とされていたが、今回の調査で初めて確認されたものである。^(註21)瓦等文様の作製等については先にふれたとおりで、文様の原型は、軒丸瓦Ⅱ、または同型の瓦にあると思われる。瓦当裏面の丸瓦との接合技法は、瓦当裏面上半部の端を凹ませて、丸瓦の先端を半分埋め込む、いわゆる印籠つき法による。また、他の出土瓦から見ても、この瓦が藤原（平安中期）時代のものでないことが明らかになった。

軒平瓦が出現するのは、7世紀中頃といわれており、京都市西京区の^(註22)檜原廃寺出土の素文軒平瓦と、今回出土した素文軒平瓦とは共通する点が多い。檜原廃寺出土の段顎の軒平瓦には、瓦当が平瓦を2枚重ねた深顎で、顎面に2条の沈線が施されたものがある。また、顎面に、単弁8葉蓮華文をスタンプしたものがある。この単弁8葉蓮華文に先行すると考えられる素弁8葉蓮華文をスタンプした鬼板も今回出土している。檜原廃寺の軒平瓦は、単弁（重弁）8葉蓮華文軒丸瓦との組み合わせがあり、創建当時のものとされている。これに比較して今回出土の軒平瓦は、他の出土瓦から考えてやや先行するものと思われる。

⑤包含層中の出土遺物（第36図96～118）包含層中の遺物は、南北方向に走る大きな溝（SD 19）の周辺にて検出される淡褐色土層・褐色土層から出土するものと、SK 13 周辺の褐色土層から出土するものに代表される。このように、SD 19・SK 13 のような遺構を周辺に伴っているが、上記の包含層は一つ続きのものと理解され、層中の遺物を観察してもほとんど明確な時期差のないものである。したがって、以下にまとめて出土遺物を列記しておきたい。

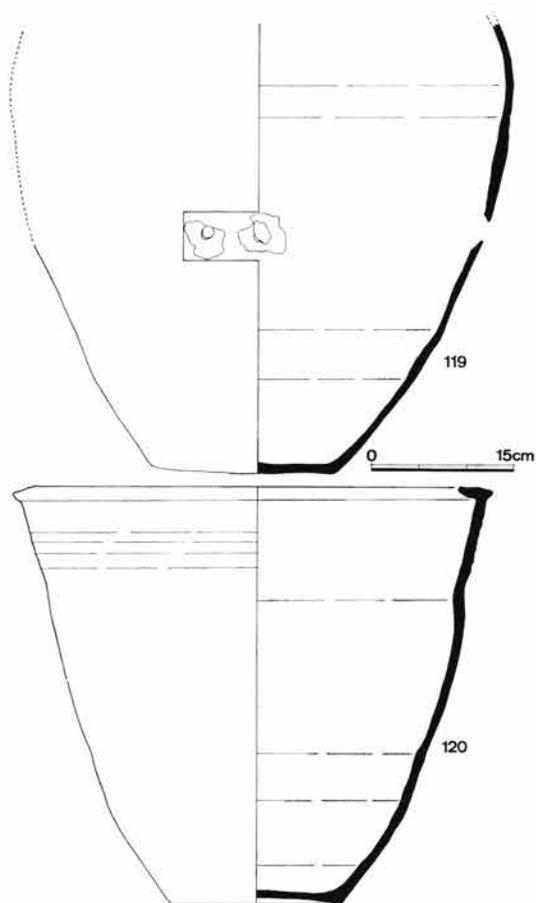
土師器皿（96～99）、土師器甕（100）、釜（101）、須恵器碗（102）、壺（104）、瓶（103）、



第36図 包含層出土遺物実測図・拓影

大鉢 (105), わり鉢 (106), 甕 (107), 緑釉陶器 (108~110), 灰釉陶器 (111~113), 瓦質鍋 (114), 青磁 (116), 軒丸瓦 (第33図13) など多様である。

土師器皿は、口縁外面を2段ナデにて調整している。(102) は、いわゆる無釉陶器に含まれる。内面に丁寧なナデ、外面にヘラ削りとわずかにミガキが見られる。(105) は、厚い底部に大きな高台が付き、胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は断面が灰白色、表面が淡黄灰色を呈している。東海地方においてよく見受けられるものと推定される。緑釉陶器 (108) は、胎土が精良で焼成がやや甘く、色調は淡黄色、全面に淡黄緑色の釉がかかる。削り出し高台である。(109) は、胎土は精良、焼成良好で断面が淡灰色、全面に黄緑色の釉がかかる。内面にヘラミガキを施し、貼り付け高台が付き。(110) は、胎土良好、焼成良好で断面が灰色、全面に濃緑色の釉がかかり、釉だまりが見られる。肥厚する貼り付け高台が付き。灰

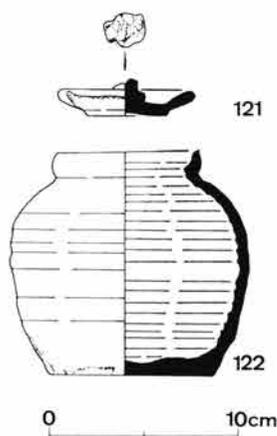


第37図 改葬骨容器実測図

み、焼成良好で断面の色は灰色の間に黒色がサンドイッチ状にはさまり、外面に淡黄色の釉がかかる。

青磁碗（116）は、淡黄灰色の釉がかかる。他に 鎚蓮弁を有し、蓮弁周辺の削りが深く、暗青色の釉がかかり、貫入のみられる蓮弁一単位程度のものが出土している。龍泉窯系かと思われる。また、合子状のものも出土している。

なお、SD 19・SK 13 の他にこれら一連の包含層の周辺には小さな遺構が存在する。SK17・SD 11・SK 23 といったものがそれである。これらの遺構の取り扱いについては、たとえばSK 17 のように遺構範囲を今一つ明確にし得ないことや、SD 11 のように遺物が極めて少ないなどの理由により、個別の遺構を取りあげた前節のところでごえて記さなかった。そして、これらの遺構中の遺物もまた、先に述べた包含層の遺物と時期的な差がないものと想定できるのである。



第38図 改葬骨容器内の小型壺実測図

釉陶器（111）は、胎土は精良で黒色粒を含み、焼成良好で断面が淡灰色、内面に淡黄灰色の釉がかかる。ふんばりぎみの貼り付け高台が付き、底部外面に「尸」の墨書が見られる。（112）は、胎土良好、焼成良好で断面が灰白色、わずかに透明感のある釉がかかる。やや高い内湾する高台が付き。（113）は、胎土がやや粗く石英・黒色粒を含

したがって、包含層中の遺物としてこれらも一括してあげておいた。順に代表例を記すと SK 17 からは瓦質鉢 (115), SD 11 からは須恵器杯 (117), そして SK 23 からは瓦器底部 (118) などとなる。

3. ま と め

今回の調査で、広隆寺の伽藍、建物に関連する遺構は検出されなかったが、梵鐘を鋳造した遺構が発見されたこと、7世紀前半の軒丸瓦(「まぼろしの瓦」)が出土したこと等、多くの成果があった。

検出された遺構は、梵鐘を鋳造した跡・土壇・小土壇・溝等であるが、調査地区内の攪乱が著しく、各々の関連を明確にするのは困難である。これまでに判明したことを記してまとめとする。

(1) 梵鐘を鋳造した遺構について

この遺構は、一辺約 2.7 m の方形で、検出面からの深さは 1.2 m 前後である。一辺に簡単な掘り込みが取り付いている。そして、底面には鋳型本体を設置するための鋳形土台(定盤)が残存していた。

各地で発見されている梵鐘鋳造遺構の共通点・特徴等を比較検討してみたい。遺構としては、奈良時代のもの(兵庫縣多可郡中町多可寺)^(注11) 1か所、平安時代のもの(滋賀縣大津市長尾遺跡)^(注12)、京都市左京区京都大学構内、広隆寺)^(注10) 3か所、鎌倉時代のもの(奈良縣桜井市山田寺跡)^(注14) 1か所、室町時代(長野県上伊那郡飯島町寺平遺跡)^(注13)、岐阜縣恵那郡坂下町金屋遺跡、滋賀縣愛知郡秦荘町軽野正境遺跡)^(注24) 3か所が発見されている。鋳型の出土としては、香川県丸亀市郡家町宝幢寺池から2個の撞座の鋳型と部位不明の鋳型片が、福井縣福井市篠尾町篠尾廢寺から竜頭鋳型の出土が知られている。^(注25)

梵鐘を鋳造した遺構の共通点として、平安時代以前のもは、平面が一辺3 m前後の方形・隅丸方形をしており、深さは1 m前後でよく似た形をしている。多可寺の場合は、削平されて浅くなったものと思われる。鋳型土台(定盤)の残るものは、底面中心に造られている。定盤の残っていないものは、底面に2本または3本の溝(その両端にピットを有すものもある)がある。この溝は、定盤の下に据え置かれた、鋳型本体を固定させるための縮木との連結に使われる掛木の痕跡と推定されている。京都大学 AP 22 区 SK 257 では、定盤の下部に掛木と考えられる丸太材の痕跡が検出されている。^(注26) この丸太材は、井桁状に組み合わせられ、鉄釘で結合した様子まで明らかになっている。

多可寺では、定盤の下に掛木痕跡と思われるものはない。広隆寺 SK 22 では、鋳型土台

(定盤)の両側にピットが存在するが、明瞭な掛木痕跡はない。取り上げ後、反転して底部の礫を削平していたとき、礫のすき間があったが連続しない。また、これは1か所だけであった。

土塋底面の隅にピットが存在する例があり、これは、遺構の覆屋の柱痕、または、梵鐘をつり上げる構架材の痕と思われる。現在では、後者が有力と考えられている。^(註26)多可寺のものは、ピットがなく、土塋の一辺が傾斜している。斜面を利用して引き上げる方法をとったためであろうか。SK 22の一辺にある掘り込みは、これと似ているが、作業するときの昇降の足場とも考えられる。

SK 22 出土の鋳型片の表面には銅を吸着したもの、銅滓が凝結したものが多い。また、銅を含むため重くなった塊等が大小様々ある。これは、鋳造を途中で止めたためと考えられる。多可寺ではこのような遺物はなく、他遺跡でも見られないものである。それらの遺跡のものは、表面が褐色及び暗灰色をしたものが一般的である。

SK 22 では、梵鐘の鋳造は成功しなかったものと考えられる。

広隆寺は、『広隆寺縁起』によれば、「弘仁9年(818)火災に逢い、堂塔、歩廊、縁起雑文等ことごとく焼亡せり」とある。『広隆寺資財帳』には、「承和9年(842)鋳造の銅鐘は、周九尺六寸、(径三尺二寸)、厚四寸」と記されている。これから、広隆寺の梵鐘鋳造が火災後に行なわれたことが推測できる。しかし、この銅鐘は、SK 22 出土の梵鐘鋳型より小さい。この銅鐘の前に、SK 22 で梵鐘の鋳造にあたったのであろうか。

また、西本願寺飛雲閣にある広隆寺鐘には、久安6年(1217)の銘があり、口径109.7cmを測る。

(2) SK 13 下層出土の瓦について

この瓦溜り出土の軒瓦には、7世紀前半と考えられるもの、これに続く7世紀中頃と考えられるものがある。前者には、軒丸瓦Ⅰ・Ⅱがある。軒丸瓦Ⅰの瓦当文様は、先に記したように幡枝瓦窯出土瓦に酷似しており(全体にやや丸くなっているが)あまり時間差をおくことなく作製されたものと考えられる。軒丸瓦Ⅱは、酷似したものがかつて広隆寺から出土し、瓦当文様が、四天王寺・法隆寺出土の素文蓮華文軒丸瓦に酷似する。ここでも製作年代は、あまり差がないものと考えられる。また、瓦当裏面の丸瓦との接合技法も、瓦当裏面先端に丸瓦を接合する、いわゆる飛鳥時代に多くみられるものである。これらのことから、この2点は、7世紀前半のものと考えてよからう。

軒丸瓦Ⅰに続くものとして軒丸瓦Ⅳを、軒丸瓦Ⅱに続くものとして軒丸瓦Ⅴをあげた。これらの瓦も、丸瓦との接合技法は、先にあげた瓦と基本的に差がない。

軒平瓦は、榎原廃寺出土のものと同様の点が多くあるが、榎原廃寺出土瓦の組合わせと比較してみると、ここでは、軒平瓦Ⅰ・Ⅱと組になるような軒丸瓦は出土していないとみるべきであろう。また、軒平瓦Ⅰと軒丸瓦では、焼成・胎土に差異がある。軒平瓦Ⅱと組合わされるものは現段階では適当なものがない。(わずかに、軒丸瓦Ⅲの表面の色調が似ている。)

かつて、高橋美久二氏は、葛野・乙訓郡の古瓦の系譜として、北野廃寺(幡枝瓦窯から供給)―広隆寺―榎原廃寺―山崎廃寺―宝菩提院(願徳寺)―乙訓寺と連なることを指摘されている。幡枝瓦窯(北野廃寺)―広隆寺のルートに、軒丸瓦Ⅰ―Ⅳが、広隆寺―榎原廃寺のルートに、軒平瓦Ⅰ及び鬼板がある。今回出土の瓦は、このルートが強固なものであり、秦氏との関係を裏づけることのできる資料となるものである。

瓦溜り(SK 13 下層)の埋められた時期は、軒丸瓦と軒平瓦に若干の差異があることから、軒平瓦の時期と考えている。

また、これらの瓦は明確な遺構(広隆寺の建物跡)に伴う遺物でないため、広隆寺創建に近い時期の瓦と思われる瓦を含むが、創建瓦とは断定できない。このことは、今後考えて行きたい。

その他の遺構で、北東～南西方向の3条の溝(SD 11・16・18)が、現在の広隆寺建物群の方向と異なること。これらの溝から出土する遺物と、南北大溝(SD 19)とこれに平行して造られた墓の時期の間の遺物がほとんどないこと等から、斜め方向の溝の時期から墓の造られた期間にどのように利用されたのか興味深いものである。

今回発見された資料が活用できれば幸いである。

(石尾 政信)

付表 1 遺 物 観 察 表

土 器 だ ま り SK 13

器種	器形	番号	法 量		形 態 の 特 徴	成 形 技 法 の 特 徴	備 考
			口 径 (cm)	高 さ (cm)			
	坏	1	(17.0)	(4.8)	<ul style="list-style-type: none"> ○底部と口縁部の境はやや不明瞭。 ○口縁部は、内湾ぎみに立ち上がる。 ○端部は、わずかに外反し、つまみ上げ、丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面は、口縁部下半からヘラ削り、上部をヨコナデ。 ○内面は、ナデの後、口縁部にタテ方向のヘラミガキ(暗文)を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○焼成、良。 ○胎土、石英、チャート(2mm)黒褐色粒を含む。 ○色調、淡褐色。
	坏	2	(22.0)	3.7	<ul style="list-style-type: none"> ○底部と口縁部の境は明瞭。 ○口縁部は、外向に直線的に開き、上部がヨコナデにより屈曲する。 ○端部をつまみ上げ、丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面は、口縁上部をヨコナデ。他は、未調整、粘土の縫目が残る。 ○内面は、ヨコナデ。斜方向のハケ目が残る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○焼成、良。 ○胎土、赤褐色粒(多い)黒褐色粒を含む。 ○色調、淡褐色。3は淡橙褐色。
	3	(19.7)					
	4	(18.6)	2.6				

器種	器形	番号	法 口径 (cm)	量 高さ (cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考				
皿	Ⅲ	5	(15.6)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部を強く外反させ、屈曲する。 端部をつまみ上げ肥厚させ、丸くおさめる。 器壁は2mm前後で薄い。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面、口縁部内外面ヨコナデ。 外底面、ユビオサエ痕あり。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土、石英、赤褐色粒を含む。(6) 色調、6は赤褐色他は淡褐色 8,12は内面に、9は端部にススが付着。 				
		6	(14.9)								
		7	(13.2)								
		8	(13.0)								
		9	(14.2)								
		12	(13.3)								
		10	(13.1)					1.2	<ul style="list-style-type: none"> 同上 器高は低い。 	同上	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土赤褐色粒少量含む。 色調、橙褐色。
		11	(11.8)					0.9			
		13	(15.4)					1.2	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部を外反させ屈曲する。 端部をつまみ上げ肥厚させ、丸くおさめる。 器壁は薄い。 器高はやや低い。 	同上	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土、赤褐色粒を少量含む。 色調、淡褐色。
	14	(14.0)									
	15	(13.5)									
	16	(12.2)									
	17	(15.1)	1.6								
	18	(14.0)									
	19	(14.0)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部を外反させ屈曲する。(19~21) あまり屈曲しない。(22・23) 端部をつまみ上げ肥厚させ、丸くおさめる。 器高はやや高い。 	<ul style="list-style-type: none"> 同上 19は内面にハケ目が残る。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土、石英、赤褐色粒を含む。(23) 色調、淡褐色。 19, 23は内面にスス付着。 					
	20	(12.7)									
	21	(12.2)									
	22	(14.0)									
23	(13.5)										
24	(12.8)	1.5	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部を外反させわずかに屈曲する。 端部をつまみ上げ肥厚させ、丸くおさめる。 器壁は薄い。 器高はやや低い。 	同上	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土、石英、赤褐色粒を含む。 色調、淡褐色 橙褐色(26) 28は口縁部にスス付着。 						
25	(12.6)										
26	(12.2)										
27	(12.6)										
28	(13.0)										
29	(11.4)	1.1	<ul style="list-style-type: none"> 同上 器壁は薄い。 器高は低いもの(29~31) とやや低いもの(32・53)がある。 	同上	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土、同上。 色調、淡褐色、淡灰褐色(30) 橙褐色(31) 30は内面にスス付着。 						
30	(11.2)										
31	(11.0)										
32	(11.2)										
33	(11.8)										
34	(14.5)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部を外反させる。 端部をつまみ上げ肥厚させ、丸くおさめる。 器壁はやや厚い。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面、口縁部内外面ヨコナデ。 粘土の継目が残る。 内面にハケ目が残る。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土、石英、赤褐色粒を含む。 色調、淡橙褐色。 						
ⅢB		35	(16.4)	2.5	<ul style="list-style-type: none"> 高台の付く皿。 口縁がわずかに外反する。 器壁は薄い。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面、口縁部外上面ヨコナデ。 底部との境に断面三角形の高台をはり付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土、石英、赤褐色粒(多い)を含む。 色調、淡褐色。 内面外底部にスス付着。 				

器種	器形	番号	法 量		形態の特徴	成形技法の特徴	備 考
			口径 (cm)	高さ (cm)			
	盤	36			◦高台が付く。	◦内面ナデ。 ◦外底部に断面台形の高台をはり付ける。	◦焼成、良。 ◦胎土、石英、赤褐色粒を含む。 ◦色調、内面淡褐色。外面暗灰色。
黒色土器 (A類)	坏	37	(16.0)		◦口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、わずかに外反する。	◦内面ナデの後、ヨコ方向のヘラミガキ。 ◦外面上部はナデ、下部はヘラ削り、後ヘラミガキ。	◦焼成、良。 ◦胎土、石英、雲母を含む。 ◦色調、口縁下部は淡褐色。
	碗B	高台径	(9.3)		◦高台の付く碗。	◦内面に一定方向のヘラミガキ。 ◦外面不明。	◦焼成、良。 ◦胎土、石英、チャート、雲母を含む。 ◦色調、外面赤褐色(38)
			(5.4)				
土師器	高坏	40			◦円形の脚部。 ◦脚部の中空部分も円形。	◦外面はユビオサエ後ナデ。	◦焼成、良。 ◦胎土、石英、赤褐色粒を少量含む。 ◦色調、淡褐色。
	甕	41	(19.6)		◦口縁部を「く」字形に曲げ端部を肥厚させる(41・42) ◦口縁部を外反させ、端部を内側に曲げる。	◦口縁部内外面ともヨコナデ。 ◦体部、ユビオサエ後ナデ(41)	◦焼成、良。 ◦胎土、石英、赤褐色粒を含む(41) ◦色調、赤褐色(41) 淡橙褐色。
		42	(24.8)				
43		(24.6)					
黒色土器 B類	甕	44	(18.6)		◦口縁部を「く」字形に曲げ、端部を丸くおさめる。	◦口縁部内外面ともヨコナデ。	◦焼成、良。 ◦胎土、石英、雲母を含む。 ◦色調、黒色、外面に多量のスス付着。
製塩土器		45	(12.9)		◦体部から直線的に立ち上がるが、口縁部がわずかに外反する。	◦内面に凹凸がある。	◦焼成、良。 ◦胎土、チャート、赤褐色粒を含むやや粗い。 ◦色調、淡橙褐色。
須恵器	坏	47	高台径 (12.8)		◦口縁部と底部の境に高台を付ける。 ◦高台は、やや外向きに付ける。	◦内外面ロクロナデ。高台を貼り付ける。	◦焼成、良。 ◦胎土、石英、黒褐色粒を含む。 ◦色調、淡青灰色 暗灰色(48)
		48	高台径 (7.9)				
	碗	49	(13.6)	5.0	◦口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり、端部を肥厚させ、丸くおさめる(49・50) ◦底部が盛り上がるもの(49・51)とそうでないもの。	◦内外面、ロクロナデ。 ◦水挽き痕。 ◦底部糸切り痕。	◦焼成、やや軟。 ◦胎土、石英、黒褐色粒を含む。 ◦色調、淡青灰色(49・50) 淡黄灰色(51) ◦50は3か所にスス付着。
		50	13.6	3.8			
		41	高台径 (7.2)				
	壺	52	(9.8)	(残) (5.5)	◦頸部は外反し、口縁端部をつまみあげ、やや鋭くおさめる。 ◦52は端部に二段の稜をもつ。	◦内外面、ロクロナデ水挽き痕(52)	◦焼成、良、軟質(53) ◦胎土、黒褐色粒を含む。 ◦色調、淡青灰色(52) 灰白色(53) 淡黄灰色(54)
		53	9.8	(残) (3.5)			
54		(8.2)	(残) (4.2)				

器種	器形	法 量		形態の特徴	成形技法の特徴	備 考		
		番号	口径 (cm)				高さ (cm)	
	瓶	55	底部径 4.6		<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 水挽き痕。 底部糸切り痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 黒褐色粒を含む。 赤褐色粒を含む(57) 色調, 外面青灰色(55) 淡青灰色。 55は, 底部に自然釉が付く。 		
		56	底部径 (4.3)					
		57	底部径 (3.6)					
	壺	58	底部径 (8.4)	<ul style="list-style-type: none"> 底部近くでは胴部が斜上方向に直線的に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 内面に水挽き痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, やや軟。 胎土, 石英を含む。 色調, 淡紫褐色。 内外面にスス付着。 		
		59	(14.4)	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は内湾し, 端部をつまみあげ, 断面三角形を呈するもの(59)と外側に肥厚させるもの(60) 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 黒褐色粒を含む。 色調, 淡青灰色。 		
	60	(18.4)						
	61	底部径 (10.4)	<ul style="list-style-type: none"> 胴部は, 内湾ぎみに立ちあがる。 				<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 底部糸切り後, ケズリ。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英, 黒褐色粒(多い)を含み, やや粗い。 色調, 淡青灰色。
	62	底部径 残高 (17.6) (4.8)	<ul style="list-style-type: none"> 胴部は, 斜上方向にほぼ直線的にのびる。 				<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 胴部の最下位はヘラケズリ。 底部はナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英, チャート, 黒褐色粒を含み粗い。 色調, 淡青灰色。
	緑釉陶器	碗	64	(16.5)	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は, 内湾ぎみに立ちあがり, 端部がやや外反し, 丸くおさめる(64) 内湾ぎみに立ちあがる口縁部, 輪高台(65) 円板形に突出するケズリ出し高台(66) 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ(64・65) 貼り付け高台(65) ケズリ出し高台(66) 外面, ヘラケズリ後ヘラミガキ。 内面, ヘラミガキ(64・66) 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成は, やや軟質, 断面淡黄褐色。淡黄緑色に発色。(64) 焼成は良好, 断面暗灰色, 石英粒黒褐色粒を含むやや粗い青緑色に発色(65) 焼成は良好, 断面灰色。石英粒をわずかに含む。釉は薄い(66) 	
			65	高台径 (6.6)				
66			(6.8)					
皿		62	(16.2)	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は, 斜上方向にのび, 端部を丸くおさめる。 底部は, やや丸味をおびる(62) 底部は, ケズリ出し, 口縁部は斜上方向にのびる(67) 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面, ロクロナデ後ヘラミガキ底部内面に浅い沈線二条(62) 口縁部, ロクロナデ。 底部は, 円板形にケズリ出し, 中央が凹む(67) 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成は良好。断面暗灰色, 胎土に石英(2mm)を含む。淡緑色に発色(62) 焼成良好, 断面青灰色, 胎土に石英粒黒褐色粒を含む。暗緑色に発色(67) 		
		67	高台径 (6.5)					
灰釉陶器		碗	68	高台径 (7.8)	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は斜上方向に内湾ぎみにのびる。 高台は, 丸味のある高い輪高台(68・71) 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 内面ヘラミガキ。 貼り付け高台。 重ね焼き痕が明瞭(69) つけかけによる釉の痕が明瞭(71) 底部以外淡青緑色の釉(69) 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好。 胎土, 石英を含む(68) (71) 黒褐色粒を含む(69) 断面淡灰色。 色調, 淡青黄色(71) 淡青緑色(68) 71は内面に赤色顔料が付着し, 底外面に「丹」墨書あり。 	
	69		高台径 (7.0)					
	71		14.3	4.8				

器種	器形	番号	法量		形態の特徴	成形技法の特徴	備考
			口径 (cm)	高さ (cm)			
	皿	70	高台径 (9.0)		<ul style="list-style-type: none"> 内面に段を持ち、口縁部は斜上方向にのびる。 断面台形の高い輪高台。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面、ロクロナデ。 貼りつけ高台。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良好。 胎土、石英粒、黒褐色粒を含む。 断面淡灰色。 内面淡青緑色。 外面淡黄灰色。 色調、
	壺	72	底部径 (11.6)		<ul style="list-style-type: none"> 胴部は、内湾ぎみにのび、底部がやや盛り上がり中央で凹む。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面、ロクロナデ。 外面ケズリ、後ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土、石英粒、黒褐色粒を含む。 断面、灰色。 外面淡黄灰色。 内面淡灰色。 内底部に淡緑色の釉が付着。 色調、
白磁	碗	73	高台径 (6.2)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は内湾ぎみに斜上方向にのびる。 高台をケズリ出す。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部最下位、ケズリ。 口縁部に「花文」を型ぬき。 高台は底部を深くケズリ込んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良好。 胎土、精良。 断面白色。 外面淡乳白色。 色調、

溝 SD 16

器種	器形	番号	法量		形態の特徴	成形技法の特徴	備考
			口径 (cm)	高さ (cm)			
土師器	皿	74	(16.8)	2.2	<ul style="list-style-type: none"> 底部と口縁部の境は不明瞭。 口縁部は、内湾ぎみに立ちあがり、端部は丸くおさめる、器壁は厚い。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面ナデ。 口縁部外面をヨコナデ。 底部外面、未調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土、石英を含む。 色調、淡灰色 淡橙褐色(76)
		75	(11.2)	2.2			
		76	(8.2)	1.9			
須恵器	瓶	77	(3.8)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部をつまみあげ、やや鋭くおさめ、わずかに凹む。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面ともロクロナデ。 口縁端部外面に粘土の折り重ねた痕がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良好。 胎土、石英、黒色粒を含む。 色調、青灰色。

SK 22

器種	器形	番号	法量		形態の特徴	成形技法の特徴	備考
			口径 (cm)	高さ (cm)			
土師器	皿	78	(16.1)		<ul style="list-style-type: none"> 底部と口縁部の境不明瞭。 口縁部を外反させ、屈曲するもの(80・82)あまり屈曲しないものがある。 端部はつまみあげ、肥厚させ、丸くおさめるもの、肥厚させないもの(81)がある。 器壁の薄いもの(79, 80, 82)と厚いもの(81)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。 底部は未調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成、良。 胎土、石英、赤褐色粒を含む。 チャートを含む(81) 色調、淡褐色(80・81) 淡橙褐色(78・79・82)
		79	(14.5)				
		80	(13.7)				
		81	(13.8)				
		82	(10.1)				

器種	器形	番号	法 口径 (cm)	量 高さ (cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考																																																															
		83	(10.6)	1.5	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は斜上方向に直線的に立ち上がる。 端部をつまみあげるもの(83)と丸くおさめるもの(84) 	<ul style="list-style-type: none"> 内面ナデ, 口縁部内外面ヨコナデ。 底部, 未調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英, 赤褐色粒を含む(84) 色調, 淡褐色。 																																																															
		84	(8.8)	1.4				瓦器	壺	85	(6.6)	2.7	<ul style="list-style-type: none"> 断面三角形の高台が付く。 口縁部は, 内湾ぎみに立ちあがり, 端部を肥厚させるもの(86)させないものがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 高台を貼りつける。 内面ナデ, 口縁部ヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, やや軟。 胎土, 黒褐色粒, 雲母を含む。 色調, 黒灰色, 暗灰色。 			86	(7.0)	2.2	須恵器	坏	87	高台径 (10.4)		<ul style="list-style-type: none"> 高台の付く坏底部のみ。 口縁部は斜上方向に直線的にのびる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面ロクロナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英, 黒褐色粒を含む。 色調, 淡青灰色。 		瓶	88 89	(5.4) 高台径 (4.8)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部をつまみあげ, 鋭くおさめ, わずかに凹む(88) 	<ul style="list-style-type: none"> 外面下半にヨコナデ(89) 内外面, ロクロナデ。 内面に水挽き痕。 頸部にしぼり痕(88) 底部に糸切り痕(89) 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好, やや軟(89) 胎土, 石英, 黒褐色粒を含む。 色調, 青灰色(88), 淡青灰色(89) 	土師器	甕	90	(18.5)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部を内側に折り曲げる(90) 口縁部を弱く「く」字形に曲げ, 端部を肥厚させる(91) 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ヨコナデ。 頸部内面にハケ目残る(91) 胴部外面オサエ後ナデ(91) 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英, 赤褐色粒を含む。 色調, 橙褐色(90), 淡褐色(91) 		91	(21.1)	須恵器	坏	92	高台径 (12.9)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部と底部の境から内側に高台を外向きに付ける(92)境に付ける(93) 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 底部ケズリ(92) 高台を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好(93), やや軟質(92) 胎土, 石英, チャート, 黒褐色粒を含む(92) 色調, 青灰色(93), 淡青灰色(92) 		93	高台径 (9.0)		瓶	94	高台径 (4.4)		<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 内面に水挽き痕。 底部に糸切り痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英を含む。 色調, 淡青灰色。 		瓶	95	43	10.7
瓦器	壺	85	(6.6)	2.7	<ul style="list-style-type: none"> 断面三角形の高台が付く。 口縁部は, 内湾ぎみに立ちあがり, 端部を肥厚させるもの(86)させないものがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 高台を貼りつける。 内面ナデ, 口縁部ヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, やや軟。 胎土, 黒褐色粒, 雲母を含む。 色調, 黒灰色, 暗灰色。 																																																															
		86	(7.0)	2.2				須恵器	坏	87	高台径 (10.4)		<ul style="list-style-type: none"> 高台の付く坏底部のみ。 口縁部は斜上方向に直線的にのびる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面ロクロナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英, 黒褐色粒を含む。 色調, 淡青灰色。 		瓶	88 89	(5.4) 高台径 (4.8)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部をつまみあげ, 鋭くおさめ, わずかに凹む(88) 	<ul style="list-style-type: none"> 外面下半にヨコナデ(89) 内外面, ロクロナデ。 内面に水挽き痕。 頸部にしぼり痕(88) 底部に糸切り痕(89) 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好, やや軟(89) 胎土, 石英, 黒褐色粒を含む。 色調, 青灰色(88), 淡青灰色(89) 	土師器	甕	90	(18.5)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部を内側に折り曲げる(90) 口縁部を弱く「く」字形に曲げ, 端部を肥厚させる(91) 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ヨコナデ。 頸部内面にハケ目残る(91) 胴部外面オサエ後ナデ(91) 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英, 赤褐色粒を含む。 色調, 橙褐色(90), 淡褐色(91) 		91	(21.1)	須恵器	坏	92	高台径 (12.9)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部と底部の境から内側に高台を外向きに付ける(92)境に付ける(93) 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 底部ケズリ(92) 高台を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好(93), やや軟質(92) 胎土, 石英, チャート, 黒褐色粒を含む(92) 色調, 青灰色(93), 淡青灰色(92) 		93	高台径 (9.0)		瓶		94	高台径 (4.4)		<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 内面に水挽き痕。 底部に糸切り痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英を含む。 色調, 淡青灰色。 		瓶	95	43	10.7	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部をつまみあげや鋭くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 胴部外下半に斜方向のナデ。 底部に糸切り痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好。 胎土, チャート(5mm)を含む。 色調, 青灰色。 									
須恵器	坏	87	高台径 (10.4)		<ul style="list-style-type: none"> 高台の付く坏底部のみ。 口縁部は斜上方向に直線的にのびる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面ロクロナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英, 黒褐色粒を含む。 色調, 淡青灰色。 																																																															
		瓶	88 89	(5.4) 高台径 (4.8)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部をつまみあげ, 鋭くおさめ, わずかに凹む(88) 	<ul style="list-style-type: none"> 外面下半にヨコナデ(89) 内外面, ロクロナデ。 内面に水挽き痕。 頸部にしぼり痕(88) 底部に糸切り痕(89) 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好, やや軟(89) 胎土, 石英, 黒褐色粒を含む。 色調, 青灰色(88), 淡青灰色(89) 																																																														
土師器	甕	90	(18.5)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部を内側に折り曲げる(90) 口縁部を弱く「く」字形に曲げ, 端部を肥厚させる(91) 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ヨコナデ。 頸部内面にハケ目残る(91) 胴部外面オサエ後ナデ(91) 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英, 赤褐色粒を含む。 色調, 橙褐色(90), 淡褐色(91) 																																																															
		91	(21.1)					須恵器	坏	92	高台径 (12.9)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部と底部の境から内側に高台を外向きに付ける(92)境に付ける(93) 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 底部ケズリ(92) 高台を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好(93), やや軟質(92) 胎土, 石英, チャート, 黒褐色粒を含む(92) 色調, 青灰色(93), 淡青灰色(92) 		93	高台径 (9.0)		瓶	94	高台径 (4.4)		<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 内面に水挽き痕。 底部に糸切り痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英を含む。 色調, 淡青灰色。 		瓶	95	43	10.7	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部をつまみあげや鋭くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 胴部外下半に斜方向のナデ。 底部に糸切り痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好。 胎土, チャート(5mm)を含む。 色調, 青灰色。 																																					
須恵器	坏	92	高台径 (12.9)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部と底部の境から内側に高台を外向きに付ける(92)境に付ける(93) 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 底部ケズリ(92) 高台を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好(93), やや軟質(92) 胎土, 石英, チャート, 黒褐色粒を含む(92) 色調, 青灰色(93), 淡青灰色(92) 																																																															
		93	高台径 (9.0)							瓶	94	高台径 (4.4)		<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 内面に水挽き痕。 底部に糸切り痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英を含む。 色調, 淡青灰色。 		瓶	95	43	10.7	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部をつまみあげや鋭くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 胴部外下半に斜方向のナデ。 底部に糸切り痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好。 胎土, チャート(5mm)を含む。 色調, 青灰色。 																																															
		瓶	94	高台径 (4.4)		<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 内面に水挽き痕。 底部に糸切り痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良。 胎土, 石英を含む。 色調, 淡青灰色。 																																																															
		瓶	95	43	10.7	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部をつまみあげや鋭くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面, ロクロナデ。 胴部外下半に斜方向のナデ。 底部に糸切り痕。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼成, 良好。 胎土, チャート(5mm)を含む。 色調, 青灰色。 																																																														

(注1) 調査補助員・整理員として下記の諸氏の参加があった。(B地区のみ)

川西康義・森 一九・相沢博己・後藤正士・信部康弘・内藤清和・平田克幸・山本和夫・横山知行・福富 仁・稲岡知江子(以上立命館大学), 藤井理絵(京都教育大学), 木戸裕美(橘女子大学), 江田恵美子・小山みのり・小川志津香・団村 香・高井七重・森規志子・大辻外茂子・伴 恵子・中村康子・小倉美奈子・田村晶子(以上京都女子大学), 長谷川陶子・寺升初代・北川ともえ・中島美代子 他

(注2) 『京都の歴史』1 1969 学芸書林

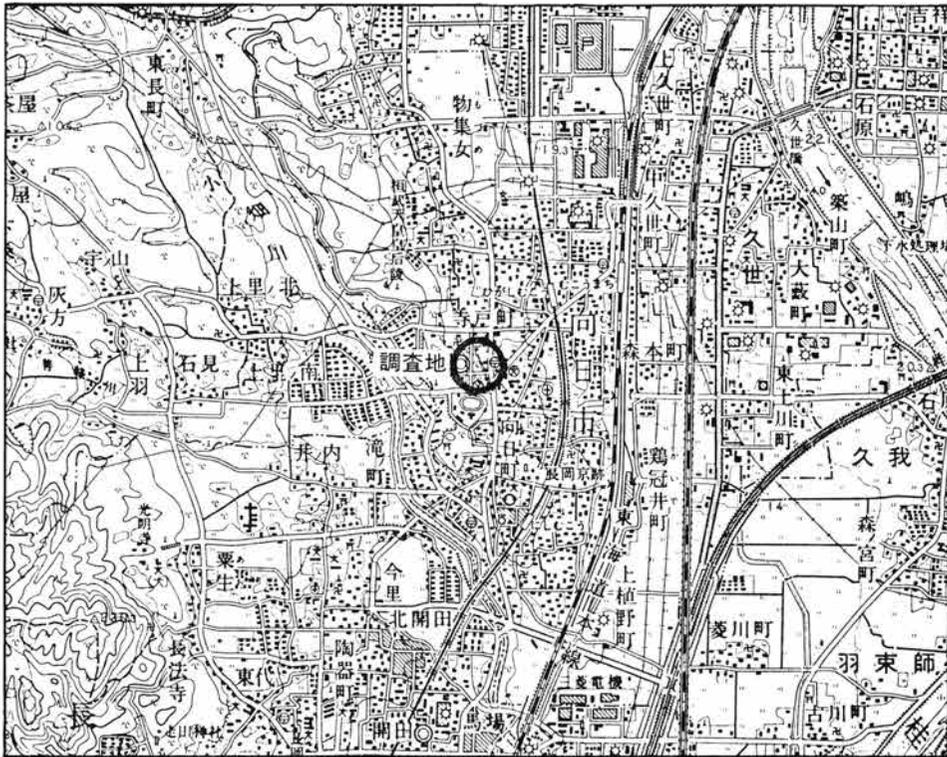
- (注3) 喜田貞吉「山城北部の条里を調査して太秦広隆寺の旧地に及ぶ」(上)・(下)『歴史地理』25—1・2) 1915
 梅原末治「広隆寺礎石及古瓦」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊 京都府) 1919
 梅原末治「太秦広隆寺」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第5冊 京都府) 1923
 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』 1936
 田中重久『聖徳太子御聖蹟の研究』 1944
 向井芳彦「広隆寺草創考」(1)~(4) (『史迹と美術』229~232) 1953
- (注4) 『常盤東ノ町古墳群』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1977
- (注5) 『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978
- (注6) (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年春発掘調査
- (注7) 松井忠春氏の御教示による。
- (注8) 江谷 寛「京都府弁天島経塚群」(『日本考古学年報』30 1977年度版) 1979
- (注9) 浪貝 毅「北野廃寺と広隆寺旧境内」(『仏教芸術』116) 1978
- (注10) 「京都大学吉田食堂建設予定敷地内発見の鋳造遺構について」京都大学埋蔵文化財センターパンフレット 1982 五十川伸矢「京都大学教養部構内 AP 22 区の梵鐘鋳造遺構について」(『梵鐘鋳造遺構の現状とその諸問題』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- (注11) 神崎 勝「兵庫県多可郡中町天田<多可寺跡>の梵鐘鋳造遺構について」(『梵鐘鋳造遺構の現状とその諸問題』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- (注12) 林 博通「梵鐘を鋳造した遺跡の調査」(『月刊文化財』) 1978. 5
 林 博通「大津宮周辺の寺院関係工房跡の調査」(『月刊文化財』) 1978. 11
- (注13) 友野良一「寺平遺跡」(『埋蔵文化財緊急発掘調査報告』長野県上伊那郡飯島町) 1980
 友野良一「寺平遺跡の梵鐘鋳造跡」(『月刊文化財』) 1979. 11
- (注14) 「山田寺第3次(講堂・北面回廊)の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』10 奈良国立文化財研究所 1980
- (注15) 平良泰久・奥村清一郎・伊野近富他「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概要(1980-3)』京都府教育委員会) 1980
- (注16) 安藤信策・水谷寿克他「篠塚群昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- (注17) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4) 1978
- (注18) 横山浩一・吉本亮俊「京都市幡枝の飛鳥時代瓦陶兼業窯跡」(『日本考古学年報』 1963年度版)
- (注19) 注3 梅原末治「太秦広隆寺」 図版第15—(1)
- (注20) 同上 図版第15—2
- (注21) 木村捷三郎氏の御教示による
- (注22) 佐藤興治「檜原廃寺発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会) 1967
- (注23) 『岐阜県恵那郡坂下町金屋・星の宮両遺跡発掘調査報告書』坂下町教育委員会 1975
- (注24) 『長野正境遺跡発掘調査報告書』滋賀県秦荘町教育委員会 1979
- (注25) 坪井良平「梵鐘鋳型の出土例」(『史迹と美術』474)
- (注26) 注12と同じ
- (注27) 高橋美久二「山城国葛野・乙訓両郡の古瓦の様相」(『史想』15) 1970
 また梵鐘鋳造遺構・遺物について、坪井良平『日本の梵鐘』角川書店 1970 によるところが大きい。

3. 長岡宮跡第119次発掘調査概要 (7 A N 16 C 地区)

1. はじめに

本報告は、京都府向日市寺戸南垣内において、乙訓郷土資料館（仮称）建設に伴う発掘調査として、昭和57年3月17日から5月13日まで実施した長岡宮跡第119次の調査に関するものである。この調査は、京都府教育委員会の依頼により、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施し、主任調査員 長谷川 達、調査員 竹井治雄が現地調査を担当した。現地の調査にあたっては、長岡宮跡発掘調査研究所、向日市教育委員会等の協力を得、学生諸氏、^(注1)作業員の方々の参加協力により無事終了することができた。

7 A N 16 C の調査地は、宅地化が著しい長岡宮内において竹林として利用されており、遺跡の遺存も濃厚であると考えられた。調査の目的は、特に長岡宮の北西官衙に関連する遺構・



第39図 調査地位置図 (1/50,000)

遺物の検出に主眼を置いた。しかし、向日丘陵南端部では長岡宮造営以前の遺跡についても、過去の調査成果が数多く存在する。大極殿院下層より検出された古墳（山畑古墳群）、朝堂院下層の奈良時代の掘立柱建物群（郡衙跡）、弥生時代の方形周溝墓などが確認されている^(注2)。また、本調査地の小字名が垣内等と呼ばれていることから、物集女街道沿いの中世集落が想定できる。このように当該地は、複合遺跡の様相を呈していると思われることから、長岡宮に関連するものだけでなく、各時代の遺構についても十分に配慮する必要がある。

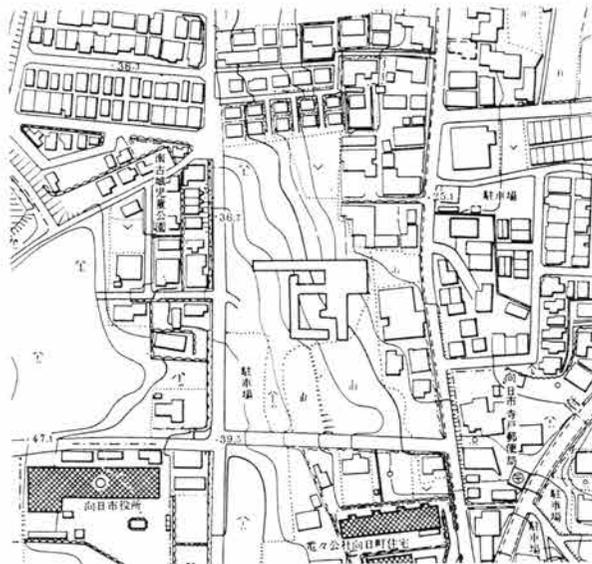
今回の調査の結果、長岡京期から近世までの遺構・遺物を検出し、多くの資料を得ることができた。とりわけ溝 SD 12 は、長岡京期に比定されるが、その性格上、造営に関連するものであれば興味深い資料である。

現地の調査終了後、ただちに長岡整理事務所において整理員諸氏の協力を得て、遺物整理・図面整理を進めた。遺物の写真撮影は、元文部技官高橋猪之介氏にお願いした。遺構及び現地での遺物の写真撮影は竹井治雄が主に行なった。なお、本概要の執筆は竹井によるものである。

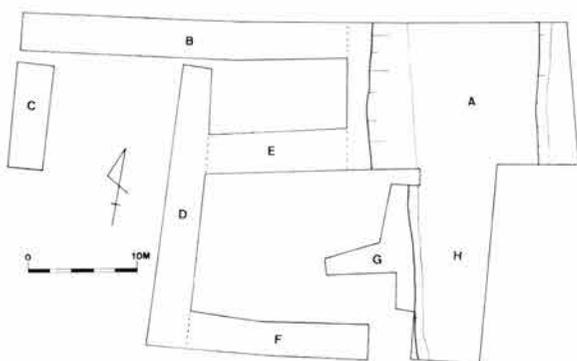
2. 調査経過

長岡宮は、向日丘陵南端部を開削し、一方に盛土を行なって造営されている。今回の調査地は、長岡宮の北西隅にあたり、西に高い緩斜地をなし、東半部では2段に分かれるが平坦を呈する。標高は29～34m、比高差は5mを測る。

トレンチの設定は、開発による掘削の規模・位置等に規制されることが多い。しかし、今回の場合、資料館建設の計画が調査開始時点（昭和57年3月現在）までに具体化されていなかったことから、敷地全体（約8,000m²）を調査対象とした。なお、敷地の西半部の自転車置場に利用されている地点は、以前向日市教育委員会の手でグリット掘りによる試掘調査が行なわれている。その成果によると、



第40図 トレンチ位置図 (1/2,500)



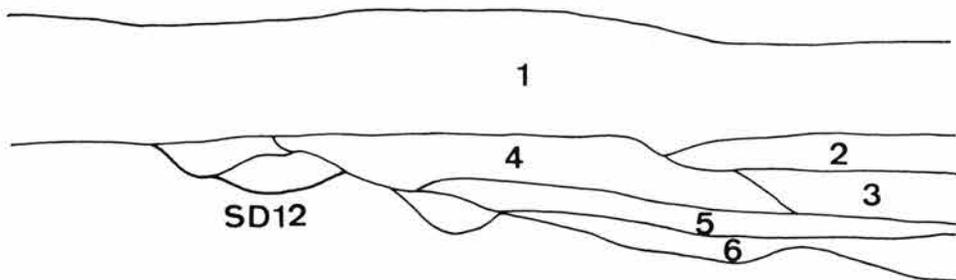
第41図 トレンチ名称図

洪積層まで削平をうけ、遺構・遺物の残存していないことが確認されている。^(注4)この成果を参考にして敷地東半部をおもに調査対象とし、最終的には第41図のA区からH区の順にトレンチを開いた。調査区の総面積は、およそ 700 m² である。

A区の設定は、現地地形が平坦地であることと、その地点より約 30 m 東方で中世の溝・建物が以前に検出されており、それらの遺構との関連を追求するためであった。調査区の規模は約270m² である。予想どおり、A区より溝 SD 12 や柱穴群等の遺構を検出し、この広がりを追求するために新たに H区を拡張した。また調査地全体の目安となる土層を観察することができた。

A区での基本的な層序は、上から (I) 表土・竹藪の客土、(II) 茶褐色粘砂質土 (III) 茶褐色粘質土、(IV) 赤褐色粘質土、(V) 黄灰色砂礫である。土層 (I) は調査区全般に広がり、厚さ 30~100 cm とばらつき、現地形の起伏の要因となっている。土層 (II) はA区とH区のみであり B~G区では見られない。堆積に「しまり」がなく、砂質を多分に含む。土層 (III) は粘性が強く、堅くしまった感じがする。この層はA区のみに見られ、SD 12 の埋土と良く似る。土層 (IV) はA区では 50 cm と厚く堆積するが、C~E区では直接(V) が露呈する。(V)・(VI) は、いずれも洪積層 (大阪層群) であることから地山と考えた。

遺構の検出面は、溝 SD 12 は (IV) の下層で柱穴群は (III) を切り込み (II) の上面で検出した。



第42図 A トレンチ北壁断面実測図 (1/40)

1. 表土 2. 茶褐色粘砂質土 (砂まじり) 3. 茶褐色粘砂質土 (粘性土)
4. 茶褐色粘質土 5. 茶褐色粘質土 (赤色粘性土) 6. 赤褐色粘質土 (地山)

3. 検出遺構

調査の結果検出した遺構は、柱穴群・溝・土塋・土壇状遺構 SX 08 などである。ここでは、溝 SD 12, 土壇状遺構 SX 08 を中心に述べ、他の遺構はこれらに関連して略記する。

(1) 溝 SD 12

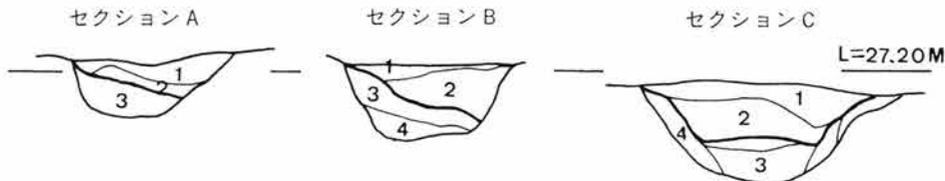
A区中央とH区において北西から南東方向に少し蛇行しながら走る南北溝である。第(Ⅲ)層下層で検出したこの溝は、H区では残りが良く、A区では上部が削平を受け、また柱穴群によってわずかに平面形を乱されている。検出された溝の長さは、約 35 m を測り、等高線に平行してトレンチ外へと続く。溝の幅は、A区北側で 0.8 m, 南へ行くに従って広くなり、H区南端では最大残存幅は 2.2 m を測る。溝の断面は、U字状あるいは逆台形状を呈し、深さ 0.3~0.7 m を測り、南側でかなり深くなる。溝中の堆積土は、茶褐色を呈する粘質土の単一層であるが、上部と下部に大別すると、上部では砂質土、下部では粘性土が主体となる。出土遺物は、上部では土師質・須恵質の土器細片が多いのに比べ、下部では、細片は少なく、須恵器坏身・土師器甕など完形品に近いものが3点出土した。

(2) 土壇状遺構 SX 08

A区・H区の両側部において検出された南北方向の直線的なテラス状の段をもつ遺構である。検出長は約 30 m, 幅は上部で 5 m, 比高差 0.5 m を測る。堆積状況をみると、地山は西から東へ低く傾斜するが、土層(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)で土壇が形成されている。これらは茶褐色を呈する粘砂質土であるが、ひじょうにやわらかく基本層序の(Ⅱ)に相似する。土層(Ⅰ)の上面はほぼ水平となり、溝Aを共出する。遺物は、溝Aから瓦質鍋、土層(Ⅰ)から土師器皿、瓦質鍋などがある。

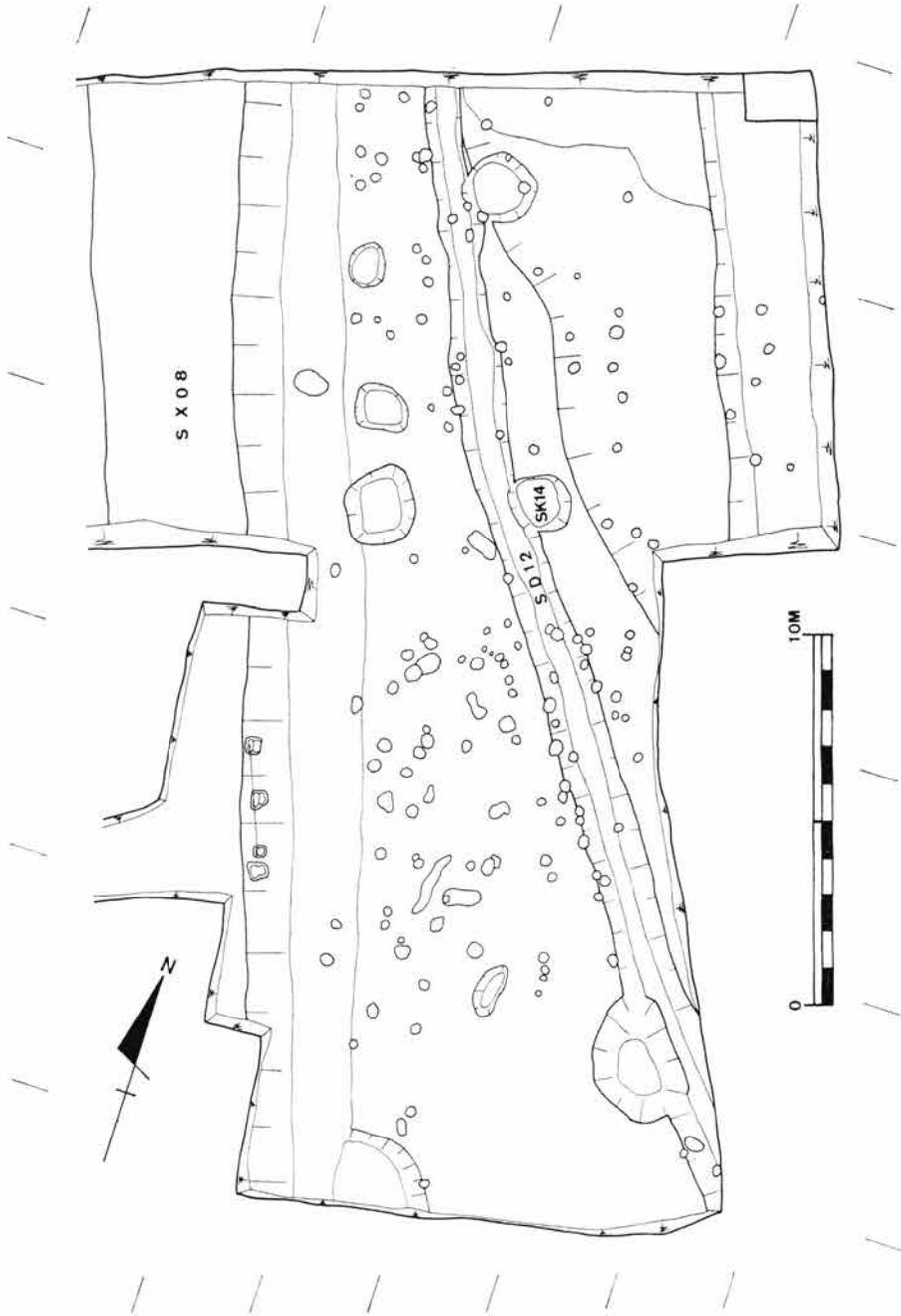
(3) 土塋 SK 14

A区南半の中央部において検出した隅丸方形の土塋である。一辺 1.2 m のほぼ正方形を呈し、深さ 40 cm を測る。埋土は灰色の泥土の単一層である。出土遺物には、土師器皿が

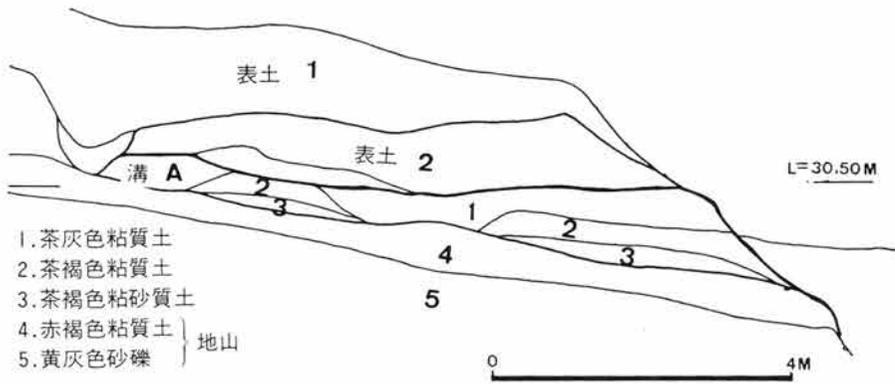


第43図 溝 SD 12 断面実測図 (1/40)

1. } 上層 茶褐色粘砂質(砂質土) 3. } 下層 茶褐色粘砂質(粘性土)
2. }
4. }



第44図 A・H トレチ遺構実測図



第45図 土壌状遺構 SX 08 断面実測図

多く、他に瓦質鍋、炭化物などが共伴する。

(4) 柱 穴 群

A区とH区で総数120に近い柱穴を検出した。これらはP 1～4を除いてすべて円形を呈し、20～40 cm 前後の規模である。円形の柱穴の柱通しが不規則で、建物としてまとまらない。柱穴の埋土は、淡灰色の粘土質である。遺物は、柱穴内から瓦器碗の細片が数片出土した。

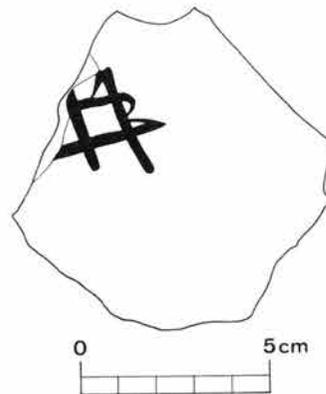
P 1～4はSX 08の東端上で南北方向に検出された柱穴である。掘形は40 cmの隅丸方形を呈し、約40 cmの深さである。埋土は赤褐色の粘質土であるが、概してやわらかい。柱間寸法は、196 cm・144 cmと不規則である。

4. 出土遺物

出土遺物には奈良時代・長岡京時代および中世・近世のものがあ、コンテナパットで約5箱分になるが、調査面積の割には少ない。そのうちSD 12出土の土器類は、完形品を含め実測可能なものが多く、一括資料として掲載できる。その他、墨書土器が一点出土したものの、中世・近世の遺構及び包含層から出土した土器類の小片からは、細かな時代的特徴を見出すことが困難であった。

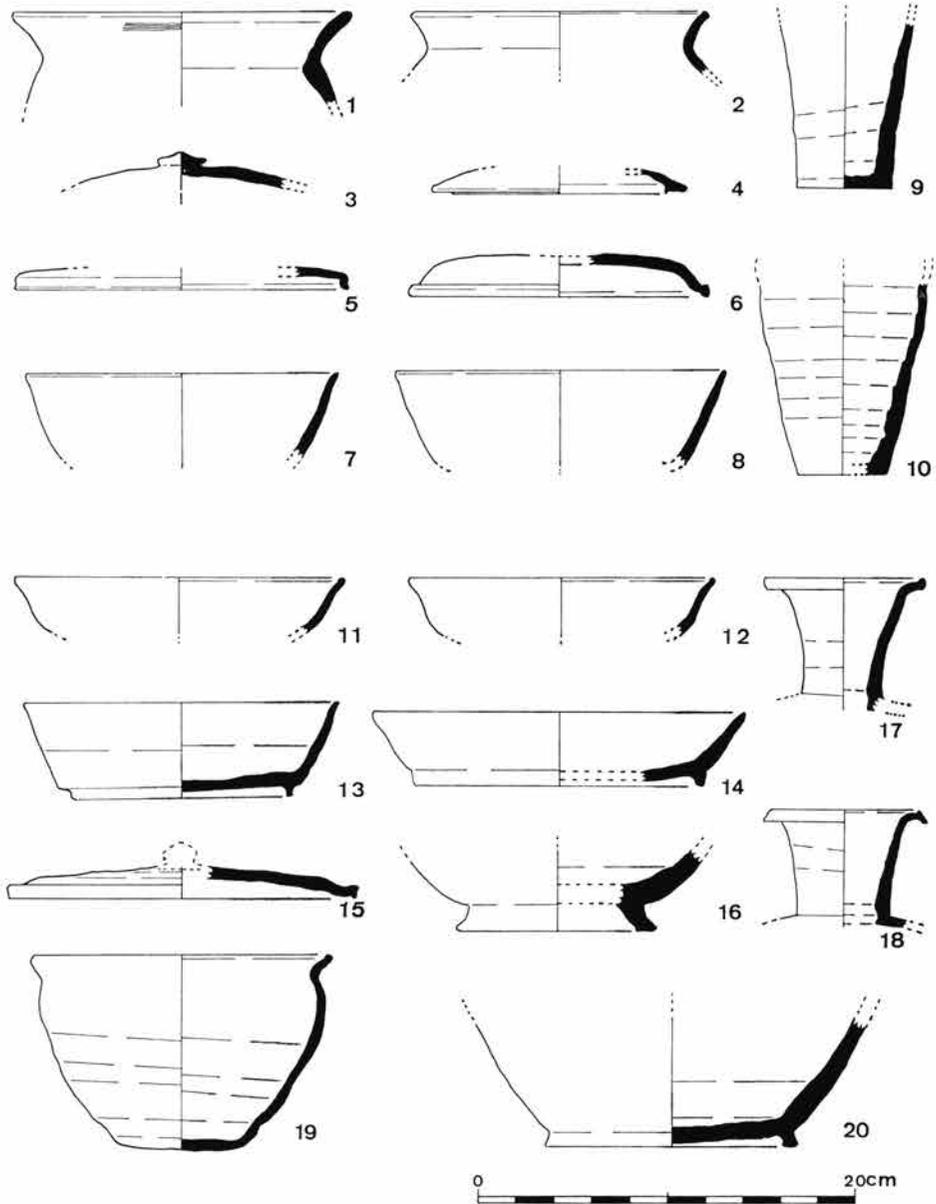
(1) 墨書土器 (第46図 図版40-17)

SX 08の溝Aより出土した土師器の皿あるいは坏である。この底部外面に描かれた墨書「井」は、筆順や形から



第46図 SX 08 溝A 出土 墨書土器実測図

楷書による漢字を表現していると考えられる。破片の復原を試みたが、底部ではこの一文字しかないようである。この墨書土器の時期は、共伴遺物に底部外面にケズリの痕跡を留める瓦質鍋があるが、それよりも古いものと思われる。



第47図 溝 SD 12 出土遺物実測図

1・2. 土師器 甕 3～6. 須恵器 坏蓋 7・8. 須恵器 坏身 9・10. 壺(1～10:上層出土) 11・12. 土師器 坏 13・14. 須恵器 坏身 15. 須恵器 坏蓋 16～18. 須恵器 壺 19. 土師器 甕 20. 須恵器 壺(11～20:下層出土)

(2) 溝 SD 12 出土遺物

再び、SD 12 内の堆積土壌と土器の様相を述べておきたい。溝内の茶褐色を呈する粘質土は、地山及び(Ⅲ)層との混合土壌であるが、(Ⅲ)がその大半を占める。このため観察・分層作業は困難をきわめたが、調査時において上部と下部とに大別した。これらに包含されている小片・完形品の土器類は、原位置を失い、さらに上部と下部とのものに時期差が認められないことから、SD 12 は一度に埋没したものと考えられる。また、人為的な埋土の可能性もあると思われる。

① 上層出土の土器類 (第47図1~10)

土師器甕(1・2)は胴部を欠損、口縁部は摩耗が著しく調整の不明な点が多い。甕(1)は、やや鋭角的な「く」の字形の頸部をもち、口縁部は丸くおさめる。口縁部内面に横方向の刷毛目が見られる。甕(2)は、なだらかな「く」の字形に外傾する口縁部をもち、端部は平坦面を有する。色調は共に赤褐色を呈し、やや軟質の焼成である。

須恵器坏蓋(3~6)は、いずれも天井部につまみを持つものと思われる。色調は須恵器特有の青灰色を呈する。蓋(4)は口縁部内面に返りをもつ。口径は13.6cm、器高は1.3cmを測る。7世紀後半に位置づけられる。蓋(5)は口径18.3cm、口縁部は垂直に下り、端部で外反して丸くおさめる。蓋(6)の口縁部はやや外反し、端部は大きく丸めておさめる。

須恵器坏身(7・8)は共に淡灰白色を呈し、やや焼成が甘い。(7)は口縁部が外反するのに対し、(8)はまっすぐ上方へおさまる。口径16~17cm、器高4.5~4.9cmを測る。

須恵器壺(9・10)は、底部静止糸切り痕をとどめる平底で、内面にはしぼり痕を明瞭に残す。(9)は特にほぼ垂直に立ちあがり、体部はゆるやかにふくらむ。

以上の土器類は、現地調査において上部(上層)として採り上げた遺物であるが、(4・5)を除いて同時期に属するものと思われる。

② 下層出土の土器類 (第47図11~20)

土師器坏(11・12)は底部から斜め上方に外反しながら口縁部に至り、端部では丸くおさめる。口径は17.8cm、器高は3.8cmを測る。共に磨滅が著しいため調整不明な点が多い。色調はいずれも淡赤褐色を呈し、胎土には雲母・クサリ礫が見られる。

須恵器坏身(13)は、細い逆台形状の高台を持つ。(15)は本来天井部につまみを持つものと思われる。

壺(17・18)は肩部からほぼ垂直に立ちあがる頸をもち、口縁部では大きく外傾し、端部を丸くおさめるもの(17)、端部が下方に向くもの(18)とがある。肩部は大きくはり、球

形の体部，底部では高台を持つ壺と思われる。

甕(19)は短く外反する口縁部とややはった肩部をもつ。口縁端部は肥厚する。体部には素地の輪づみの痕跡が顕著に見られ，指オサエによる調整が明瞭である。この甕は，いわゆる墨書人面土器によく見られるタイプの器形である。

以上の土器類は，下部(下層)の土器類であるが，上部との時期差は認められない。従ってSD12の廃絶期は，先述の埋土の様相と考えあわせると，長岡京期に推定することができると思う。

(3) SK 14 の出土遺物 (第48図1～7)

土壌内から出土した土器類は，そのほとんどが土師器皿であり，一点底部を欠いた瓦器碗がある。

土師器皿は全般に赤褐色を呈し，やわらかく焼成され，胎土には雲母・クサリ礫が含まれる。(5)を除けば底部より斜め上方にわずかに外反し，口縁端部は丸くおさめる。底部は平底である。(4)は「大皿」の系統に属するもので，口径9.8cm，器高1.8cmを測る。その他の皿は「小皿」の系譜を引き，口径7.6cm，器高1.4～2.0cmを測る。

瓦器碗(7)は，内外面とも黒灰色を呈し，内面には数条の細い暗文が施され，外面にはオサエの痕跡が残る。体部はやや内湾ぎみに斜め上方にたちあがるが，器高指数は小さい。これらのことから，14世紀後半に位置するものと思われる。

(4) 茶褐色粘砂質土層の出土遺物 (第48図8～15)

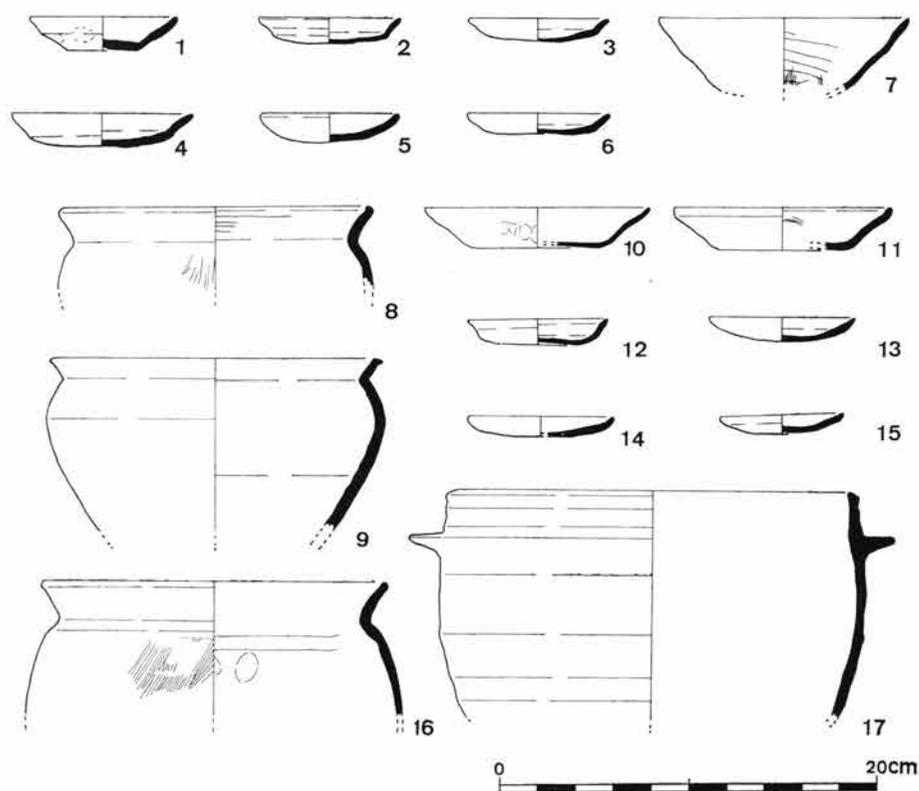
土師器甕(8)は，口縁部から肩部にゆるやかな「く」の字形を呈し，端部は肥厚する。口縁部内面には横方向の刷毛目が残る。

須恵器甕(9)は，屈曲した「く」の字形を呈し，口縁端部は平坦面をもつ。色調は内外面とも淡灰色を呈し，胎土は緻密で良好である。内外面とも丁寧な回転ナデによる調整が行なわれる。

土師器皿(10・11)は大皿の系譜を継ぐ。体部のたちあがりは斜め上方に外反し，口縁でわずかに内傾し，端部を丸くおさめる。口径10.0cm，器高2.2cmを測る。色調は白色味の強い褐色を呈する。土師器皿(12～15)は，小皿類である。口径6.8～7.6cmと個体差が見られるが，およそ15世紀代に位置づけられる。

(5) SX 08 溝 A の出土遺物 (第48図16・17)

土師器甕(16)は，「く」の字形にくびれた頸部と軽くはった肩を持ち，口縁端部は丸味を帯びる。体部外面は刷毛目，内面は指の圧痕を留める。口径18.1cmを測る。色調は内



第48図 出土遺物実測図

1~6. 土師器 皿 7. 瓦器 碗 8. 土師器 甕 9. 須恵器 鉢 10~15. 土師器 皿 16. 土師器 甕 17. 羽釜(瓦質) (1~7, SK 14 出土 8~15, 茶褐色粘砂質土層出土 16・17, SX 08 溝A出土)

外面とも橙白色で、焼成はやや甘い。

羽釜(17)は、やや内傾気味に直上にのびる口縁をもち、端部は平坦面を有する。鈎部はほとんど水平に貼り付けられている。口縁部内外とも横ナデを施す。

5. ま と め

本調査は、諸々の条件下で実施されたものであったが、上述のように多くの成果を得ることができた。中でも溝 SD 12 の検出は、長岡宮の北西官衙を考察する上で重要な資料を提出できた。『大内裏図考証』によれば、宮内の西端に位置する「茶園」に推定される本調査地は、竹林の盛土による改変が行なわれたものの、調査の結果から敷地西半部では旧地形を留めていると言える。そして、平坦な東半部では中世の柱穴群・土壇等のみで、長岡宮に直接関連する遺構は検出できなかった。SD 12 は、この両地域の傾斜変換点にあたるところで

検出された。このように長岡宮造営についての積極的な資料は得ることができなかった。しかし、緩斜地のコンターラインに沿って流れていた SD 12 が人工的に廃絶したと推測を押し進めれば、造営の過程でこの地も何らかの形で意識されたことは、充分推察できる。

(竹井 治雄)

(注1) 福富 仁・秀野恒弘・小西哲夫・小野康博・出口ひとみ・伴 圭子

(注2) 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第3集 向日市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1979

『向日市埋蔵文化財調査報告書』第5集 向日市教育委員会 1979

『向日市埋蔵文化財調査報告書』第6集 向日市教育委員会 1980

(注3) 山本弥生・木村美智代

(注4) 向日市教育委員会 山中 章氏の御教示による。

圖 版



(1) 狐谷横穴群全景 (航空写真)



(2) 調査前風景 (西から)



(1) 調査前風景 (南から)



(2) 調査前風景 (北から)



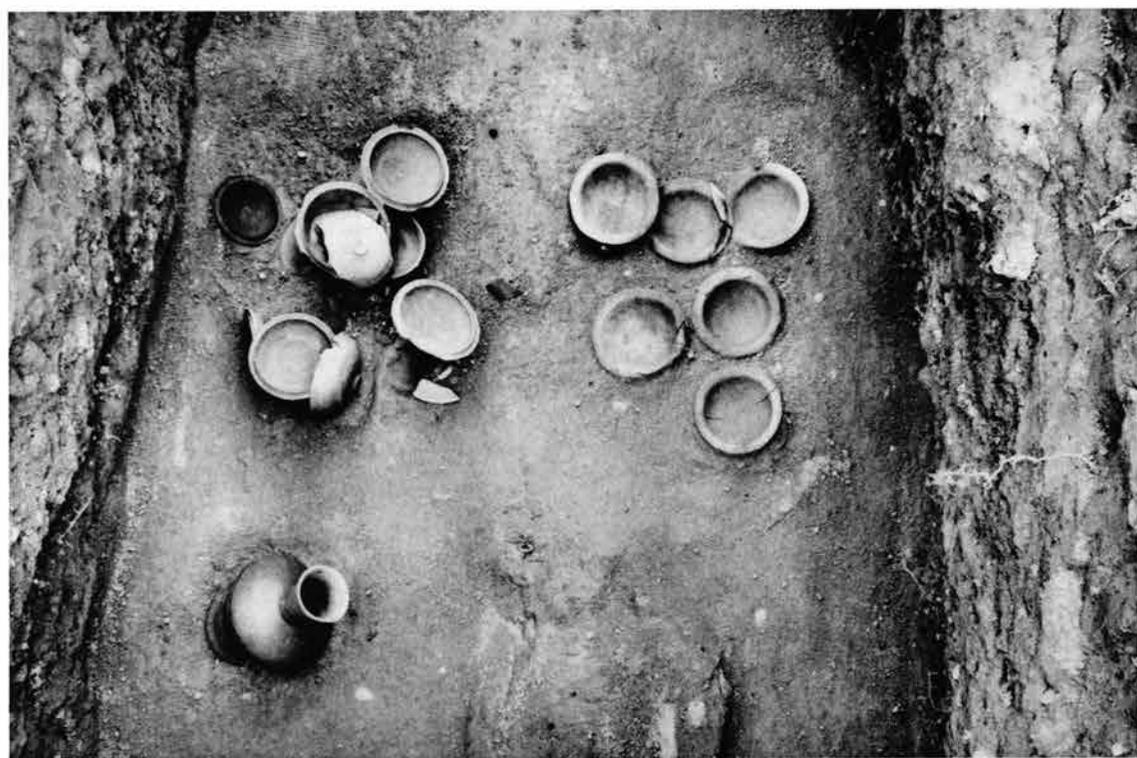
(1) 横穴群検出状況 (南から)



(2) 横穴群検出状況 (西南から)



(1) 2号横穴全景(南から)



(2) 2号横穴遺物出土状況(真上から)



(1) 3号横穴全景(南から)



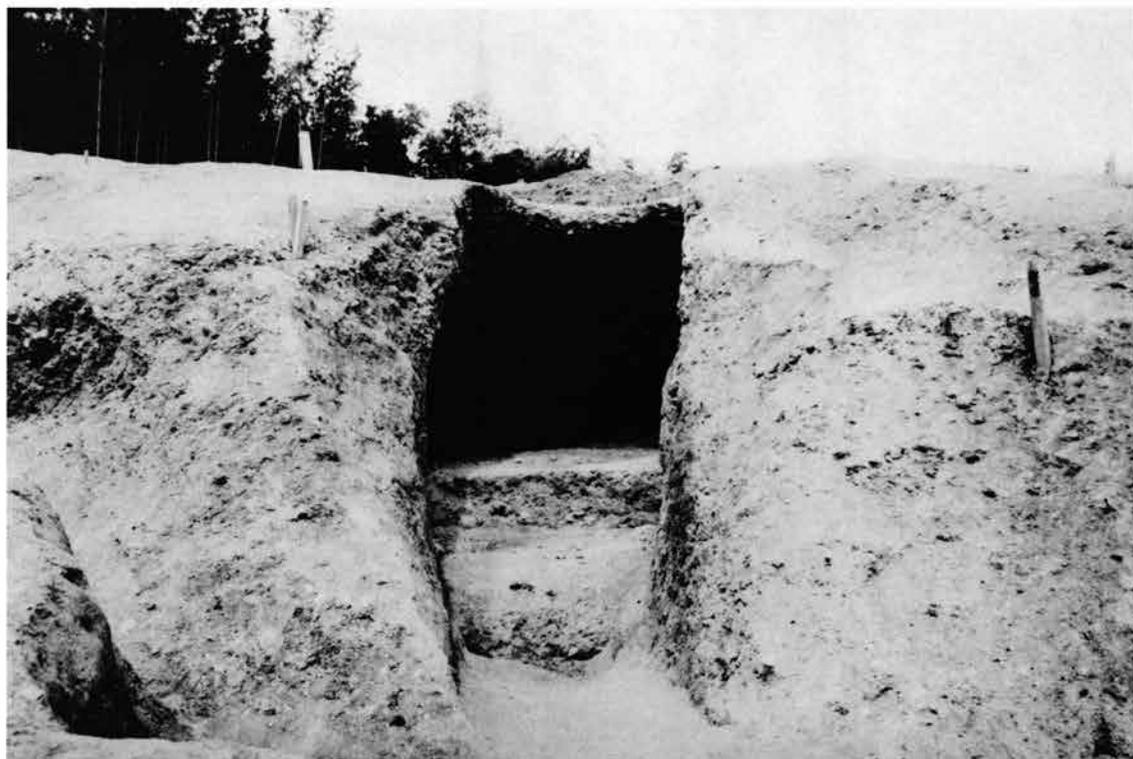
(2) 3号横穴遺物出土状況(南から)



(1) 4号横穴全景 (南から)



(2) 4号横穴遺物出土状況 (南から)



(1) 5号横穴全景(南から)



(2) 6号横穴遺物出土状況(南から)



(1) 6号横穴全景(南から)



(2) 5号横穴遺物出土状況(西から)



(1) 7号横穴全景(南から)



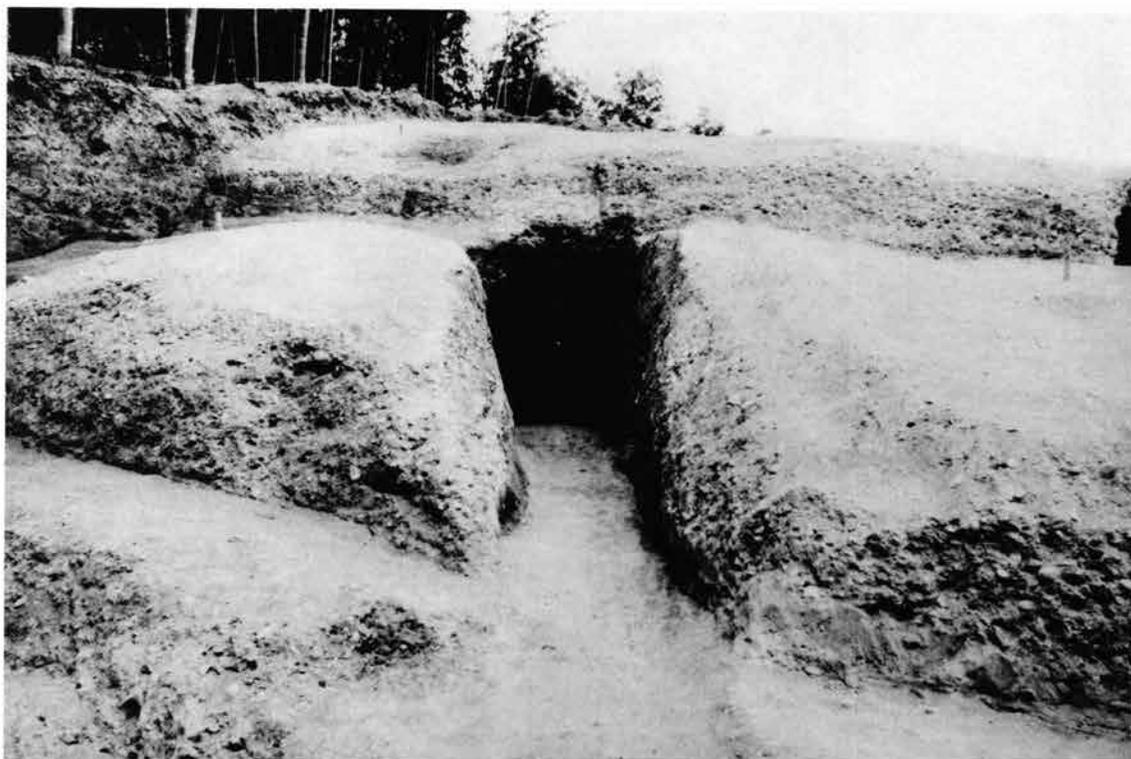
(2) 7号横穴遺物出土状況(南から)



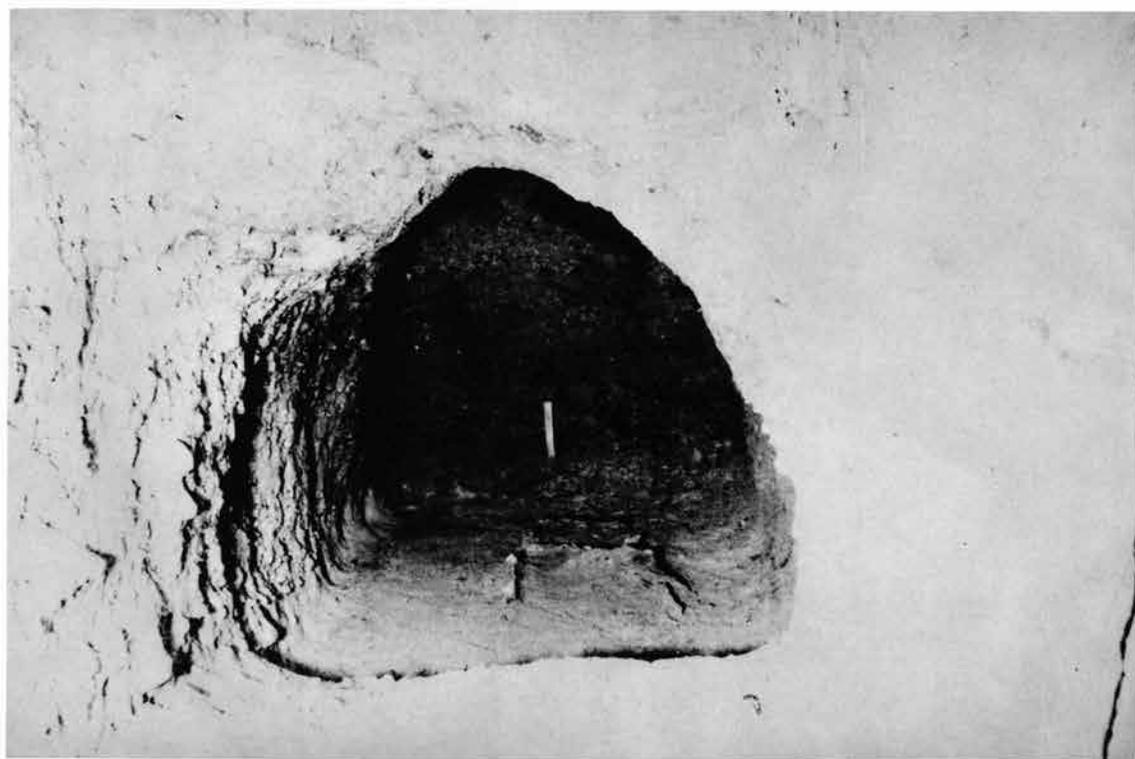
(1) 8号横穴全景(南から)



(2) 8号横穴遺物出土状況(南から)



(1) 9号横穴全景（南から）



(2) 9号横穴遺物出土状況（南から）



(1) 9号横穴玄室から外景(北から)



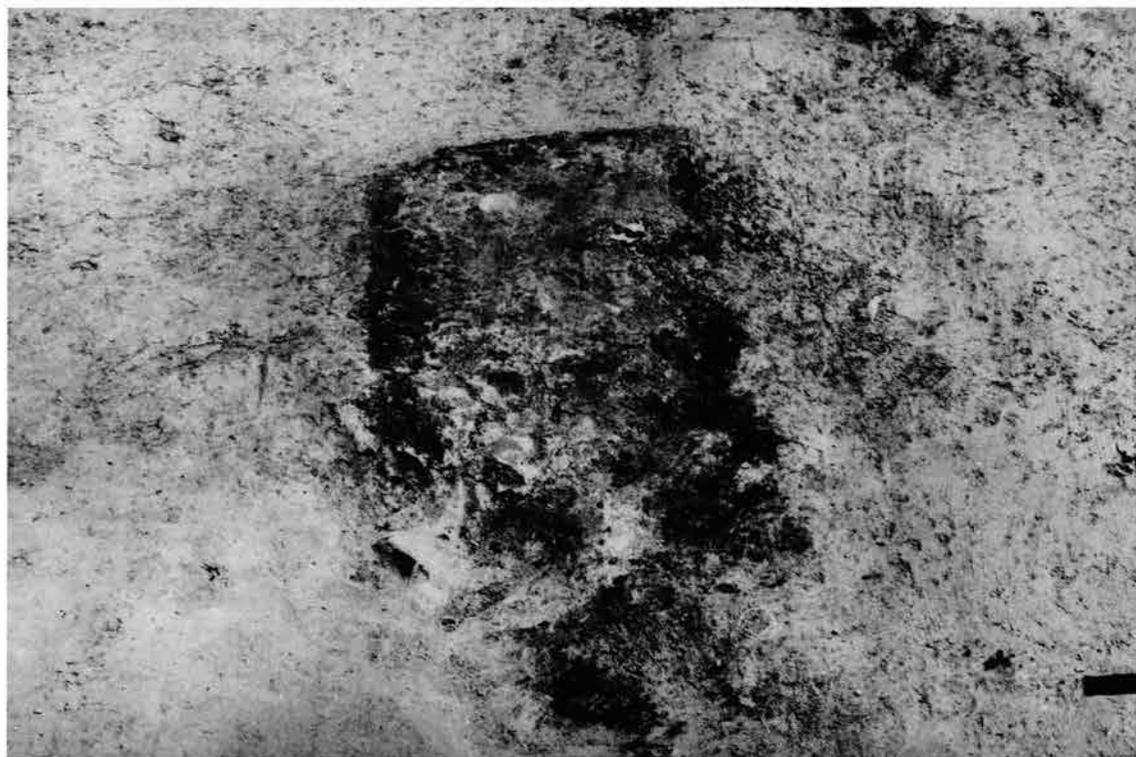
(2) 小横穴全景(南から)



(1) 狐谷横穴群全景（東から）



(2) 狐谷横穴群（南から）



(1) 炭充填土壌検出状況（西から）



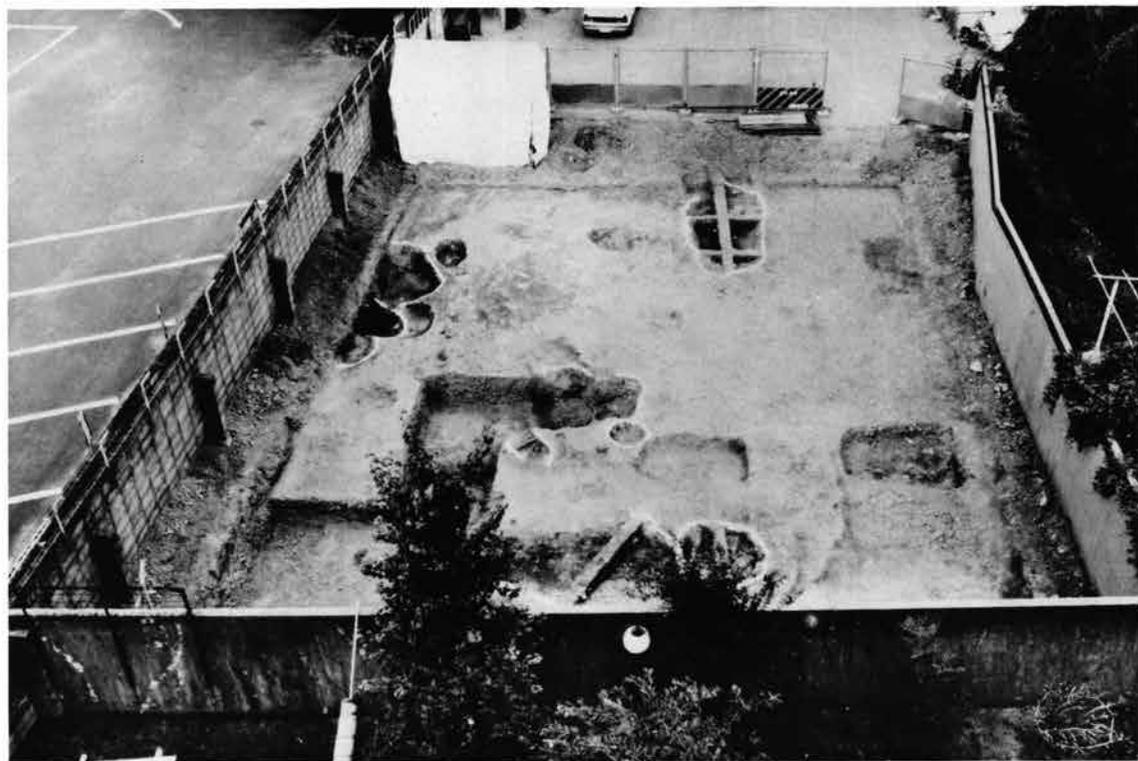
(2) 炭充填土壌完掘状況（南から）



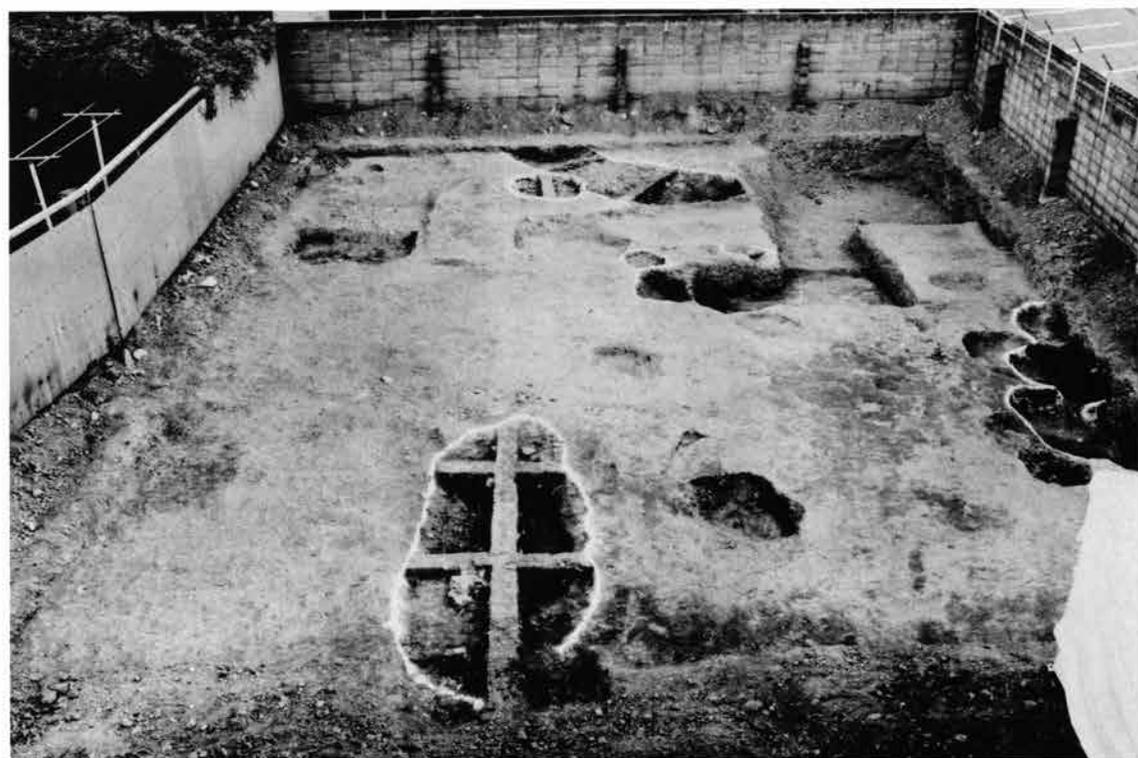
(1) 方形周溝遺構全景（北東から）



(2) 方形周溝遺構全景（西から）



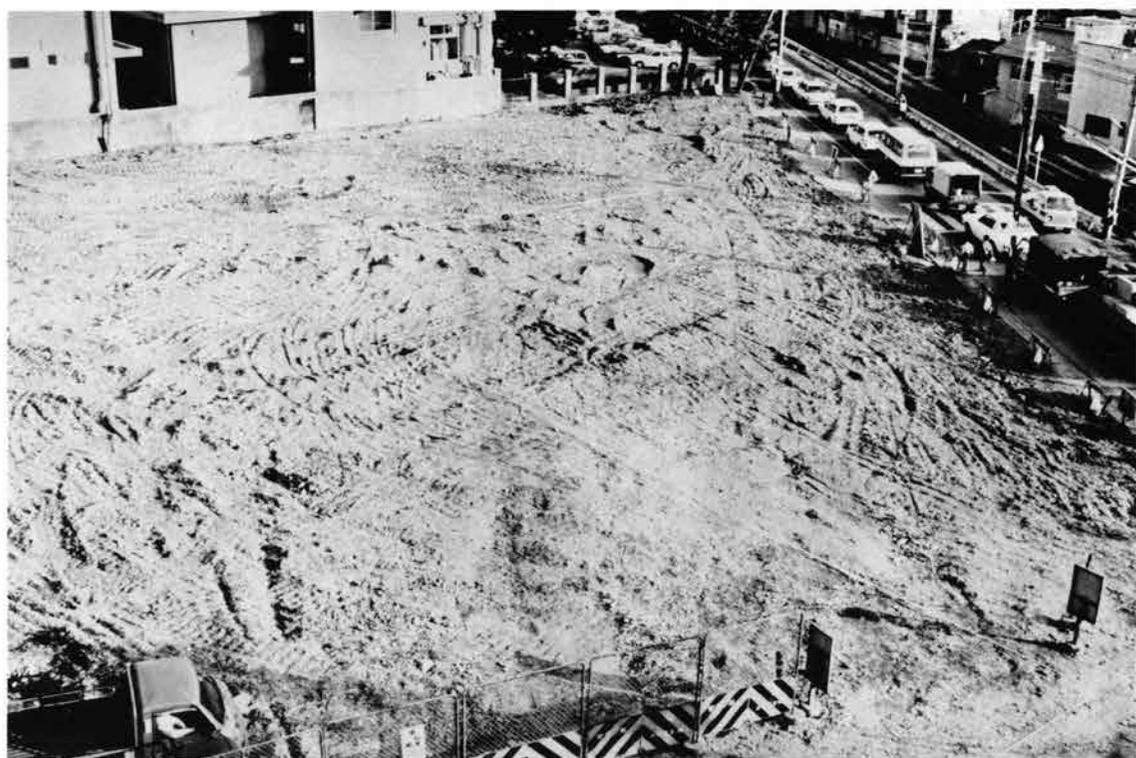
(1) A地区全景 (西から)



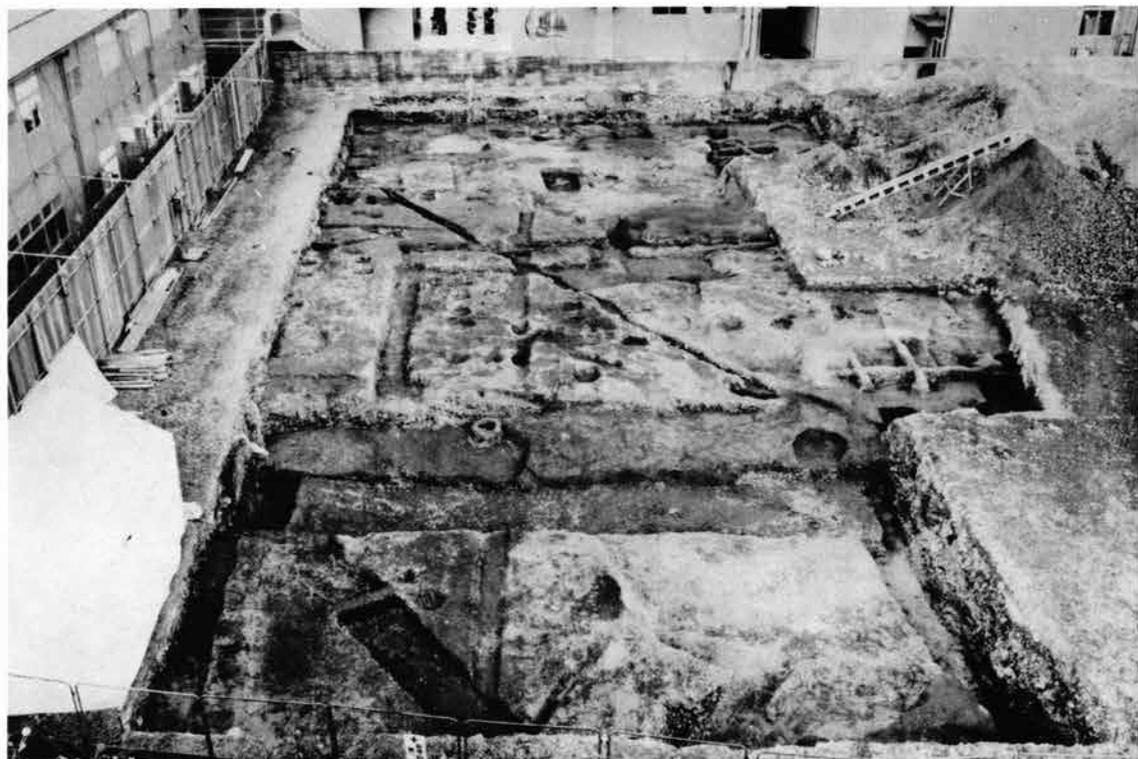
(2) A地区全景 (東から)



(1) B地区全景 調査前 (西北から)



(2) B地区全景 調査前 (西から)



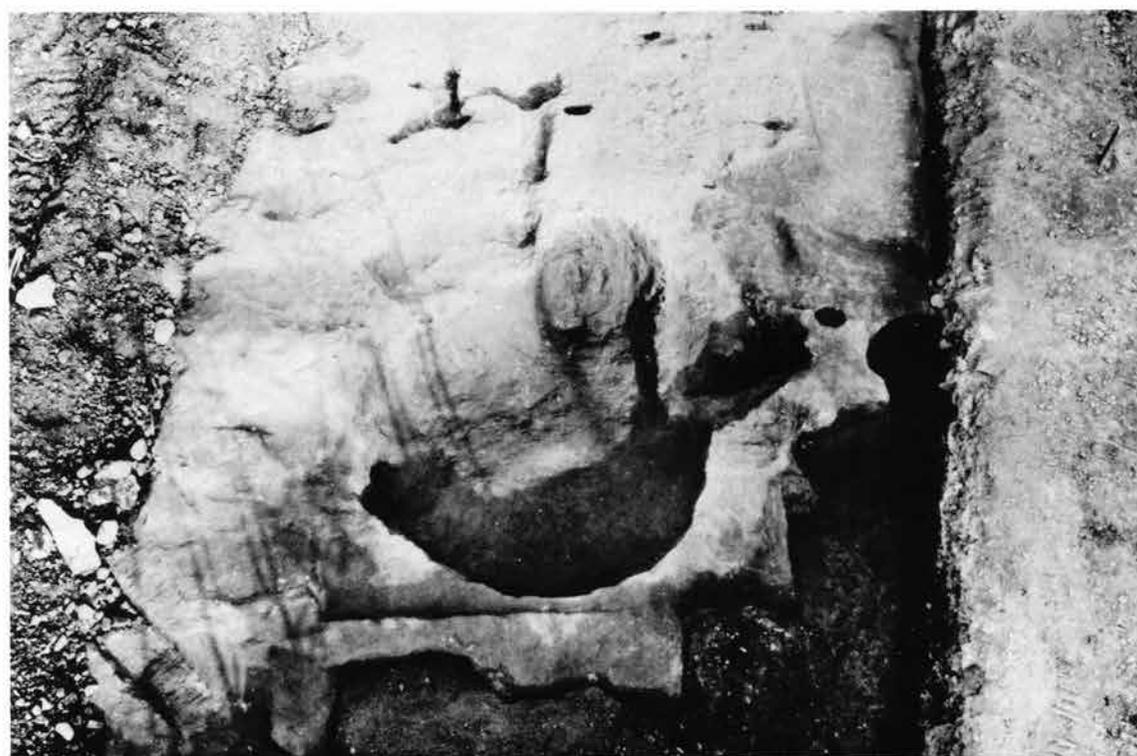
(1) B地区全景（西から）



(2) B地区全景（東から）



(1) 土器だまり SK13周辺 (西から)



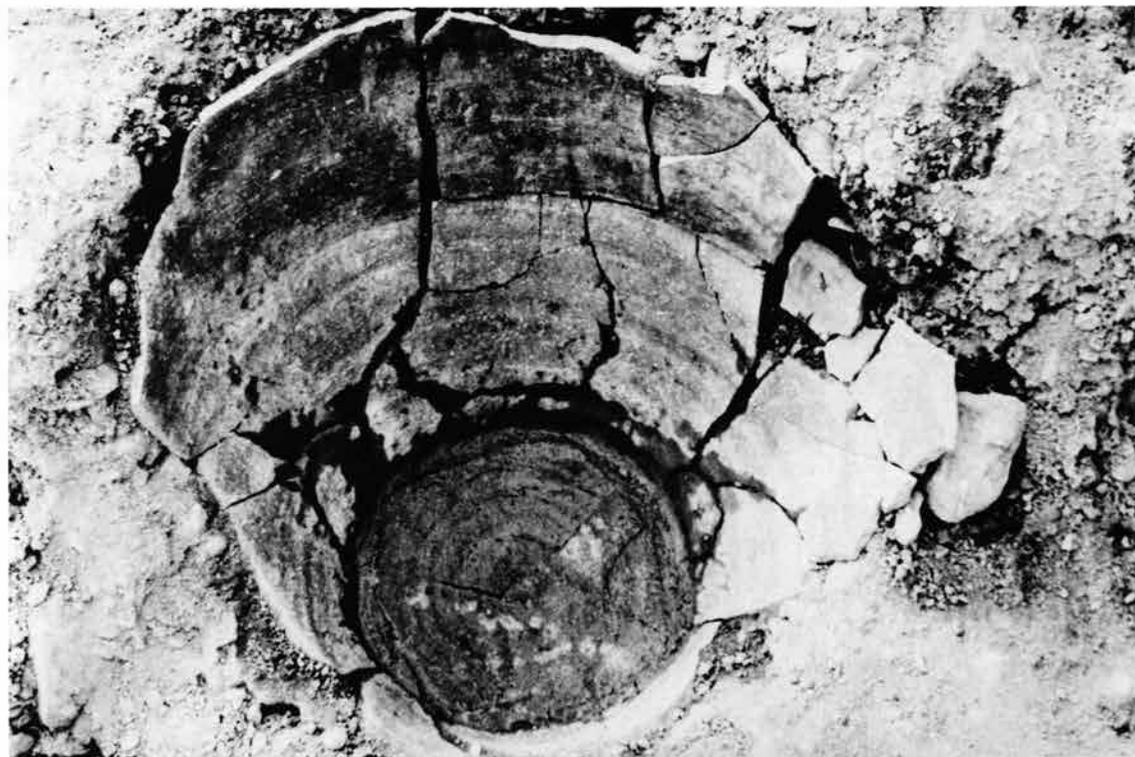
(2) 瓦だまり SK13下層完掘後 (西から)



(1) 梵鐘鑄造遺構SK22 (西から)



(2) 鑄型土台(定盤)残欠(南から)



(1) 改葬骨容器 墓No.1



(2) 改葬骨容器 墓No.2



(1) 改葬骨容器と小型壺 墓No.3



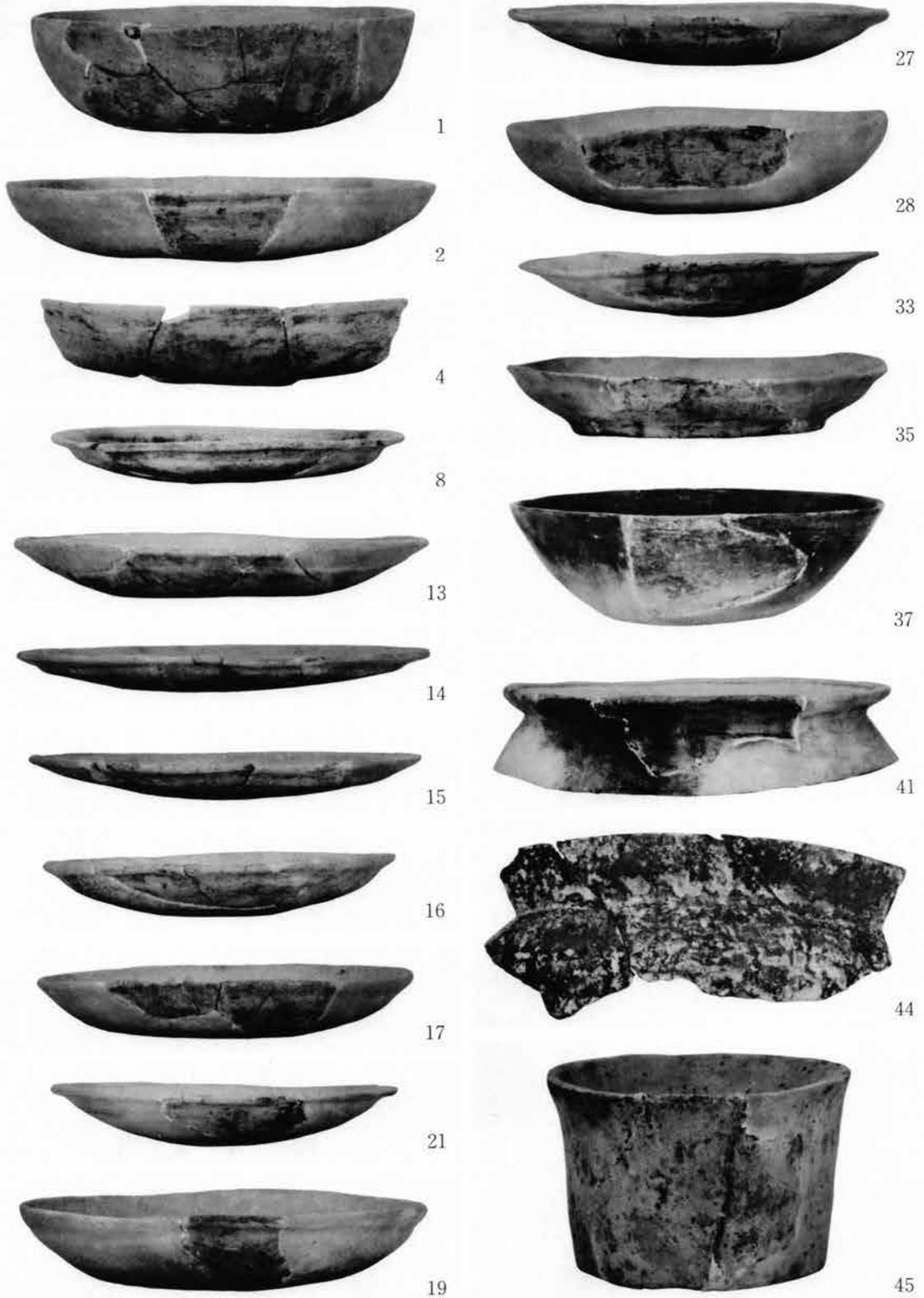
(2) 瓦だまりSK24 (北から)



(1) SK13遺物出土状況



(2) SK13下層遺物出土状況



土器だまり SK13出土遺物 1~35・41. 土師器, 37・44. 黒色土器, 45. 製塩土器



50



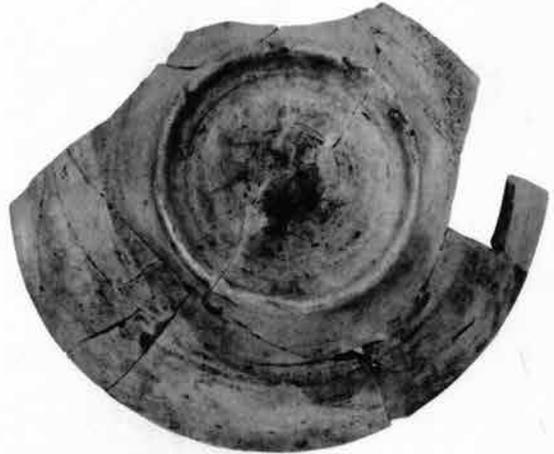
52



71



53



62



86



85



74



81



91

出土遺物 50~71.(墨書土器) SK13, 81・85・86, SK22上層, 74, SD16, 91, SK22下層



88



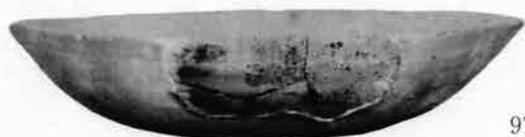
94



89



95



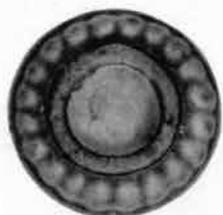
97



98

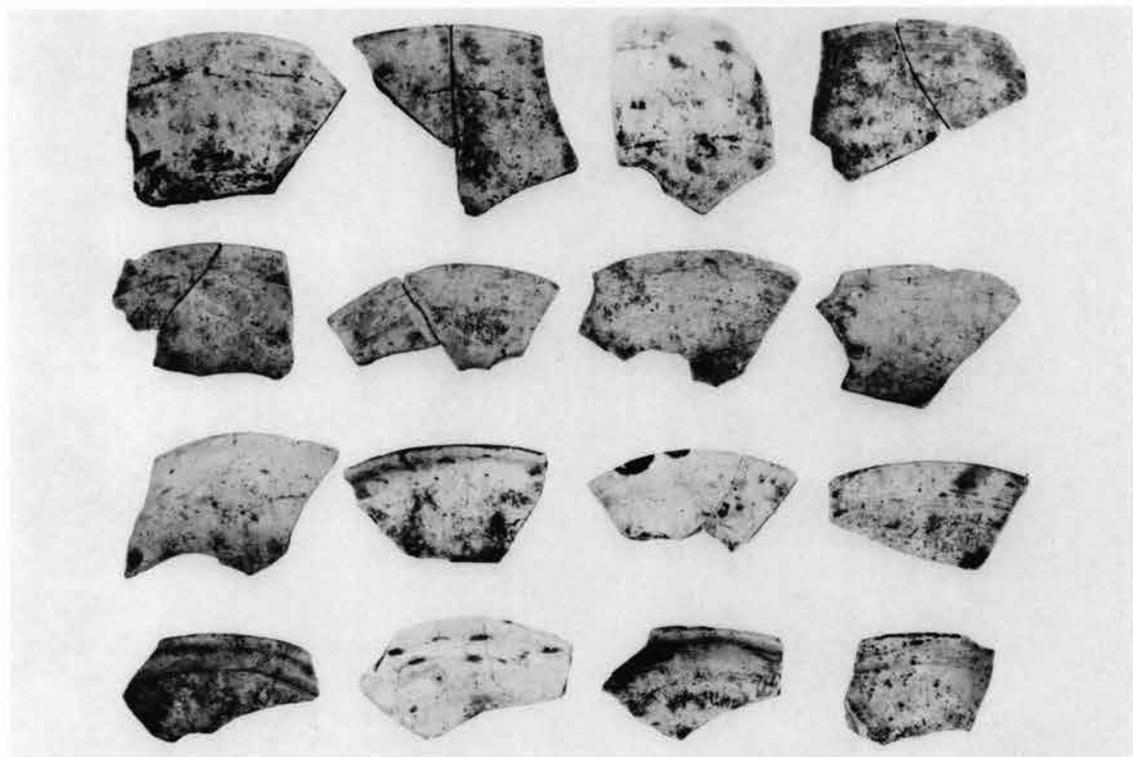


111

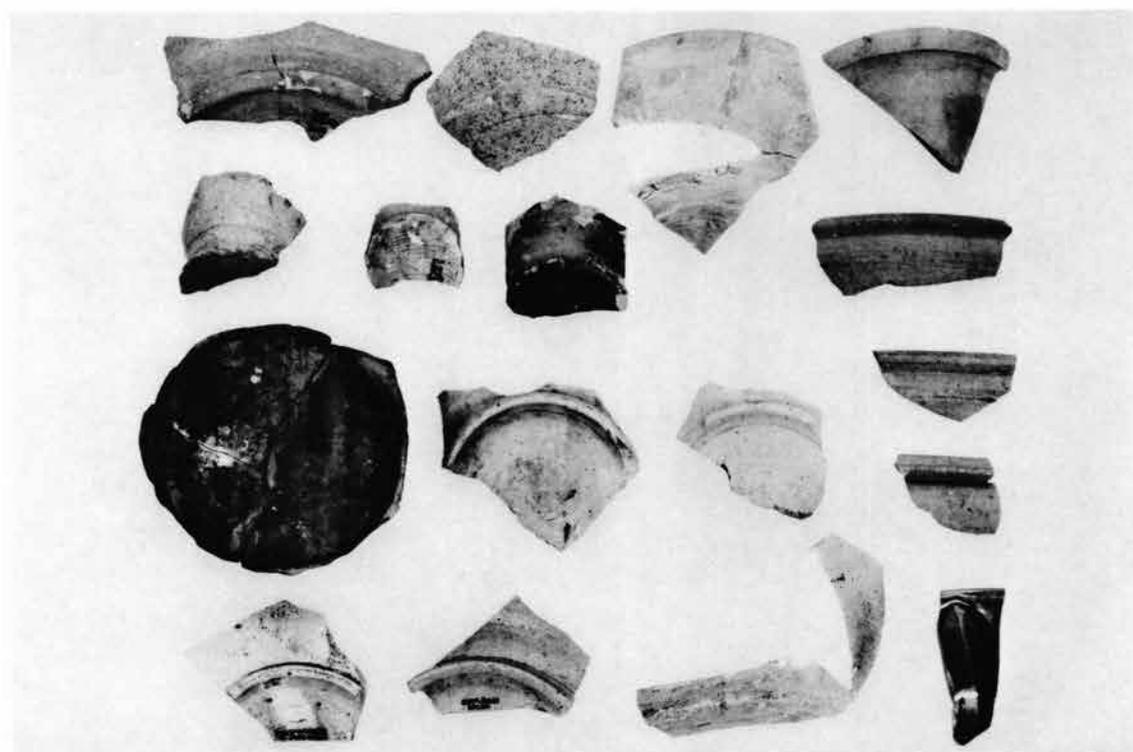


122

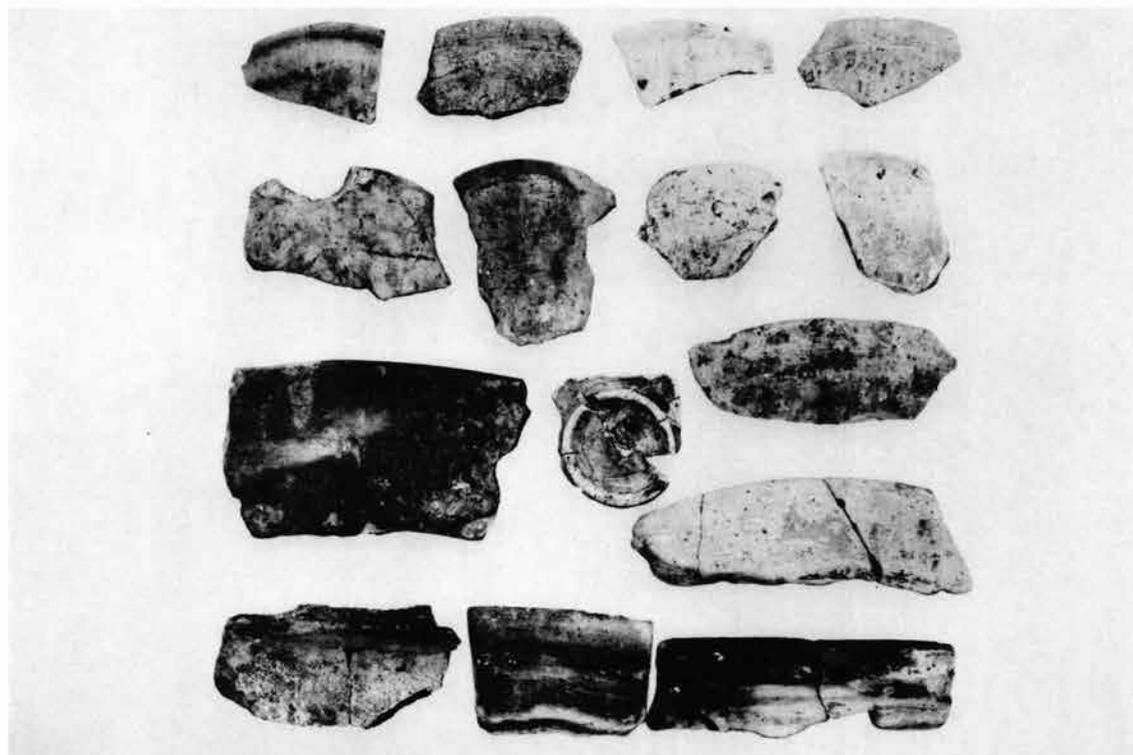
出土遺物 88・89. SK22上層, 94・95. SK22, 97・98・111. 包含層, 122. 小型壺
左下 包含層出土の合子状の磁器



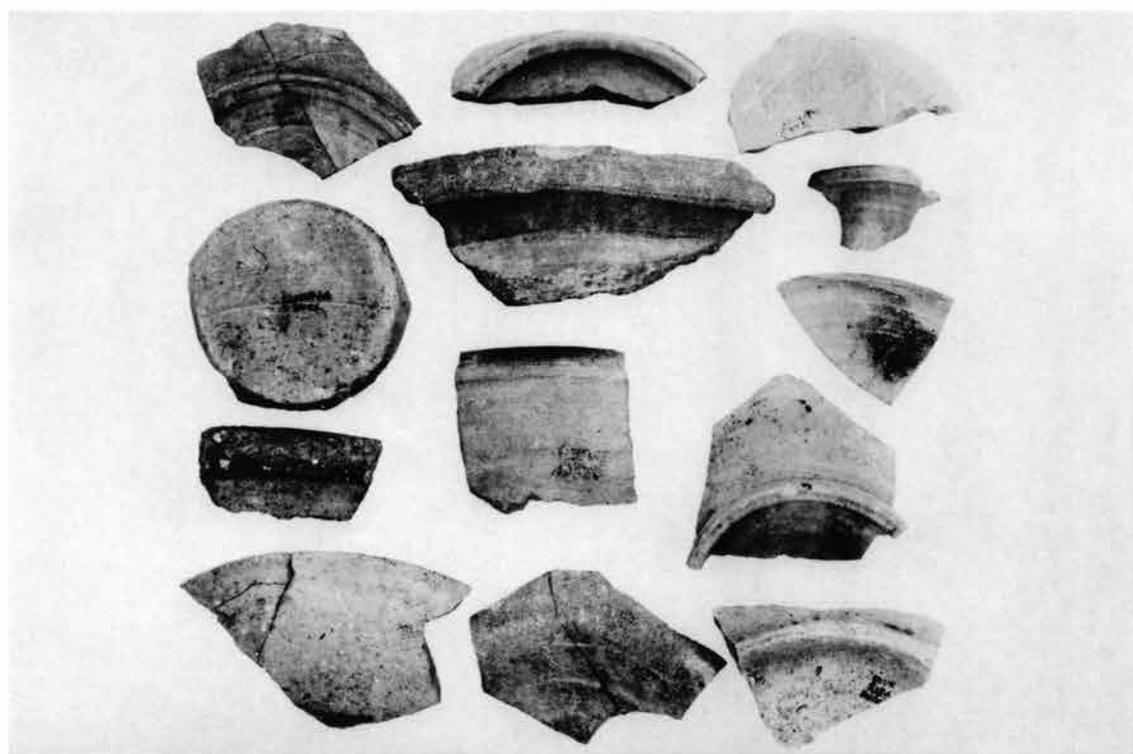
(1) SK13出土遺物 (土師器)



(2) SK13出土遺物 (須恵器, 灰釉他)



(1) 包含層・その他の出土遺物 (土師器, 瓦質陶器)



(2) 包含層・その他の出土遺物 (須恵器, 灰釉他)



1



2



3



4



5



6



7



8



9





10



11



27



12



13





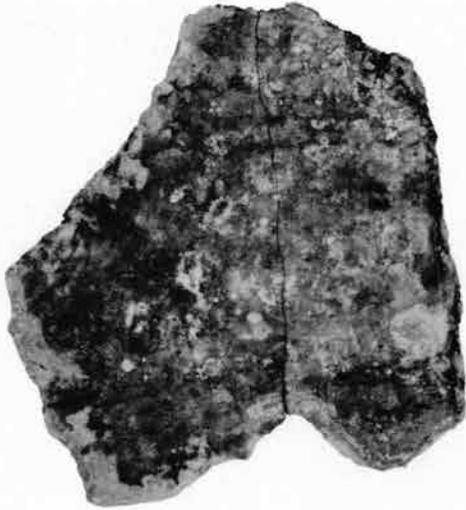
1



3



4



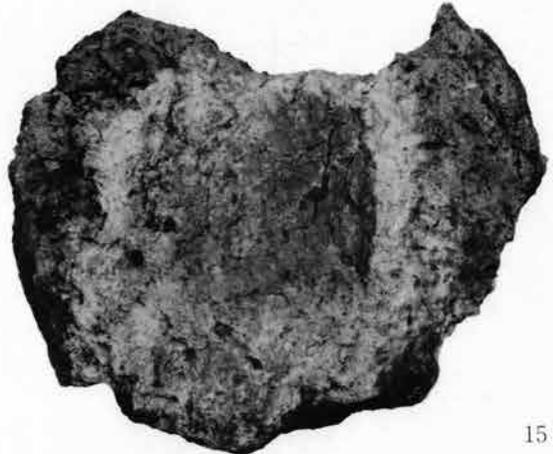
2



14

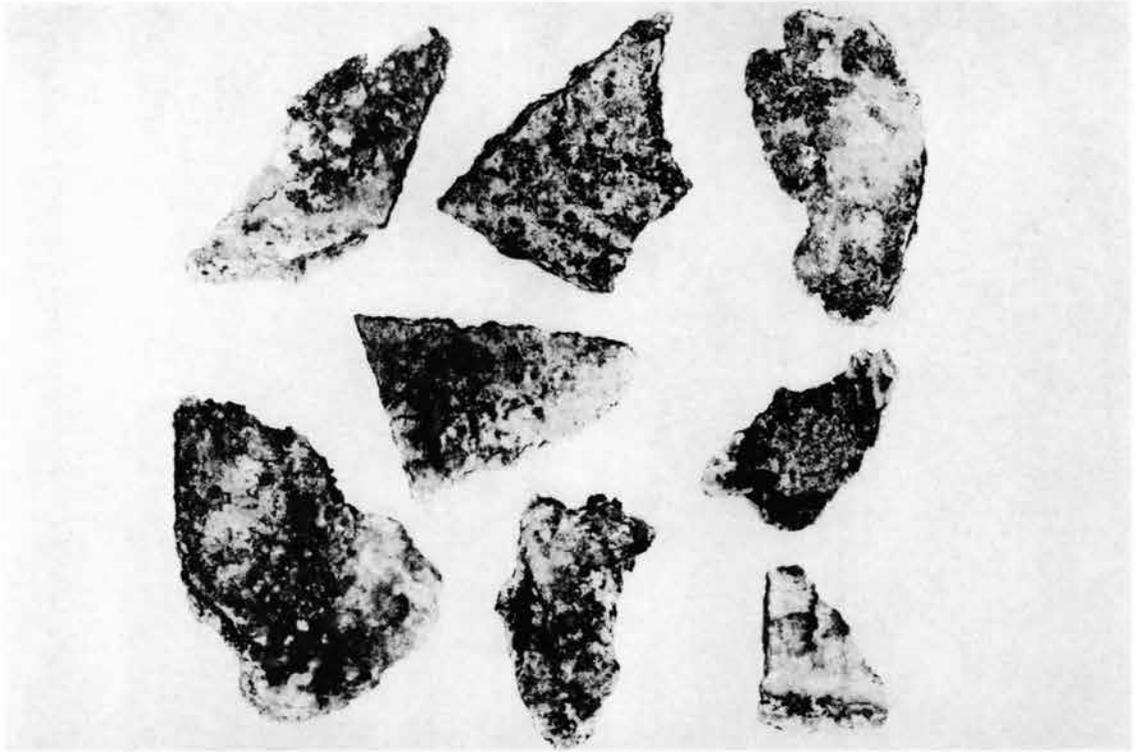


14



15

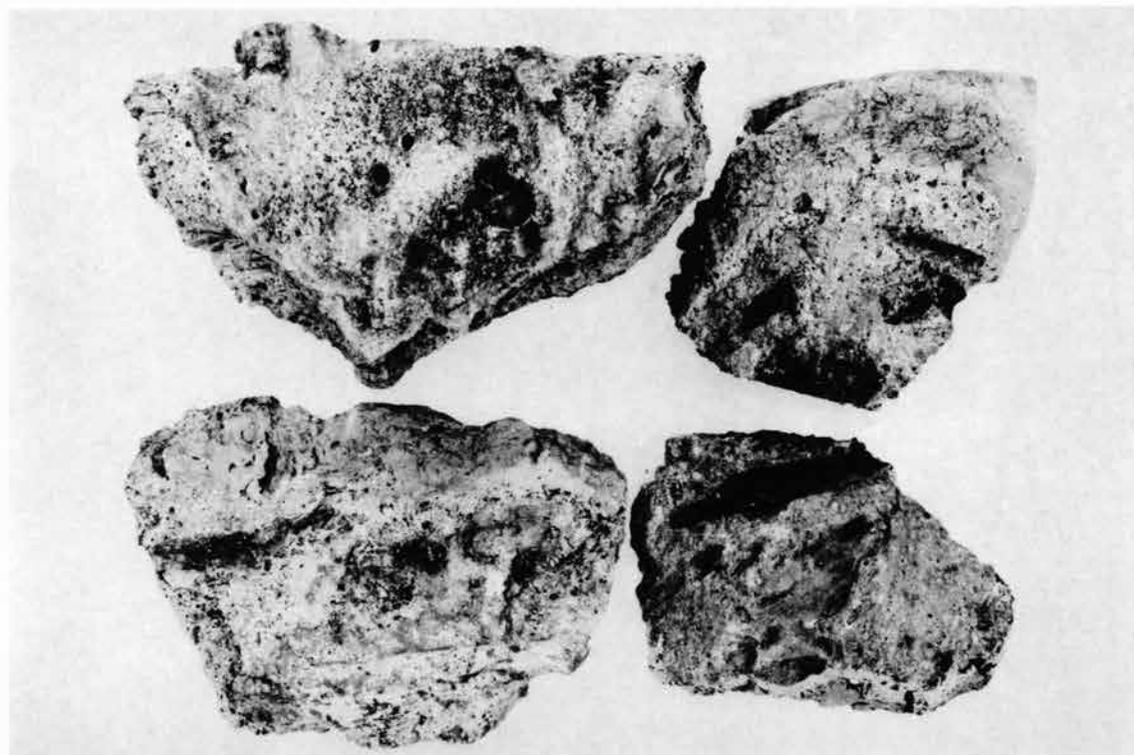
SK 22出土遺物 1~4. 鑄型(外型) 14・15. フイゴ羽口状土製品



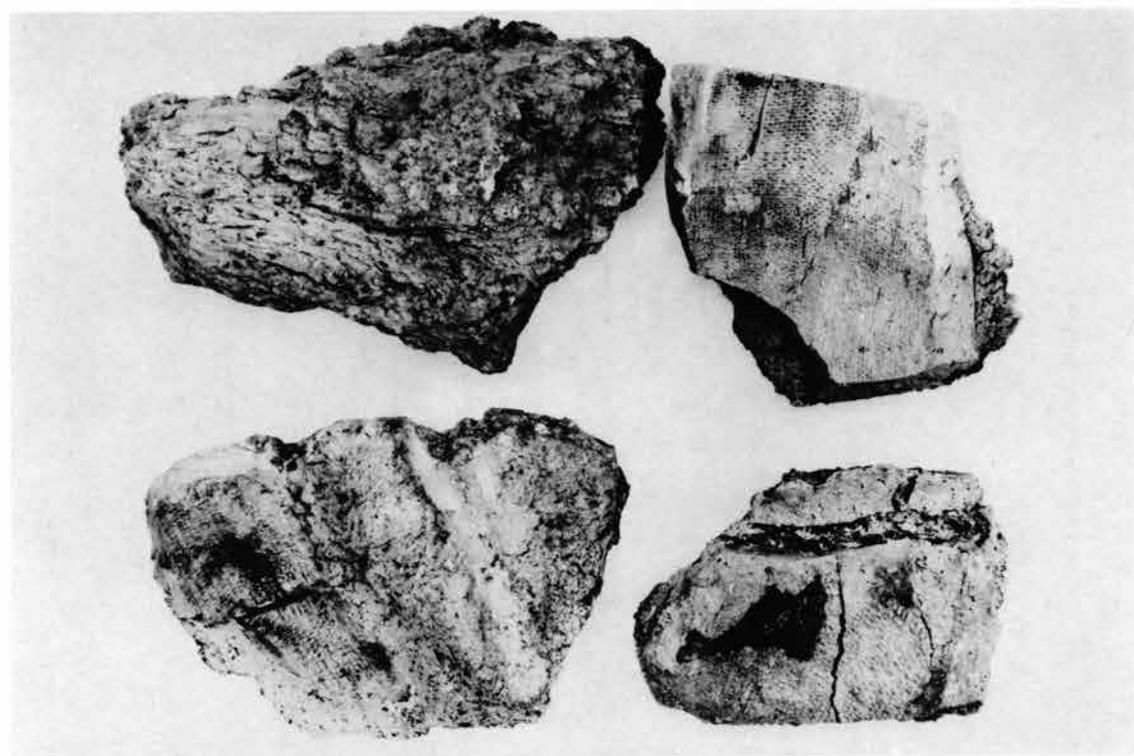
(1) SK22出土鑄型片



(2) SK22出土銅を含む破片（左上は銅片）



(1) SK22出土溶融塊(表面)



(2) SK22出土溶融塊(裏面)



(1) 調査前全景 (南東から)



(2) 調査区全景 (東から)



(2) B調査区 SX08・溝A (北から)



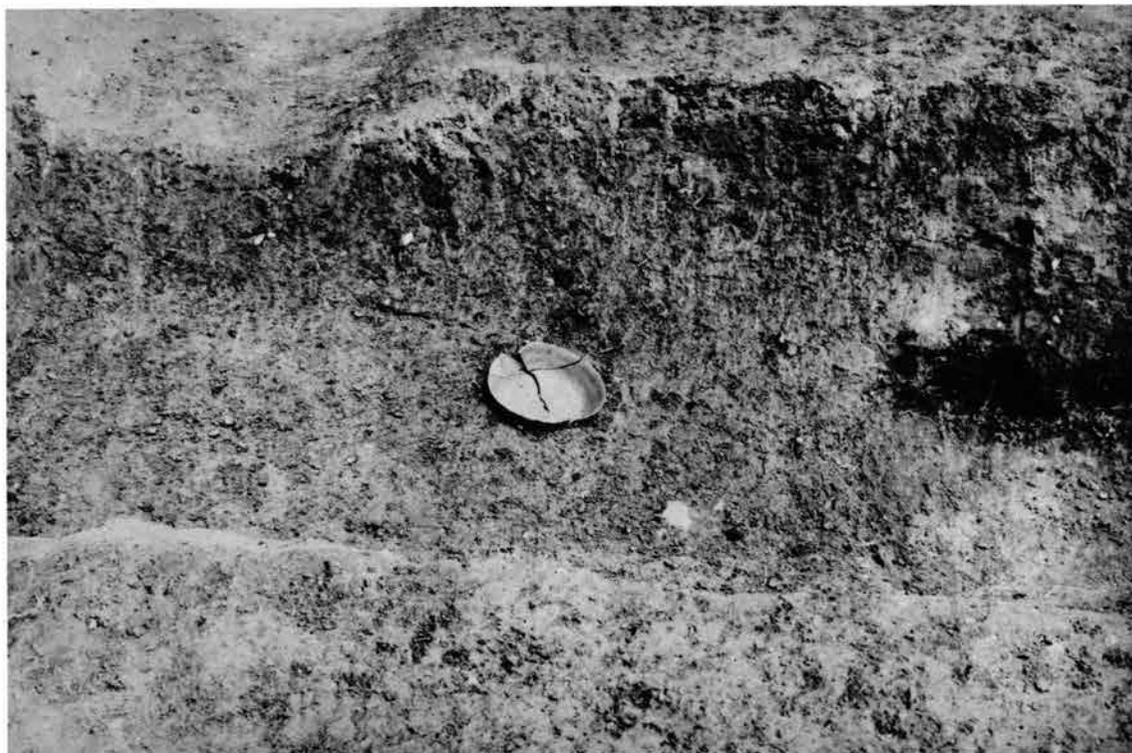
(1) SD12 (南から)



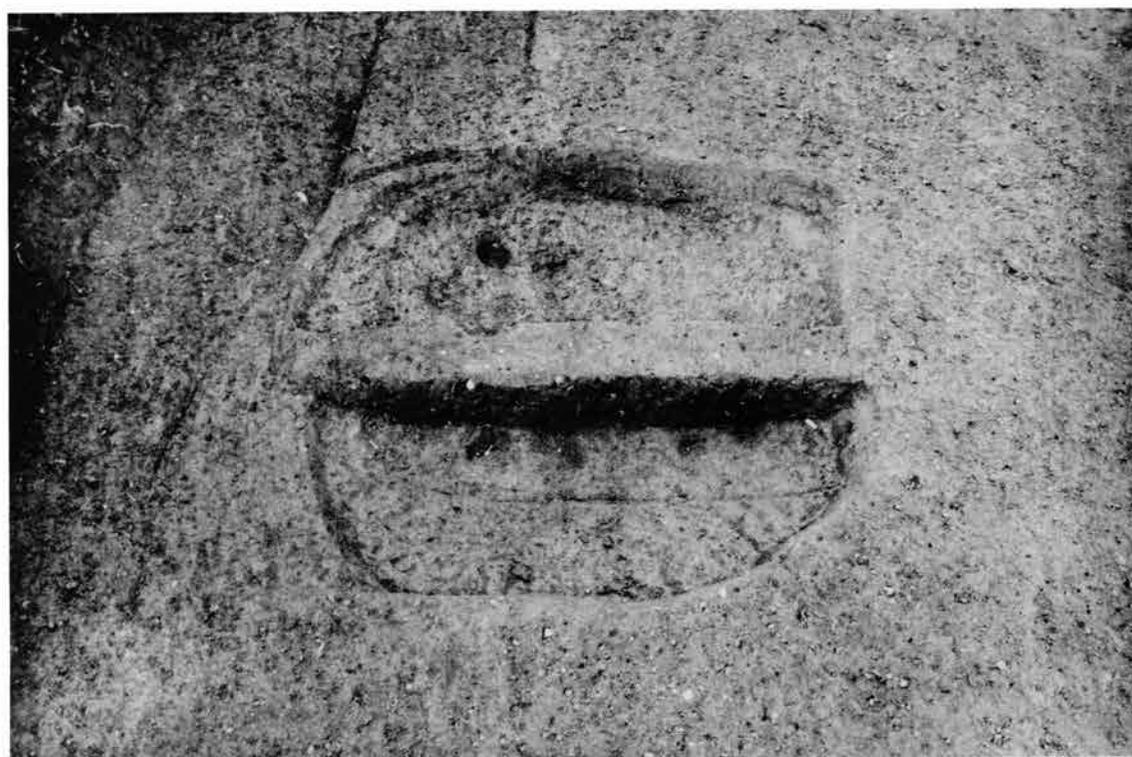
(1) SD12 (南から)



(2) SD12断面 (南から)



(1) SD12土器出土状況(西から)



(2) B調査区土壙SK14(西から)



1



2



3



4



7



5



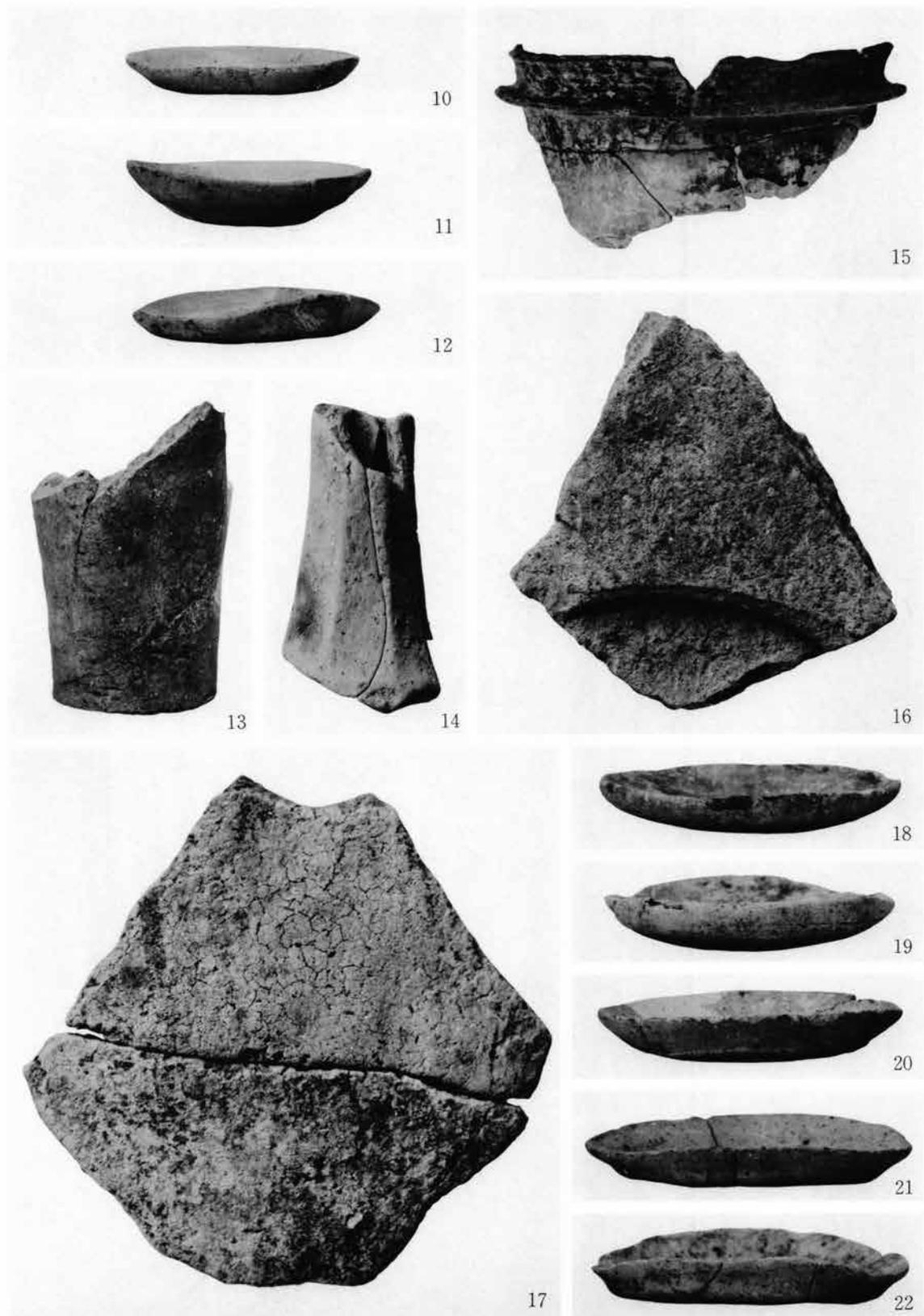
6



8



9



出土遺物 10~12. 茶褐色粘質土, 13・14・16. SD12, 17. (墨書土器) SX08, 18~22. SK14

京都府遺跡調査概報 第5冊

昭和57年7月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル
中御霊町424番地

☎ (075) 256-0416

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075) 441-3155(代)